千葉市和唐地遺跡

― 宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―

2024

有限会社　開成
千葉市教育委員会
株式会社　ノガミ

千葉市和唐地遺跡（わとうじ）

― 宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―

2024

有限会社　開成
千葉市教育委員会
株式会社　ノガミ

例　言

1.本書は、千葉市中央区星久喜町 938 外における宅地造成に伴う和唐地遺跡の発掘調査報告書である。

2.発掘調査及び整理作業は千葉市教育委員会が主体者となり、有限会社開成の委託を受けた株式会社ノガミがこれを支援した。

3.発掘調査の期間・面積・担当者は下記のとおりである。

期 間：令和 4 年（2022）12 月 8 日～令和 5 年（2023）5 月 24 日

面 積：3,400 ㎡／ 8,609.84 ㎡

担当者：木口裕史（千葉市埋蔵文化財調査センター 主任主事）

調査員：長谷川秀久（株式会社ノガミ 埋蔵文化財調査部 調査員）

4.整理作業及び報告書作成は長谷川が担当し、長谷川則子の協力を得た。

5.整理期間は令和 5 年 5 月 25 日から 6 年 2 月 29 日までである。

6.写真撮影は遺構・遺物とも長谷川秀久が行った。第 1 号竪穴住居跡出土土器集合写真と第 4 号竪穴住居跡出土絵画土器 4 の外面展開写真と内面写真は有限会社スギハラ (杉原寛大) が撮影した。

7.本書の執筆は第 1 章第 1 節を木口が行い、第 1 章第 2 節と付載は菊池健一氏、第 2 章第 1・2 節の石器は川端弘士・川端結花両氏の玉稿を賜った。その他の執筆と編集は長谷川秀久が行った。

8.出土資料・調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。

9.発掘調査から報告書刊行まで、次の方々や諸機関のご指導・ご協力を賜った。なお、石器の所見・実測図・写真は川端弘士・川端結花両氏からご提供賜った。縄文土器については齋藤弘道氏にご指導、ご教示を賜った。また、第 4 号竪穴住居跡から出土した絵画土器に関連して、菊池健一氏から玉稿を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表します。

鈴木 徹　有限会社小川重機　株式会社トキワ　株式会社マツイ商会

凡　例

1.本書に使用した座標は世界測地系に基づく平面直角座標Ⅸ系で、挿図中の方位記号は座標北を示す。また、土層断面図等で使用した標高の基準面は、T.P.（Tokyo Peil ／東京湾平均海面）である。

2.土層注記及び土器の色調判断は、『新版 標準土色帖』1993 年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）を基本とした。

3. 挿図等に用いた遺構の略記号は下記のとおりである。

竪穴住居跡：SI、土坑：SK、ピット：P、古墳：SZ、溝跡：SD、道跡：SF、不明遺構：SX、攪乱：K

4.本書で使用した地形図は、国土地理院発行（平成 31 年 2 月調整）2 万 5 千分の 1 地形図「千葉東部」及び 2,500 分の 1 千葉市都市図（令和 2 年 3 月調整）22-16 を使用した。

5.遺物写真の縮尺は土器を 3 分の 1、石器を 2 分の 1 で掲載した。異なる場合は個別に示した。

6.土器観察表の凡例は以下のとおりである。

「残存」分数は円周上の残存割合を示す。

「法量」単位は cm、g。口径・底径は上下端部で計測、丸い外反形状では外端部で計測した。

（ ）は復元値、〈 〉は残存値を示す。

「胎土」含有物を示す。骨針：海綿骨針、角：角閃石、パ：パミス、白：白色粒子（半透明粒子含む。石英あるいは長石）、透：透明粒子（石英）、黒：黒色粒子（不明）、赤：赤色粒子（褐鉄鉱ほか）、黄：黄褐色土粒子（土器状あるいはスコリア）、チャ：チャート、砂：不明鉱物、（多）：含有量多量。肉眼による表面観察であるので、含有量は多量のみ示した。

「焼成」掲載した土器はすべて焼成良好であるので省いた。

石器属性表の法量の単位は mm、gである。

7.遺物の注記は、調査年度「R4」－遺跡名「ワトウジ」－遺構記号番号－出土箇所・取り上げ区別・点上げ番号、の順で表記してある。

基本土層

1 層　10YR3/4 暗褐色土　ローム粒とロームブロックを多量含む。ややしまりあり、粘性あり。新規テフラ層、Ⅱ層相当

2 層　10YR4/6 褐色土　暗褐色土をブロック状に含み、ややしまりあり、やや粘性あり。ソフトローム漸移層

3 層　10YR4/6 褐色土　暗褐色土を細ブロック状に少量含み、下層ではハードロームブロックを中量含む。ややしまりあり、粘性あり。ソフトローム（Ⅲ層）

4層　10YR4/6 褐色土　褐色テフラと黒色スコリアを多量含む。しまり強。ハードローム層

5層　10YR4/6 褐色土　褐色テフラを極多量含み、黒色スコリア中量・赤褐色スコリアを微量含む。灰白色テフラを微量含む。しまり強・AT 層　第4層よりやや明るい

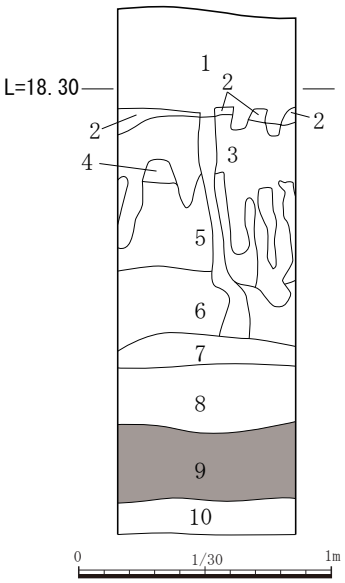
6層　10YR4/6 褐色土　黒色スコリアを微量含み、赤褐色スコリアを極微量含む。5層よりやや暗い。

7層　10YR4/6 褐色土　褐色テフラを多量含み、赤褐色スコリアを少量含む。

8層　10YR4/4 褐色土　褐色テフラを極多量含み、黒色スコリアと赤褐色スコリアを極多量含む。Ⅷ層相当か

9層　10YR3/4 暗褐色土　褐色テフラを多量含み、赤褐色スコリアを極多量含む。Ⅸ層相当か（第二黒色帯）

10 層 10YR4/4 褐色土　褐色テフラを中量含む。しまり強



本 文 目 次

例　言　・凡　例・目　次

第 1 章　調査と遺跡の概要

第 1 節　調査に至る経緯 …… 1

第 2 節　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1

第 3 節　調査の方法と経過 …… 2

第 2 章　検出した遺構と遺物

第 1 節　縄文時代

（1）遺構外出土遺物 …… 9

第 2 節　弥生時代

（1）竪穴住居跡 …… 11

（2）環濠跡 …… 18

第 3 節　古墳時代

（1）竪穴住居跡 …… 21

（2）古墳（和唐地古墳） …… 25

（3）遺構外出土遺物 …… 27

第 4 節　時期不明の遺構（土坑・ピット以外）

（1）不明遺構（円形周溝状遺構） …… 27

（2）道 跡 …… 27

第 5 節　土坑・ピット …… 27

第 3 章　まとめ ―調査の成果と課題― …… 29

付載　第 4 号竪穴住居跡出土絵画土器について …… 39

写真図版・報告書抄録

挿 図 目 次

図 1　周辺遺跡位置図 …… 2

図 2　調査区位置図 …… 4

図 3　全体測量図 (1) …… 6

図 4　全体測量図 (2) …… 7

図 5　全体測量図 (3) …… 8

図 6　縄文時代遺構外出土遺物 …… 9

図 7　第2号竪穴住居跡 …… 12

図 8　第2号竪穴住居跡出土遺物 …… 13

図 9　第3号竪穴住居跡 …… 14

図 10　第3号竪穴住居跡出土遺物 …… 15

図 11　第4号竪穴住居跡 …… 16

図 12　絵画土器・鉢3・4出土状況図 …… 16

図 13　第4号竪穴住居跡焼土セクション …… 16

図 14　第4号竪穴住居跡出土鉢4の線刻画 …… 17

図 15　第4号竪穴住居跡出土遺物 …… 18

図 16　環濠跡出土遺物 …… 18

図 17　環濠跡 (1) …… 19

図 18　環濠跡 (2) …… 20

図 19　第1号竪穴住居跡 …… 21

図 20　第1号竪穴住居跡　遺物出土状況図 …… 22

図 21　第1号竪穴住居跡出土遺物 …… 23

図 22　古墳（和唐地古墳） …… 24

図 23　古墳 (和唐地古墳) 埋葬施設 …… 25

図 24　古墳出土遺物 …… 26

図 25　古墳時代遺構外出土遺物 …… 27

図 26　土坑出土遺物 …… 28

図 27　唐古・鍵遺跡 22 次 SK-101 絵画土器 001 …… 39

図 28　千葉市本郷向遺跡例 …… 40

図 29　第4号竪穴住居跡出土鉢4の線刻画の各意匠 …… 41

表 目 次

表 1　石器属性表 …… 10

表 2　出土遺物観察表 …… 32

表 3　土坑一覧表 …… 34

表 4　ピット一覧表 …… 36

写 真 図 版 目 次

写真図版 1
1. 調査風景（第1号竪穴住居跡）
写真図版 2
1. 調査区全景　（上が北）
写真図版 3
1.SI01　遺物出土状況　（南東から）
2.SI01　A セクション　（西から）
3.SI01　遺物出土状況　（北東から）
4.SI01　完掘状況　（南東から）
5.SI01　P1 セクション　（北東から）
写真図版 4
1.SI02　完掘状況　（南東から）
2.SI02　セクション　（北から）
3.SI02　遺物出土状況　（東から）
4.SI02　P2　完掘状況　（南東から）
5.SI02　炉　遺物出土状況　（南から）
写真図版 5
1.SI03　完掘状況　（南東から）
2.SI03　B セクション　（南東から）
3.SI03　遺物出土状況　（東から）
4.SI03　P1　完掘状況　（南東から）
5.SI03　P2　完掘状況　（南東から）
写真図版 6
1.SI04　完掘状況　（南東から）
2.SI04　遺物出土状況　（北東から）
3.SI04　P1　完掘状況　（西から）
4.SI04　絵画土器（南群）出土状況　（北東から）
5.SI04　絵画土器（北群）出土状況　（北東から）
写真図版 7
1.SD01　完掘状況（C 区。左手は SI04）　（北西から）
2.SD01　高杯5出土状況　（南から）
3.SD01　G セクション　（南東から）
4.SF01　検出状況　（南東から）
5.SX01　完掘状況　（北西から）
写真図版 8
1.SZ01　完掘状況　（上が北）
2.SZ01　完掘状況　（上が南）
写真図版 9
1.SZ01　周溝 B セクション　北東　（西から）
2.SZ01　周溝 B セクション　南西　（南東から）
3.SZ01　周溝 B セクション　南西　（北西から）
4.SZ01　周溝 C セクション　北西　（北東から）
5.SZ01　埋葬施設　木棺掘方完掘状況　（西から）
6.SZ01　主体部　B セクション南半　（南東から）
7.SZ01　埋葬施設墓壙完掘状況　（西から）
写真図版 10
1.SK01　セクション　（南東から）
2.SK01　完掘状況　（南西から）
3.SK03　セクション　（東から）
4.SK03　完掘状況　（南から）
5.SK08　セクション　（北西から）
6.SK08　完掘状況　（南西から）
7.SK14　セクション　（南西から）
8.SK14　完掘状況　（東から）
写真図版 11
1.SK41　セクション　（西から）
2.SK41.42　完掘状況　（南から）
3.SK88　セクション　（南から）
4.SK88　完掘状況　（東から）
5.SK103　セクション　（南から）
6.SK103　完掘状況　（東から）
7.SK151　セクション　（北西から）
8.SK151　完掘状況　（南西から）
写真図版 12
1.SK153　セクション　（南東から）
2.SK153　完掘状況　（北から）
3.SK162　セクション　（西から）
4.SK162　完掘状況　（南から）
5.SK163　セクション　（南西から）
6.SK163　完掘状況　（南から）
7.SK164　セクション　（南から）
8.SK164　完掘状況　（南から）
写真図版 13
1.P7　セクション　（南西から）
2.P7　完掘状況　（南から）
3.P21　セクション　（南西から）
4.P21　完掘状況　（南から）
5.P33　セクション　（南から）
6.P33　完掘状況　（南から）
7.P65.66　セクション　（北東から）
8.P66　完掘状況　（北から）
写真図版 14
1.P118　セクション　（北東から）
2.P118　完掘状況　（南から）
3.P184　セクション　（南東から）
4.P184　完掘状況　（南から）
5.SK13　遺物出土状況　（南から）
6.SK13　セクション　（東から）
7. 基本層序　（西から）
写真図版 15
縄文時代土坑出土遺物
縄文時代遺構外出土遺物
SI02 出土遺物 (1)
写真図版 16
SI02 出土遺物 (2)
写真図版 17
SI03 出土遺物
SI04 出土遺物
環濠跡出土遺物
写真図版 18
SI01 出土遺物
古墳（和唐地古墳）出土遺物
古墳時代遺構外出土遺物
奈良時代土坑出土遺物

第１章　調査と遺跡の概要

第１節　調査に至る経緯

令和４年４月 12 日付けで有限会社開成より、宅地造成計画に掛かる埋蔵文化財保護法第 93 条に基づく届出が提出された。事業範囲は和唐地遺跡および琵琶首台遺跡にまたがる範囲であったが、試掘調査の結果、和唐地遺跡に掛かる範囲において、古墳時代の竪穴住居跡を確認したため、令和４年５月 12 日付け「4 千教埋セ第 26 号」にて工事着手前に確認調査を実施するよう通知した。

確認調査は令和４年７月 14 日から同年８月 15 日の期間で実施され、古墳時代の竪穴住居跡３軒、円形周溝墓１基、溝状遺構２条、時期不明土坑数基が確認された。これによって、事業範囲 8,609 ㎡の内、3,300 ㎡が本調査対象範囲とされた。

その後、事業者より本調査対象範囲について発掘調査依頼が提出され、事業者からの委託を受けた株式会社ノガミの支援のもと、千葉市教育委員会が主体者となり、令和４年 12 月８日から令和５年５月 22 日まで発掘調査を実施した。

第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡

和唐地遺跡の所在する千葉市は千葉県庁所在地であるとともに、貝塚のまちとして知られている。本遺跡の周辺には特別史跡加曽利貝塚をはじめ、国指定史跡の月の木貝塚、花輪貝塚、荒屋敷貝塚がある。

本遺跡は市域中央部にあり、最も広い流域面積を占める都川水系の下流域左岸（南岸）に位置する。千葉市中央区の市街地を乗せる都川の広い沖積低地に臨む台地北縁近くにあって、標高 16 ～ 18 mほどを測る。遺跡地の東西には谷津が入り、東の星久喜遺跡、西の矢作三山塚遺跡が乗る台地と画されている。

この辺りは律令制下には千葉郡池田郷の一部に比定され、都川対岸の台地は糟□（くさかんむりに依。かそり）郷と考えられる。南の上総国府から下総国府へ向かう沿海幹線道と、印旛沼東岸を経て香取の海、霞ヶ浦経由で常陸国府へ向かう内水面を通る幹線道の分岐点付近と言われ（武田ほか 1984）、古来より頻繁な往来を思わせる（黒川 1979）。

今回の調査では縄文・弥生・古墳時代、平安時代の遺物が検出されたが、主要な集落遺構を確認した弥生時代と古墳時代に絞って、本遺跡周辺の動向を概観しておく。

弥生時代　台地西端の猪鼻城跡（田中 2007）では中・後期の竪穴住居跡が発見されており、調査成果を踏まえた近年の研究では、中期宮ノ台式の段階に遠く中部高地・関東北西部の系譜を引く土器があることが明らかにされている（小林 2022）。なお、この地区では今回、調査されたような小環濠集落は見当たらない。

東側では星久喜遺跡（山本編 1984）、支川都川右岸の城之越遺跡で弥生時代中期から古墳時代にかけての集落・墓域が調査されている。また、南方の荒久遺跡（萩原 1991）、地蔵山遺跡（渡辺 1992）等の千葉寺地区遺跡群でも同時期の資料が明らかにされている。

都川の対岸では、辺田遺跡で弥生中（～後）期の方形周溝墓が確認されている。やや上流に再葬墓が検出された新田山遺跡（小林 2023）が杉原荘介氏の調査以来注目され（渡辺 2004）、葭川の中流域に同じく再葬墓と考えられる壺が出土した南屋敷遺跡がある。中・後期では東関東系の住居跡等が確認された車坂遺跡（武田ほか 1974）、東田遺跡（同）、石神遺跡（中村 1968、沼澤ほか 1977）、戸張作遺跡（菊池 1988・89）があり、戸張作遺跡では中期の小規模環濠集落が発見されている。東田遺跡と石神遺跡、戸張作遺跡が後期に共存したのであれば、南関東系土器を使う集団と東関東系土器を使う集団の棲み分け

南屋敷
踏形
駒形
戸張作
石神
浜道
貝殻後
東田
西ノ台
荒屋敷貝塚
車坂
都町山王
(旧兼坂)
立木南
辺田
御所ヶ原郭
田向南
新山
姫宮
台畑
加曽利貝塚
古山
若郷
花輪貝塚
猪鼻城
矢作
三山塚
和唐地
琵琶首台
星久喜
城之越
西屋敷
天神台
葛城弁天台
荒久
千葉寺
地蔵山
中野台
観音塚
鶯谷津
山ノ神
大北口
月ノ木貝塚
へたの台
郷西
栄福寺
坊屋敷
千葉市
中央区
都川
支流都川
蔑川
坂月川
佐倉街道(近世)
房総往還(近世)
千葉東JCT
松ケ丘IC
【凡例】
弥生集落
弥生・古墳集落
古墳集落
古墳
0
1/25,000
1km

図1　周辺遺跡位置図

がなされた可能性も指摘できる。

古墳時代　都川下流域には多くの集落遺跡が分布する。谷津をはさんだ東の星久喜遺跡、西の矢作三山塚遺跡があり、ともに発掘調査されている。星久喜遺跡の前期集落は顕著で、20 軒以上が確認されている。また、先に述べた石神遺跡、戸張作遺跡等の他に、立木南遺跡（菊池ほか 1988）等で古墳・集落跡の調査が進められ、古山遺跡（加曽利貝塚と谷津をはさんで南隣。田中・菊池 1990）の竪穴住居跡から鉄屑とともに三角板革綴冑の三角板などが出土していることも注目される。

墳墓は星久喜遺跡で出現期方墳が 2 基確認され、うち 1 基からは畿内系譜の壺を発見、市域最古の古墳とみられている。都川対岸の辺田遺跡でも方墳（方形周溝墓）1 基が調査されている。前期古墳も都川水系では踏形遺跡・戸張作遺跡・石神遺跡・姫宮遺跡で確認されており、いずれも方墳である。中期古墳も南方のおゆみ野地区ほどではないが確認されている（石神遺跡・東田遺跡・坊屋敷遺跡）。中でも、石神遺跡 2 号墳は長大な粘土槨に二組の石枕・立花が配置され、副葬された石製・鉄製模造品など標識的な資料となっている。しかし、墳丘規模は直径 25 mの円墳と小型である。市域の中期古墳は「単時にせよ小規模に群集するにせよ、際立って目立つ古墳は少ないと考えてよい」とされ（長原 2009）、今回確認した本遺跡 SZ01 も丘陵頂部の単独墳であるが低墳丘の小型墳である。

また、古墳時代以降の製鉄遺構が千葉寺地区遺跡群の山ノ神遺跡などで確認されていることも注目される。後の律令制下で都ぶりが見られる大北遺跡（萩原 1986）や千葉寺遺跡を成立させる基盤となる地域と考えられ、今後、更なる地域研究が期待される地域である。

第 3 節　調査の方法と経過

発掘調査　調査区は確認調査結果により設定された北東方向から南西方向へ最大約 70.3 m・北西方向から南東方向へ最大約 58.6 mであり、面積は 3,400 ㎡である。表土の掘削及び排土はバックホー（0.4 ㎥、文化財仕様バケット）とクローラーダンプ（0.45 ㎥）を用いて、排土は事業地内に仮置きしながら北東側より作業を進めた。

調査区全体を網羅するように世界測地系第Ⅸ系に基づいて 10 m方眼グリッドを設け、補足として任意杭を打設した。ベンチマークは調査区内の南東壁中央に 1 か所（T1 標高 17.791 m）・北東壁南西端部に 1 か所（T2 標高 17.988 m）・北西壁中央に1か所（T3 標高 18.000 m）の 3 か所に設置した。方眼グリッドには西から東へ算用数字（1 ～ 8）を、北から南へアルファベット（A ～ I）を付した。各グリッドの呼称は北西角の杭名を適用する。

遺構確認面は基本層序第 3 層・新規テフラ中層とした。遺構確認は鋤簾を用いて精査を行い、遺構の切り合いに留意しながら遺構プランをマーキングした。主軸方向や切り合い関係に留意して土層観察用の畔（セクションベルト）を設け、移植鏝を用いて調査した。遺物は遺構ごとに出土位置を記録して取り上げた。竪穴住居跡はセクションベルトで 4 分割して主軸方向から時計回りに番号を付し（1 ～ 4 区）、微細な遺物は区画ごとに一括して取り上げた。遺構の測量は平板測量とレベル測量を行った。縮尺は遺構確認図を 100 分の 1、遺構平面図は 20 分の 1 を基本とし、必要に応じて 10 分の 1、環濠と古墳墳丘は 40 分の1で作図した。

写真撮影は写し込み台帳を作成して基本写真台帳とし、2,426 万画素のフルサイズデジタルカメラを用いた。

整理作業　遺物の注記はポスターカラーを用いて手書きにて行った。土器の接合にはセルロース系接着剤（セメダイン C）を用い、補強にはエポキシ系樹脂（バイサム）を用いた。遺物の実測は手測りで行った。作成した遺構図、遺物実測図は Adobe Photoshop CC へ書き込み、Adobe Illustrator CC を用いてデジタ

8.6
都川の低地
斜面
標高16mのライン
星久喜北公園
16.5
星久喜緑地
和唐地遺跡
斜面
谷津
14.1
浅い谷
琵琶首台遺跡
遺跡範囲
18.1
事業範囲
0
1/1,000
50m

図2　調査区位置図

ルトレースした。遺物の写真撮影は 2,426 万画素のフルサイズデジタルカメラを用いて撮影、一部、撮影業者に依頼した。

調査の経過　以下、発掘調査の経過を日を追って記す。

12 月8日　市教育委員会とともに調査区の設定を行う。

12 日　安全柵の設置を行う。重機の搬入を行い表土除去を開始する。便宜上北東側より開始する。

26 日　発掘機材の搬入を行う。表土除去作業の継続。調査区北西部に 3 軒の竪穴住居跡のプランを確認する。ほか、土坑及びピット群のプランを確認した。

28 日　明日からの正月休みに備え、調査区及び休憩所テントの養生を行う。

1月6日　調査を再開する。作業員着任。調査区東側の大型攪乱を精査し、木根の除去作業を行う。

12 日　表土除去作業を終了し、重機の搬出作業を行う。古墳の精査作業から着手。プラン確認を行う。12 m級の円墳と思われる。

19 日　古墳の表土廃土を終了する。墳頂部に主体部と思われるプランを確認した。 周溝の掘削を行う。周溝の断面形は逆台形状である。

24 日　古墳周溝の掘削を終了し、周溝の断面観察を行う。底部に堆積した自然堆積土の上部に墳丘崩落土が流入した様相が伺える。

26 日　調査基準杭の打設を行う。遺構確認作業を継続する。

31 日　遺構確認を終了し、遺構精査作業に着手する。調査区の北西方向から南東方向に分断する溝に 5 か所のトレンチを設け精査を行う。

2月3日　溝のトレンチ調査を継続する。東側では薬研状断面と思われた溝であるが、西側では V 字状となる。台地を分断する環濠であることが判明する。

10 日　調査区北西部に位置する 3 軒の竪穴住居跡に重複する土坑の調査を終了し、住居跡の調査に着手する。SI01 から着手する。

16 日　住居跡の精査を継続する。SI01 は消失住居であり、おびただしい焼土が床面に確認された。出土遺物から古墳時代前期の所産と思われる。古墳主体部に 4 本の土層観察用ベルトを設け精査に着手する。

20 日　住居跡の精査を継続する。SI02 と SI03 は比較的大型の平面形隅丸方形の住居跡である。出土遺物から弥生時代中期の所産と考える。

3月1日　土坑・ピットの精査に着手する。便宜上北東側から着手する。便宜上、クローラーダンプを用いて廃土する。

9日　環濠・SD01 の掘削に着手する。土量に配慮し出土遺物に留意しながら上層は重機にて掘削することとした。

16 日　環濠が北西調査区外に延びることから、調査区を約 100 ㎡拡張することとなる。

17 日　SI01 ～ 03 の完掘調査を完了。SI04 は環濠の重複部分の調査終了を待って着手することとした。土坑及びピットの調査を継続する。

30 日　SI04 の精査に着手する。SI04 は環濠に削平された弥生時代中期の所産と考えたい。土坑及びピットの精査を継続する。

4月7日　SI04 のおびただしい焼土の断面観察を行う。焼土は投棄されたものではなく住居の焼失に由来するものであることが分かる。土坑及びピットの精査作業を継続する。

15 日　SI04 の調査は掘方調査を残し終了する。土坑及びピットの調査を継続する。古墳主体部の調査を再開する。主体部は木棺直葬を想定する。出土遺物は皆無である。

28 日　環濠の調査を終了する。

5月2日　すべての遺構を完掘して航空写真撮影を行う。4 軒の竪穴住居跡に断面観察用ベルトを設置し、掘方調査に着手する。

12 日　墳丘の断ち割り調査に着手する。墳丘は旧表土と新期テフラ層が堆積しており、盛土は後の耕作により削平されたものと思われる。

17 日　掘方調査を終了し、すべての調査が終了する。教育委員会の終了確認を受ける。

22 日　発掘機材の撤収準備作業を行う。安全柵の撤去を行う。

24 日　発掘機材の撤収作業を行い全ての業務を終了する。

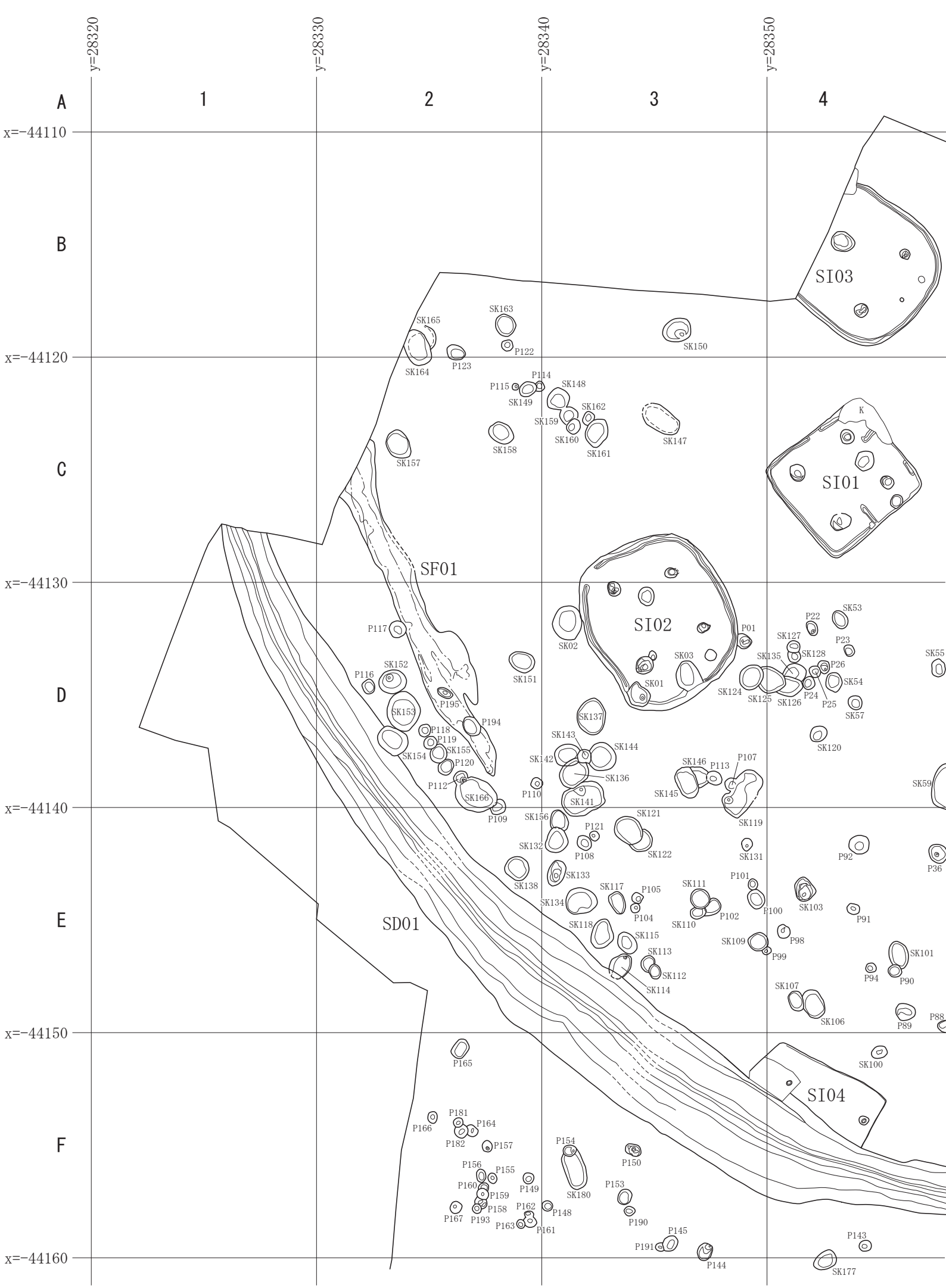

y=28320
y=28330
y=28340
y=28350
A
B
C
D
E
F
1
2
3
4
x=-44110
x=-44120
x=-44130
x=-44140
x=-44150
x=-44160
SI03
SI01
SI02
SI04
SF01
SD01
SK165
SK163
SK164
P123
P122
SK150
P114
P115
SK149
SK148
SK162
SK159
SK160
SK161
SK158
SK147
SK157
K
SK02
SK03
SK01
P01
SK127
SK128
SK135
SK124
SK125
SK126
P22
SK53
P23
P26
SK54
P24
P25
SK57
SK55
SK120
SK151
P117
SK152
P116
P195
SK153
P194
P118
P119
SK155
SK154
P120
P112
SK166
P109
SK137
SK143
SK144
SK142
SK136
P110
SK141
SK146
P113
P107
SK145
SK119
SK59
SK156
P121
SK121
SK132
P108
SK122
SK131
P92
P36
SK138
SK133
SK117
P105
SK111
P101
SK134
P104
P102
P100
SK103
P91
SK118
SK110
SK115
SK109
P98
P99
SK113
SK112
SK114
SK101
P94
P90
SK107
SK106
P89
P88
P165
SK100
P181
P166
P164
P182
P157
P154
P150
P156
P155
P160
P149
SK180
P153
P159
P158
P162
P148
P167
P193
P163
P161
P190
P145
P191
P144
P143
SK177

図 3　全体測量図 (1)

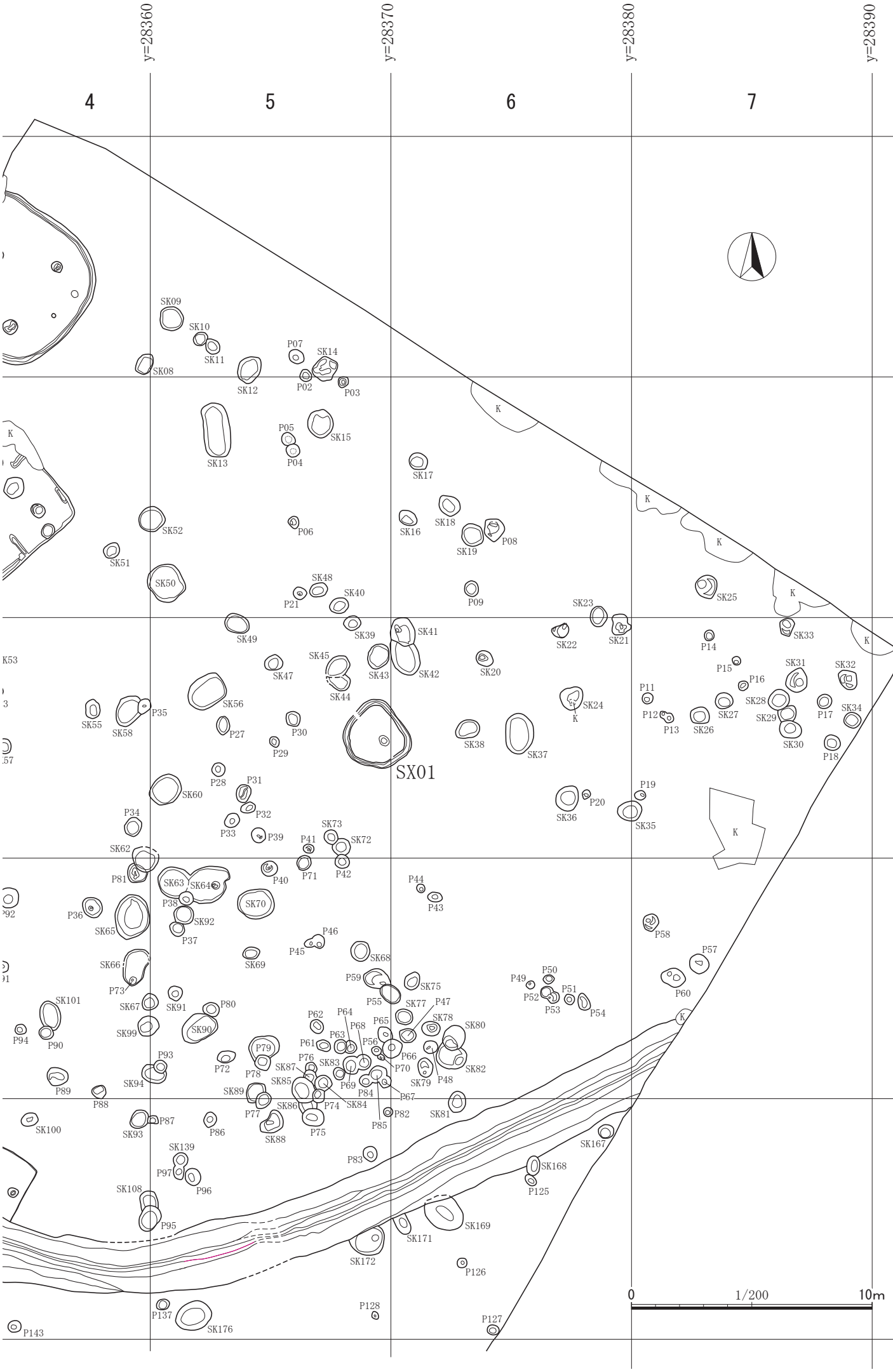

y=28360
y=28370
y=28380
y=28390
4
5
6
7
8
B
C
D
E
F
SX01
SK09
SK10
SK11
SK08
SK12
P07
SK14
P02
P03
SK13
P05
SK15
P04
SK17
SK52
P06
SK16
SK18
SK19
P08
SK51
SK50
SK48
P21
SK40
P09
SK23
SK25
SK49
SK39
SK41
SK22
SK21
SK33
P14
SK47
SK45
SK43
SK42
SK20
P15
SK31
SK32
P16
SK56
SK44
SK24
P11
SK28
P17
SK34
SK55
SK58
P35
P27
P30
P12
SK27
SK29
P13
SK26
SK30
P29
SK38
SK37
P18
P28
P31
SK60
P19
P20
SK36
SK35
P34
P32
P33
P39
SK73
P41
SK72
SK62
P81
P40
P71
P42
SK63
SK64
P44
P43
P36
SK70
P38
SK92
SK65
P37
P58
P46
P45
SK68
P57
SK66
SK69
P59
SK75
P49
P50
P51
P52
P53
P54
P60
P73
SK101
SK67
SK91
P80
P55
SK77
P47
SK78
SK80
P94
P90
SK99
SK90
P62
P64
P68
P65
P63
P61
P56
P66
P93
P79
P76
P70
SK82
P72
P78
SK87
SK83
SK79
P48
P89
SK94
SK85
P69
P84
P67
SK89
P88
SK86
P74
SK84
SK81
P77
P82
SK100
P87
SK93
P86
SK88
P75
P85
SK167
SK139
P83
SK168
P97
P96
P125
SK108
P95
SK169
SK171
SK172
P126
P128
P137
SK176
P127
P143
K
0
1/200
10m

図 4　全体測量図 (2)

y=28320
y=28330
y=28340
y=28350
y=28360
y=28370
2
3
4
5
6
x=-44150
x=-44160
x=-44170
x=-44180
F
G
H
I
SI04
SD01
SZ01
K
0
1/200
10m

図5 全体測量図(3)

第２章　検出した遺構と遺物

本章では調査成果を遺構の帰属時期ごとに分けて記述するが、土坑とピットについてはすべてを時期分類することが困難であるので、一括して一節を設けて後述する。

第１節　縄文時代

(1) 遺構外出土遺物

6 は C4 グリッドで検出した半両面加工の木葉型尖頭器。器長 10cm を超える大型で、裏面に主要剥離面を大きく残すが左右対称で秀品である。基部に自然面がわずかにみられるが、素材打面の一部と思われる。主要剥離面にバルブのふくらみは観察されない。先端部に調整が施されず、側面に平坦面も残されたままなので刺突具ではないが、調整過程の未成品か刺突具以外の用途の可能性もある。素材はガラス質黒色

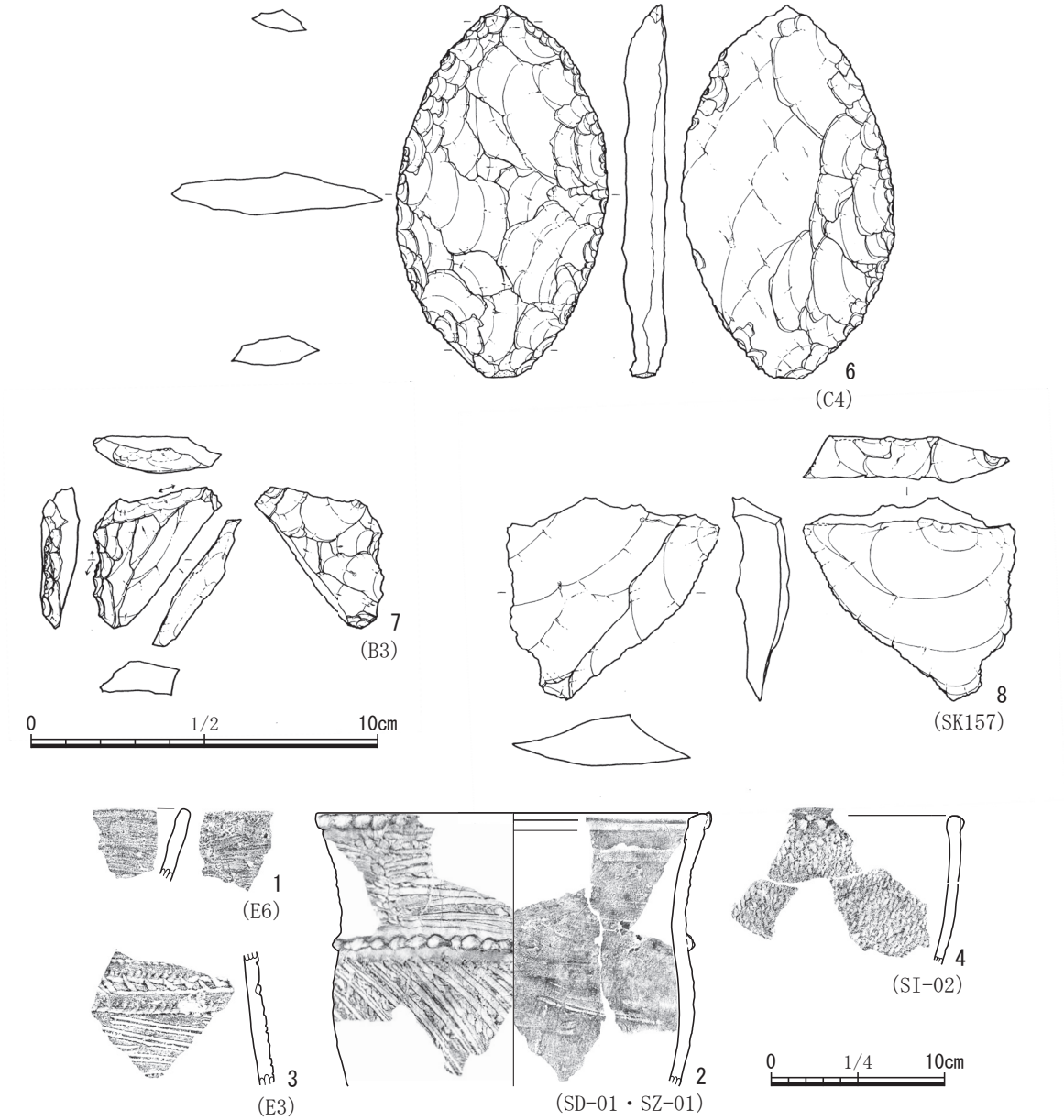


図６　縄文時代遺構外出土遺物

安山岩。やや緻密さに欠けざらついた手触りがするが、そのせいか表面の稜線が風化してわかりづらい箇所が多い。運搬痕の可能性もある。縄文草創期か。

7 は B3 グリッドで検出。左側縁にやや内湾した削器状の調整加工と潰れが認められるため、抉入石器と分類した。石材はガラス質黒色安山岩である。表面の右側に残された面はポジティブバルブと確認できるため、素材剥片を表裏逆に用いられていることがわかる。左側の剥離面はバルブの厚みを取り除くような平坦剥離。裏面（素材背面）には求心的な剥離が残されていることから、両面加工石器の加工中に折れてしまったものを再加工して製品にしているものと思われる。縄文草創期の大型の尖頭器と共伴することが知られ、上の尖頭器と同時期の可能性がある。

8 は古墳時代中期の第 157 号土坑で検出されたガラス質黒色安山岩の不定形剥片。頭部調整・打面調整ともに観察されない。打面転移を行い、大型の剥片を効率的に剥離しているものと思われる。

1 は早期後半・茅山式土器。内外面調整は削痕か。3 は前期後半・浮島Ⅱ式土器で半截竹管による条痕と幅広の変形爪形文が施文されている。2・4 は後期中葉・加曽利 B 式土器（2 は B2 式）の紐線文粗製土器。4 には沈線が見られない。確認調査でも同型式土器が報告されている。

表 1　石器属性表

遺構番号	番号	注記	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
遺構外	6	C4 グリッド	尖頭器	ガラス質黒色安山岩	108	61	17	95.67	未成品か刺突具以外の可能性あり
遺構外	7	B3 グリッド	抉入石器	ガラス質黒色安山岩	41	37	11	13.73	加工中に折損、再加工
遺構外	8	SK157No1	剥片	ガラス質黒色安山岩	59	61	16	39.97	
SI02	19	No23	敲石	蛇紋岩	90	38	19	109.14	

第 2 節　弥生時代

(1) 竪穴住居跡

第 2 号竪穴住居跡

遺 構　**位置：**C・D3 グリッド。**重複関係：**第 1 ～ 3 号土坑と第 1 号ピットに切られる。**平面形状：**隅丸長方形。**主軸方向：**N-29°-W。**規模：**縦 7.50 m、横 6.35 m、深さ 0.52 m。**覆土：**ローム粒子を中量含む黒褐色土が自然堆積する。**炉：**土器片埋設炉。火床部の南側に甕 16 の胴部半周分の大破片を中心に、大型壺 14 の肩部破片など数個体分の土器片を三重に重ねている。壺底部 18 は埋没時に乗ったものである。焼土粒を多く含む黒褐色土の覆土が堆積する。**床構造：**掘方は存在せず、床面には主柱穴内側に部分的にわずかな硬化面が認められたが明瞭ではない。周溝は壁下を一巡し、暗褐色土が堆積する。**柱穴：**主柱穴 P1・P2 は東側壁底部が、P3・P4 は西側壁底部が外側に潜り込む。立柱もしくは抜き取りに起因するものか。柱穴底部には柱当たり痕が確認されている。**貯蔵穴：**南東壁近くの P5。暗褐色土が堆積する。

遺 物　**出土状況：**炉の埋設土器の他では、甕 1 と鉢 4、壺 12・15 が床面直上の遺物であるが、ほとんどは覆土下～上層に含まれていた破片である。

各説：1・2 は横走羽状文の甕。1 は頸部がくの字に屈曲して粘土紐積上げ痕を残して段部下端に押捺痕をもつ。3 と 16 は頸部の屈曲が緩やかなもの。4 の小型鉢は欠損するものの、6 単位の波状口縁と考えられる。口縁端部には鋭利なヘラ刻みを施す。5 は黒色を呈するナデ調整の無文小型壺。6 と 10 は頸部中位に段を有し、6 の段部には結節縄文によるものとみられる押捺が巡る。10 と 14 は同形同大の壺と思われるが、同一個体の判断は難しい。13 は櫛描きの大きな弧文の一部であろうか。6 と 11 は多段の結節縄文、9 は櫛描き波状文が施される。

19 は偏平短冊形のやや軟質な蛇紋岩（斜方輝石カンラン岩起源）の自然礫が使用された敲石。素材表面は全体に滑々で一定方向の擦れが観察される。これは河川敷で採集される転石にみられる水食作用による現象である。

正面中央部付近から長軸下端部、及び左側縁部に細かい敲打痕が観察される。敲打痕はφ 1 ～ 3mm、深さ 0.7 ～ 0.2mm 程で、敲打の集中している個所は径 1cm 程の凹みとなっている。左側縁部には長軸に対して横方向の摩耗痕も観察される。敲打痕は石器表面中央部から下端部に偏りがみられ、上部に支点を置いて何か（尖ったもの）を敲いたものなのか。

所 見　出土土器は佐倉市大崎台遺跡の 4 期（黒沢 1997）、房総 6 期・宮ノ台式後半期（大村 2005）、弥生時代中期末葉に位置づけられる。

SI02 AB

1 層 10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土少量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

2 層 10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土微量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

3 層 10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土微量・黒褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり

4 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土微量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

5 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック少量・炭化物ブロック極微量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

6 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土微量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

7 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック少量・黒褐色土ブロック極多量・しまりややあり・粘性ややあり

8 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・炭化物ブロック極微量・黒褐色土ブロック極多量・しまりややあり・粘性ややあり

9 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック極多量・しまりややあり・粘性ややあり

10 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

SI02 P1 ～ P5

1 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり

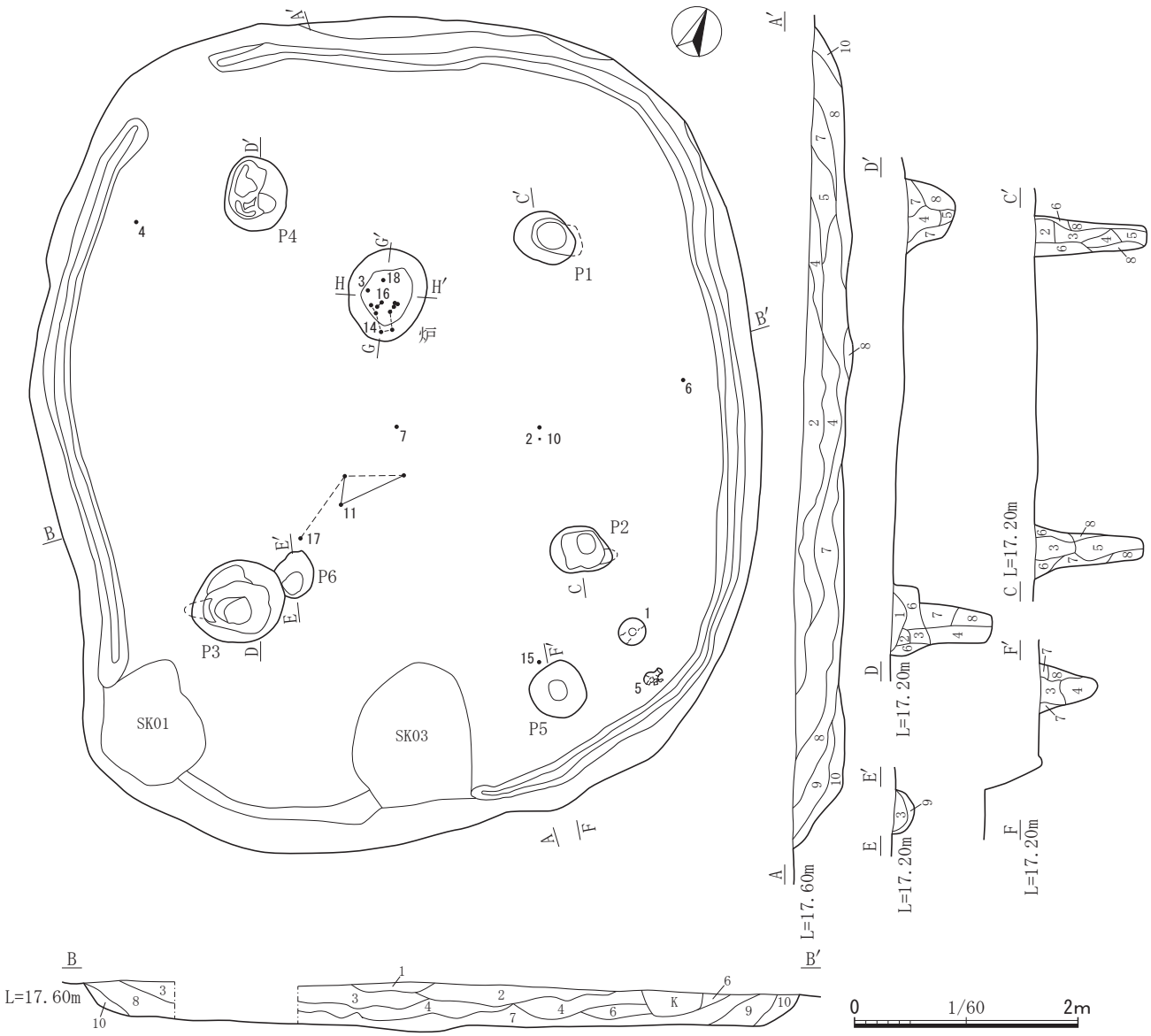
2 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・炭化物ブロック極微量・暗褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

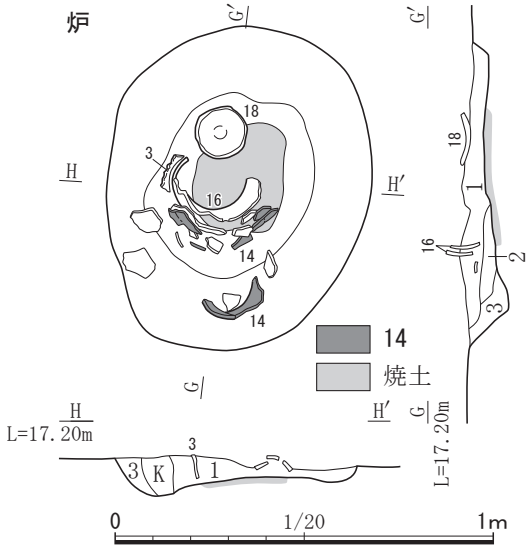
3 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・焼土極微量・暗褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり

4 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり

5 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土極微量・暗褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

（続きは次ページ）





6 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土極微量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり

7 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり

8 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック極多量・しまりあり・粘性ややあり

9 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

SI02 炉

1 層 10YR3/4 暗褐色土・ローム粒子・ブロック 1 ～ 2mm 多量・焼土粒子・ブロック 1 ～ 3mm 少量・炭化物ブロック 3 ～ 5mm 微量・黒褐色土ブロック 3 ～ 10mm 多量・しまりやや有り・粘性やや有り

2 層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒子・ブロック 1 ～ 5mm 中量・焼土粒子・ブロック 1 ～ 3mm 少量・暗褐色土ブロック 3 ～ 5mm 中量・しまりやや有り・粘性やや有り

3 層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒子・ブロック 1 ～ 5mm 多量・黒褐色土ブロック 5 ～ 10mm 中量・しまりやや有り・粘性やや有り

図 7　第 2 号竪穴住居跡

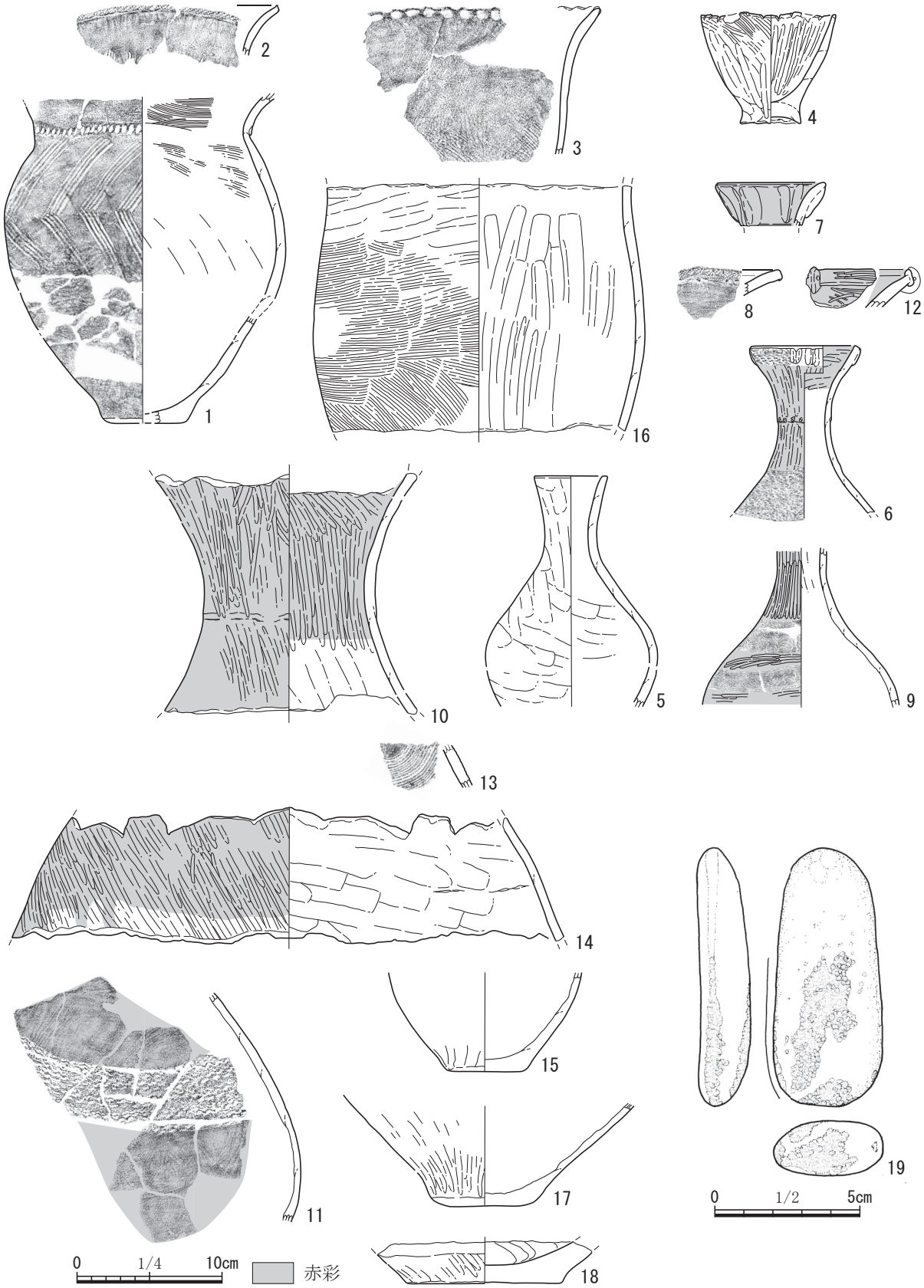


図８　第２号竪穴住居跡出土遺物

第３号竪穴住居跡

遺 構　**位置：**B4 グリッド。**平面形状：**隅丸長方形。**主軸方向：**N-50°-W。**規模：**縦方向 5.30 m以上、横方向 5.95 m、深さ 0.47 m。**覆土：**下層にはロームブロックを多く含む暗褐色土が、その上層にはローム粒を多く含む黒褐色土がレンズ状堆積する。**炉：**覆土は下層では焼土ブロックを多く含む暗褐色土が、上層には焼土粒と炭化ブロックを多く含む暗褐色土がレンズ状堆積する。掘方は持たず、火床直下では地山が厚さ最大 13cm の深さまで被熱し、暗褐色に変色してカリカリに固く締まる。**床構造：**主柱穴より内側の床面には部分的にわずかな硬化面の広がりが確認された。掘方は存在しない。周溝は壁面直下を一巡し、暗褐色土が堆積している。**柱穴：**確認された 2 本はいわゆる「五平（状）柱」を示し、掘方が東西方向に長い。

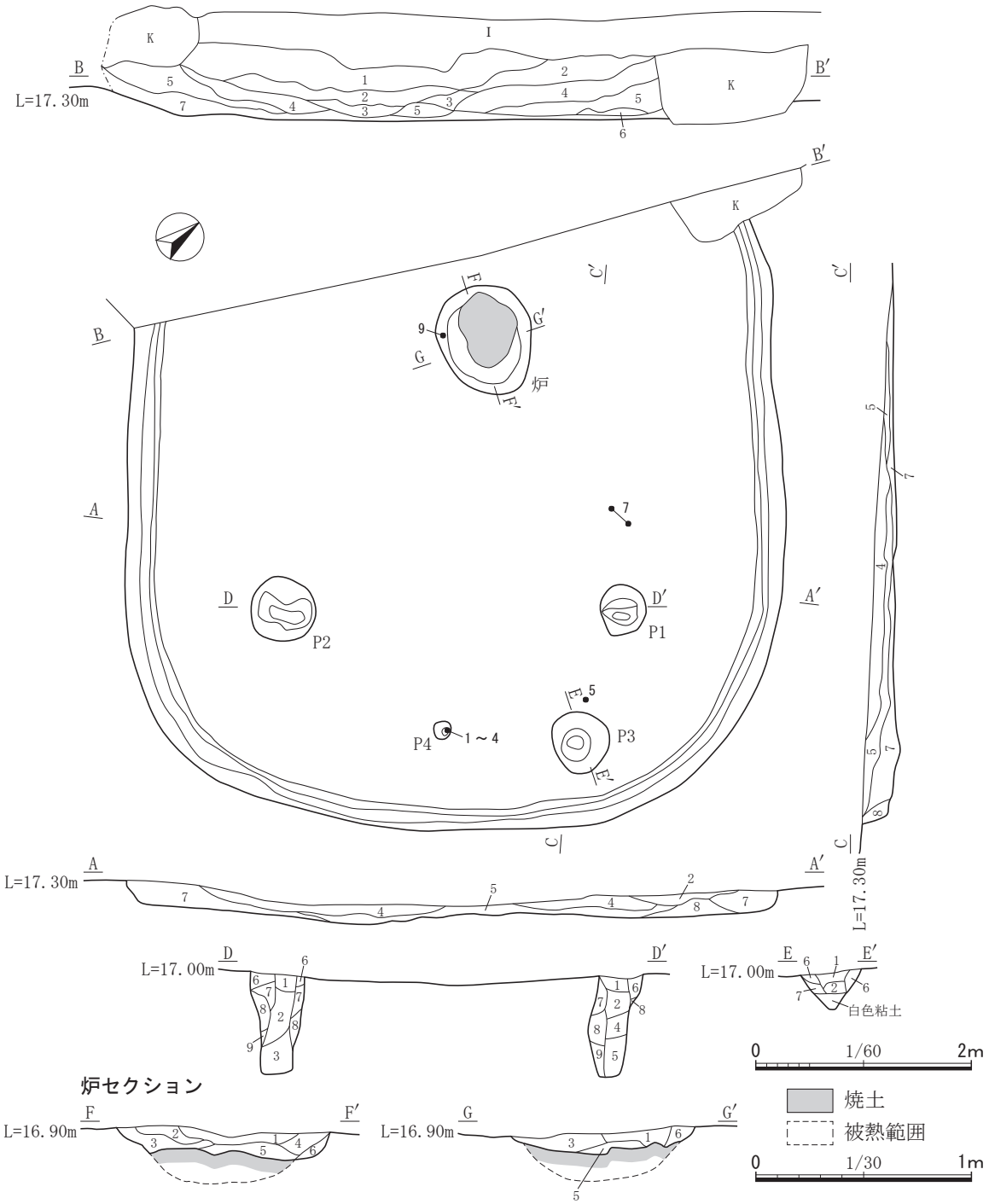


図９　第３号竪穴住居跡

底部には東西方向に長く柱当たり痕が確認された。P4 は出入り口施設に伴うピットであろう。**貯蔵穴：**南東壁際の P3。ロームブロックを多く含む黒褐色土が人為堆積し、底部に白色粘土塊が検出された。

遺 物　出土状況：P4 付近の床面上で土器の破片が固まって検出され、甕 1 ～ 4 が含まれる。調査した覆土が浅く、自ずと出土遺物は覆土下層に包含されていたものとなるが、破片ばかりである。

各説：1・2 は横走羽状文の甕。1 は細身・小型で櫛描きが 3 段確認できる。2 の櫛描きは口縁端部にまで及び、頸部の屈曲は極めて弛緩していて深鉢形を呈するものと思われる。口縁端部の押捺は爪痕が残る指頭によるもので、内面からのみ施される。8 は甕の底部で、外面下端に指？押捺痕が並ぶ。

所 見　本住居跡出土土器群も概ね第 2 号住居跡と同時期（大崎台 4 期・房総 6 期）に位置づけてよいと思われる。

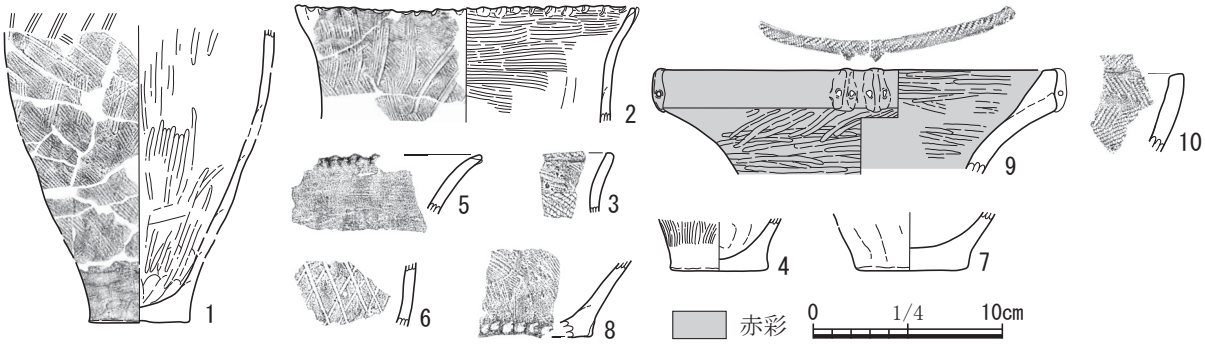


図 10　第３号竪穴住居跡出土遺物

SI03 AB

1 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土中量・黒褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり

2 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土中量・黒褐色土ブロック微量・しまりややあり・粘性ややあり

3 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・焼土極多量・黒褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり

4 層 10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

5 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土中量・炭化物ブロック少量・しまりややあり・粘性なし

6 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

SI03 C

1 層 10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土少量・暗褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり

2 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土微量・暗褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり

3 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土少量・暗褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり

4 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック少量・暗褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり

5 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり

6 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック極多量・しまりややあり・粘性ややあり

7 層 10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土極微量・炭化物ブロック極微量・暗褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり

8 層 10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック微量・しまりややあり・粘性ややあり

SI03 P1 ～ P3

1 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり

2 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり

3 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり

4 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり

5 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

6 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり

7 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

8 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまり強・粘性ややあり

9 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまり強・粘性ややあり

第４号竪穴住居跡

遺 構　**位置：**F3・4グリッド。**重複関係：**北西壁部は確認調査トレンチ14によって破壊されている。南西側の大半を環濠に切られる。**平面形状：**方形。**主軸方向：**N-62°-W。**規模：**縦5.85 m、横2.50 m以上、深さ0.27 m。**覆土：**床面上には焼土と炭化ブロックを少量含む暗褐色土が、その上層にはロームブロックを多量に含む暗褐色土が人為堆積する。**床構造：**床面はほぼ全面に硬化面が広がる。掘方は持たない。北東壁と南東壁際がわずかに低くなるが、周溝は確認されていない。**柱穴：**P1は柱痕跡が確認された。底部には柱当たり痕が確認されている。P2は柱痕跡が確認されず、底部には硬化面が確認されない。断面形がやや擂鉢状であり貯蔵穴の可能性もある。

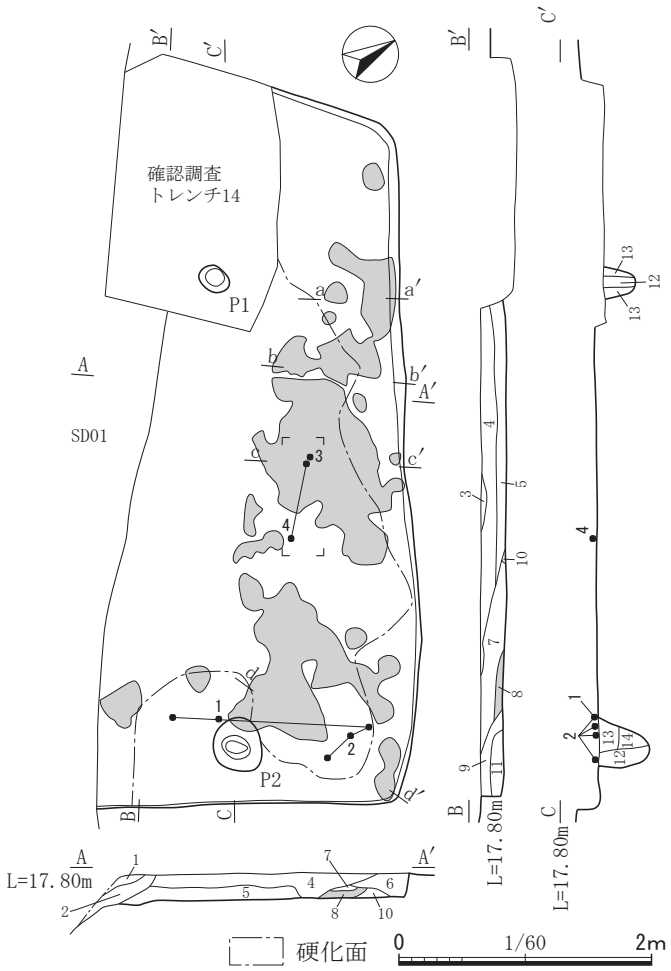


図11　第４号竪穴住居跡

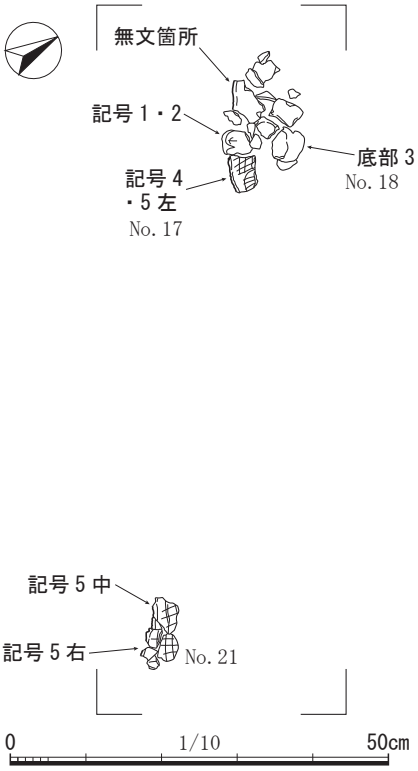


図12　絵画土器・鉢３・４出土状況図

SI04

1 層 10YR4/3 にぶい黄褐色土・ロームブロック少量・焼土微量・しまりあり・粘性あり・SD01 覆土
2 層 10YR5/4 にぶい黄褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性あり・SD01 覆土
3 層 10YR4/3 にぶい黄褐色土・ロームブロック少量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性あり
4 層 10YR3/4 暗褐色土・焼土多量・しまりあり・粘性あり
5 層 10YR3/4 暗褐色土・焼土少量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性あり
6 層 10YR4/3 にぶい黄褐色土・ロームブロック中量・焼土微量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性あり
7 層 7.5YR4/4 褐色土・ロームブロック少量・焼土多量・しまりあり・粘性あり
8 層 2.5YR5/8 明赤褐色土・焼土極多量・暗褐色土ブロック中量・しまり強・粘性強・焼土純層
9 層 7.5YR4/3 褐色土・しまり強・粘性あり
10 層 10YR4/3 にぶい黄褐色土・焼土少量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり
11 層 10YR3/2 黒褐色土・炭化物ブロック少量・しまりあり・粘性あり
12 層 10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性強
13 層 10YR3/3 暗褐色土・しまりあり・粘性ややあり
14 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性あり

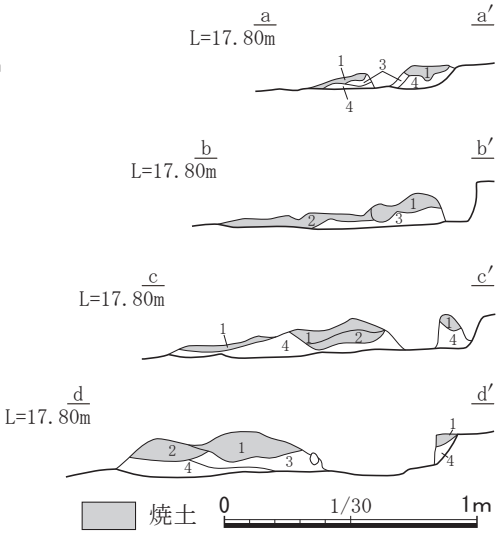


図13　第４号竪穴住居跡焼土セクション

遺 物　**出土状況：**壺１・２は床面直上で検出された。底部３と鉢４は直接接合しないが、出土状況及び胎土・成形・焼成から同一個体と判断される。４は２か所に分かれ、北側の一群は３とともに焼土の上に乗る状態で、南側の一群は床面直上で検出された。

各説：１は折返し口縁状を呈するやや丁寧なつくりの口縁部であるが、器種は定かではない。４は器壁や器形が一定せず口縁部のヨコナデ調整がない粗製の小型鉢であるが、短く屈曲する内斜口縁など類似する器形は鴨川市東条地区遺跡群の根方上ノ芝条里跡Ⅰ地点 SI04 出土土器が参考となる（野中ほか 2000）。３の底部は接合しないが、出土状態も合わせ同一個体と判断される。外面上半部のほぼ全周と内面の一部に先端が鋭利ではない細い棒状工具による線刻画が記されている（付載参照）。

所 見　本住居跡は火災住居跡である。焼土は北東壁際から南東壁際に及び、断面観察の結果、焼土と床面の間には暗褐色土の間層が存在する。焼土は火災消火のための投げ込まれた土が焼土化したものか。遺物の出土状況から焼却された住居跡であろうか。

出土遺物が乏しく時期は明確にできないが、宮ノ台式期であることは明らかである。弥生中期の住居跡及び環濠跡出土土器との型式学的距離はなく、環濠に切られることから、その直前段階のものと思われる。

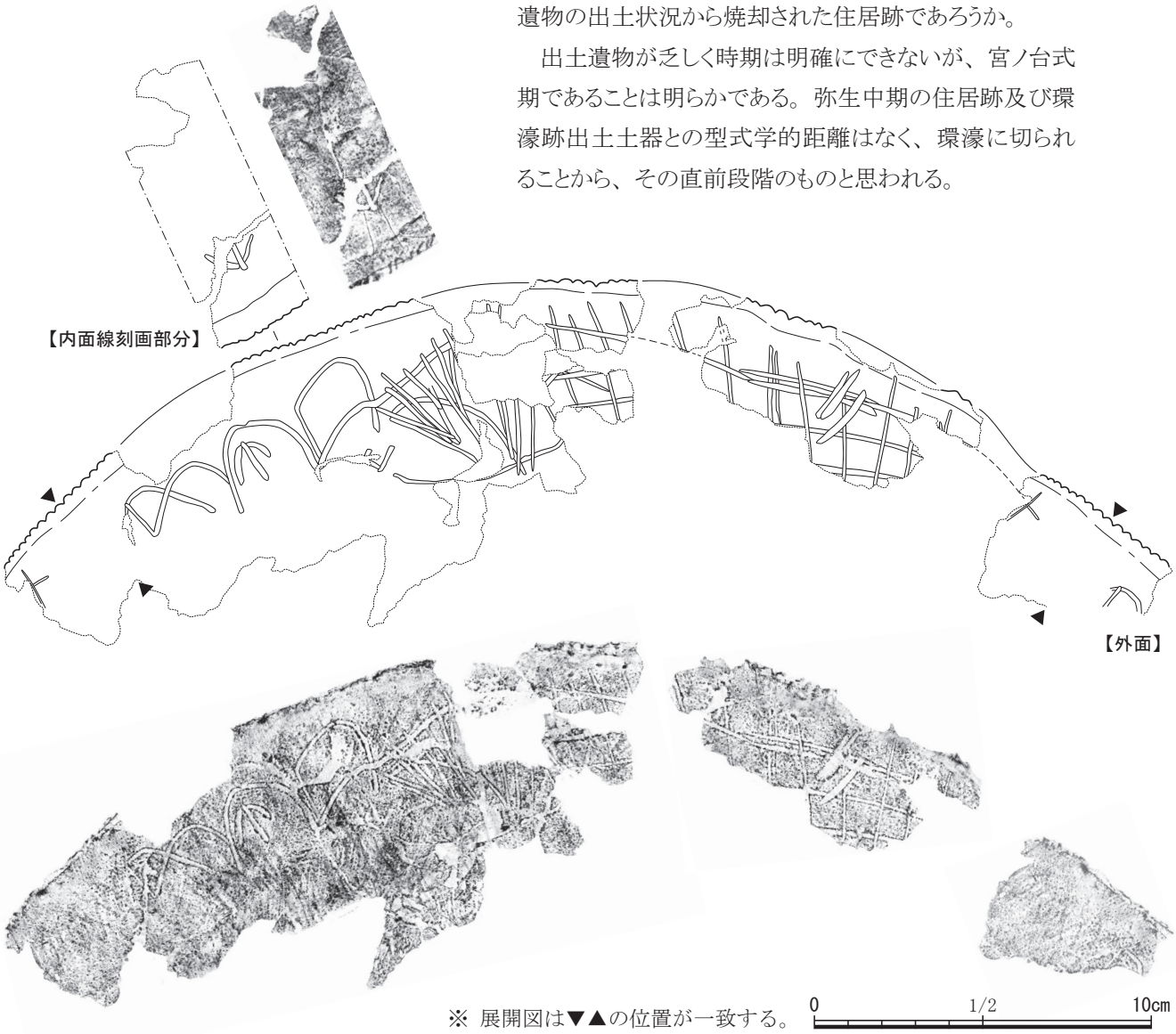


図 14　第４号竪穴住居跡出土鉢４の線刻画

SI04 焼土
1 層 10YR3/4 暗褐色土・焼土粒子・ブロック極多量・黒褐色土ブロック中量・ややしまりあり・粘性ややあり
2 層 5YR5/8 明赤褐色土・黒褐色土ブロック少量・暗褐色土ブロック中量・ややしまりあり・粘性なし
3 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土ブロック微量黒褐色土ブロック多量・ややしまりあり・粘性ややあり
4 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土ブロック中量・黒褐色土ブロック少量・ややしまりあり・粘性ややあり

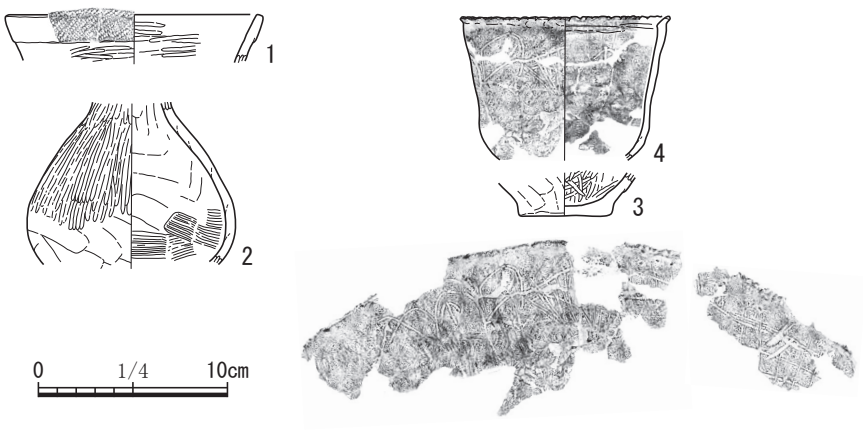


図 15　第４号竪穴住居跡出土遺物

(2) 環濠跡

遺 構　**位置：**C ～ F・1 ～ 7 グリッド。セクションベルトを境に A ～ G 区に分けた。調査区を東西に横断して弧を描くように検出された。**重複：**第 4 号竪穴住居跡、第 114・169・170・171 号土坑、P190 を切る。第 154・168 号土坑に切られる。**規模・形状：**調査区中央 4 ライン付近から西は溝底が一段低くなり、上端幅が広がる。東半部は上端幅最大 2.5 m、深さ 1.3 m、西半部は上端幅最大 4.5 m、深さ 1.8 m。E2 グリッドから西側は再び幅が狭くなる。横断面形は下部に傾斜変換点をもつ V 字状であるが、幅の広い西半部東側はなだらかな V 字状を呈する。底部はU字状である。底部に掘削痕とみられる箇所があった（F6 グリッド）が、明確ではない。**覆土：**下部にロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積し、最上層では黒褐色土がレンズ状堆積する。セクション F 付近では暗褐色土上面（第 8・9 層）で硬化面を確認したが広がりは確認されなかった。

遺 物　**出土状況：**下層（第 14 層相当）に弥生中期土器 1・3 が検出された。古墳中期高杯 4 は上層の第 1 層と第 2 層の境界線付近で出土した。

各説：1 は外面上半部のヘラナデが左下がりに施される独特な甕である。口縁端部内面の指押捺（爪痕あり）の方向からすると製作者は右利きと推察される。底面中央には焼成後に外からの回転穿孔がなされるが貫通していない。4 は広口壺の系列と思われるが、頸部と肩部に無文帯をはさんで多段の結節縄文が施され、赤彩は無文帯から肩部縄文帯にまで及ぶ。2 は外面に左上がりの条痕（右上がりの線状痕はガジリ）、内面はタテ方向のケズリが加えられる。弥生前期の荒海式であろうか。

所 見　やはり、住居跡と同様、宮ノ台式後半期に位置づけられるであろう。5 は覆土上層で検出された古墳時代中期前半の高杯である。この時期までくぼみとして残っていたと考えられる。また、セクション A（トレンチ）で灰釉陶器瓶類の胴下半部の破片が検出されている。器壁は薄手で釉層は薄いが露胎部分はなく 9 世紀～ 10 世紀前半のものであろうか、詳細時期は判断できない。

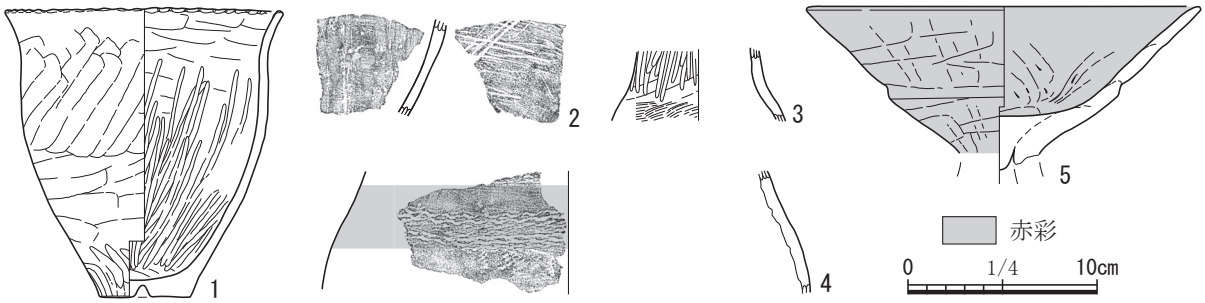


図 16　環濠跡出土遺物

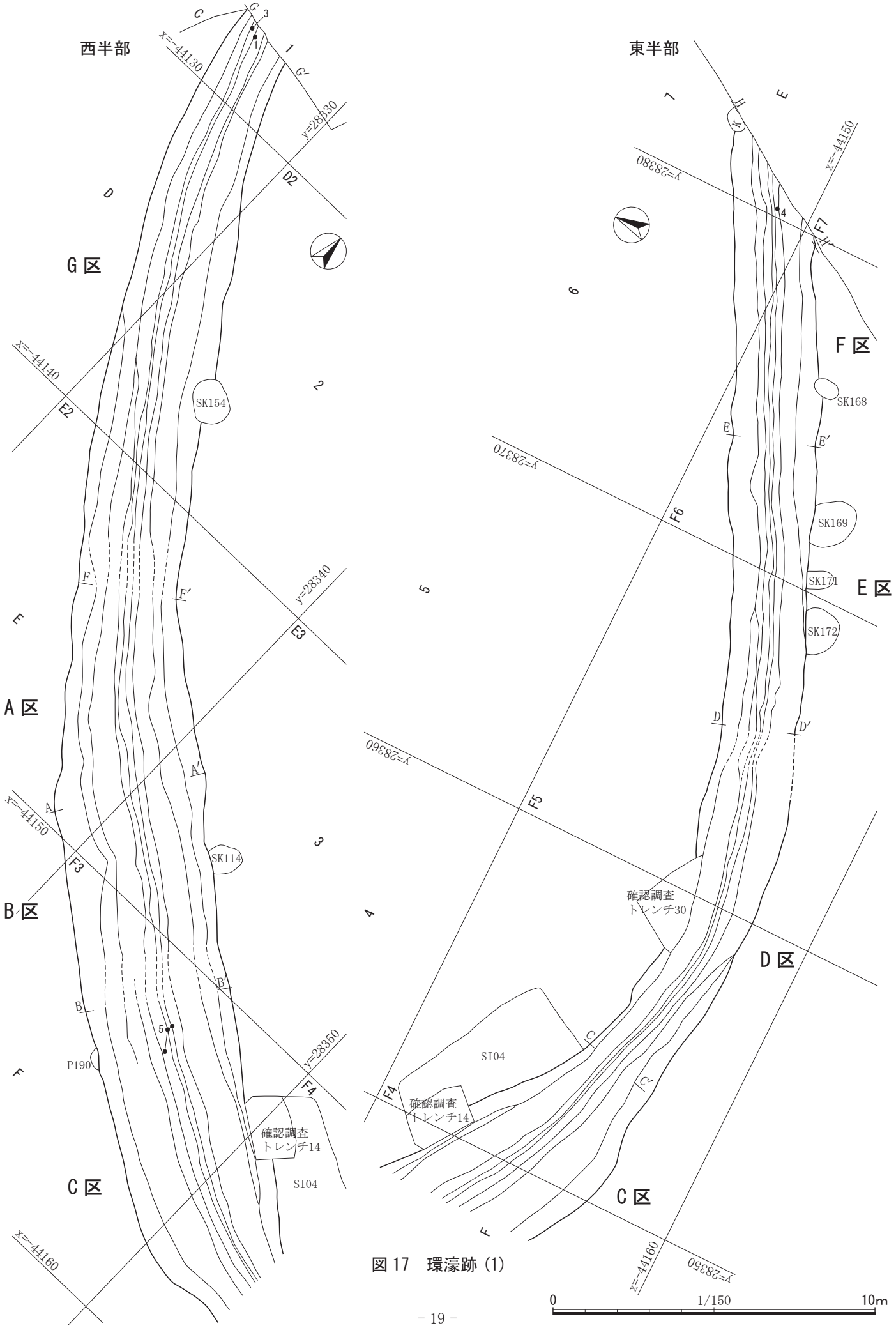

西半部
東半部
G区
A区
B区
C区
D区
E区
F区
SK154
SK114
SK168
SK169
SK171
SK172
P190
SI04
確認調査
トレンチ14
確認調査
トレンチ30
x=-44130
x=-44140
x=-44150
x=-44160
y=28330
y=28340
y=28350
y=28360
y=28370
y=28380
0
1/150
10m

図 17　環濠跡 (1)

第 3 節　古墳時代

(1) 竪穴住居跡

第 1 号竪穴住居跡

遺 構　**位置：**C4 グリッド。**平面形状：**ほぼ正方形。**主軸方向：**N−47°−E。**規模：**縦 5.40 m、横 5.07 m、深さ 0.42 m。**覆土：**ロームブロックを多く含む暗褐色土。人為堆積。**床構造：**掘方は壁下と 4 本の主柱穴の間部分と炉下部がやや深い。周溝は南東壁下・南西壁下・北西壁下にのみ存在する。南東壁下と北東壁下に間仕切り溝が確認された。**炉：**覆土は焼土ブロックを多く含む暗褐色土が堆積する。焼土直下では最大約 15cm の厚さで被熱痕跡が確認され、褐色の地山土が暗褐色に変色しカリカリに硬化している。**柱穴：**柱痕跡（P2 では炭化した柱根）が確認され、掘方覆土第 5 層は貼り床である。底部には柱当たり痕が明瞭に確認された。**貯蔵穴：**南東の P1 横に確認され、覆土は焼土混じりの暗褐色土が人為堆積する。

遺 物　**出土状況：**ほとんどは床面上で検出。壺 14 は焼土の上に乗っている。全体的に完形率が高い。

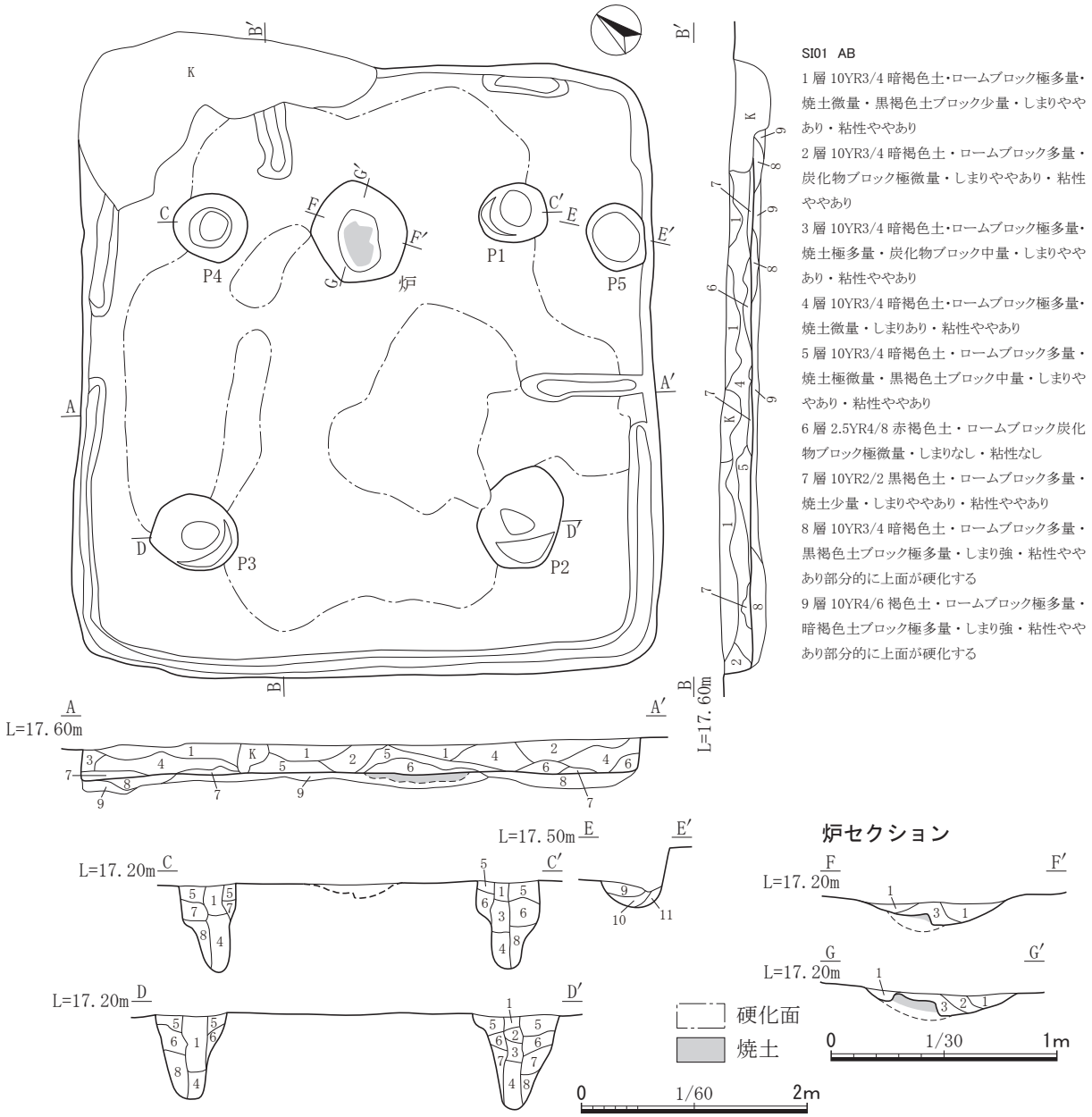


図 19　第 1 号竪穴住居跡

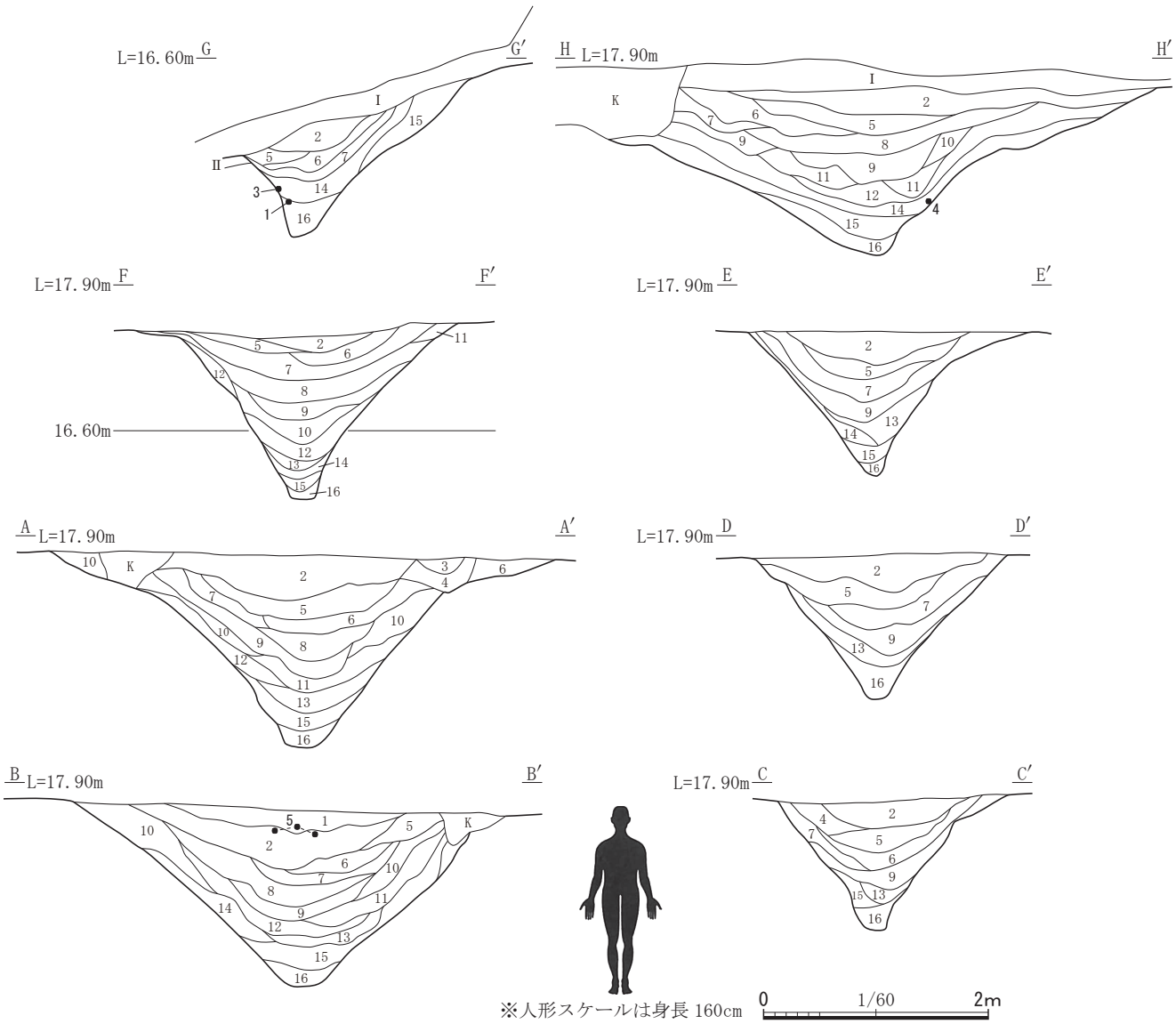


図 18　環濠跡 (2)

SD01

1　10YR3/2 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりがある・やや粘性あり
2　10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
3　10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・やや締まりあり・やや粘性あり
4　10YR3/2 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・やや締まりあり・やや粘性あり
5　10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック少量・やや締まりあり・やや粘性あり
6　10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
7　10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック少量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
8　10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
9　10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・やや締まりあり・やや粘性あり
10　10YR3/4・暗褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック極多量・やや締まりあり・やや粘性あり
11　10YR3/4・暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・やや締まりあり・やや粘性あり
12　10YR3/4・暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
13　10YR3/2 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック極多量・やや締まりあり・やや粘性あり
14　10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
15　10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック少量・やや締まりあり・やや粘性あり
16　10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土と黒褐色土がラミナ堆積・締まりあり・やや粘性あり

各説：2はやや下膨れ気味の形態で、口縁端部に押捺はなく端部内面にヨコナデによる匙面が作られる。3は厚手のつくりで煮沸痕跡もなく、広口壺の系列で考えるべきであろう。6はハケメを記さず長胴化しているが、つくりはシャープである。13は大型であるが薄手のつくりで、頸が太く広口壺の類か。15も極めて薄手のつくりの軽量の小型壺。

所 見　床面には焼土と炭化材が確認されている。焼土は炭化物層の上に乗っており、消火する目的で投入された土が焼けたものか、あるいは住居の構築材であろうか。焼土直下の炭化材は住居跡中央からやや放射状に、あるいはその放射状の炭化材に直行する形で検出された。遺物の出土状態から火災に見舞われた住居跡を想定する。また、硬化面と貯蔵穴の位置から南東壁側に出入口があったかもしれない。

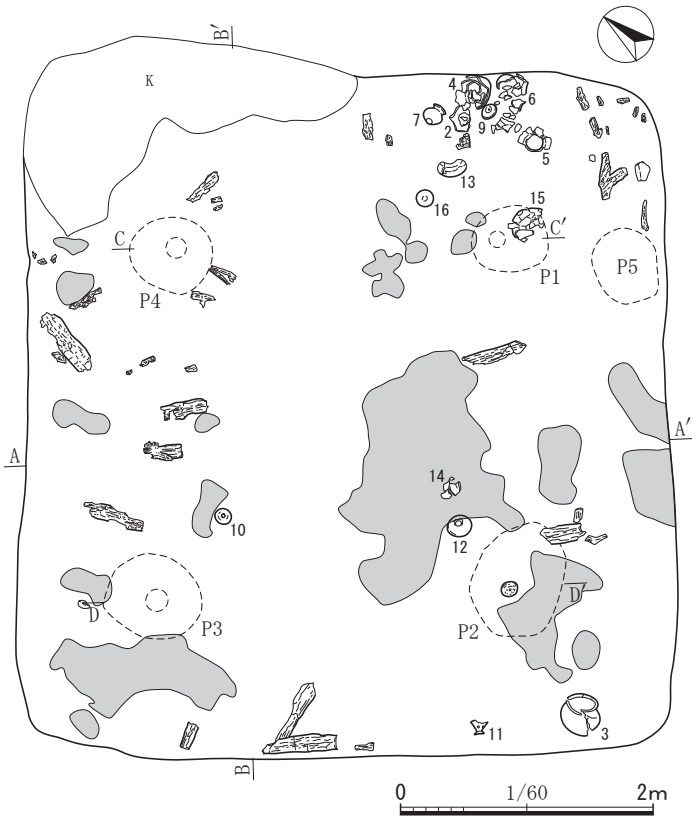


図 20　第１号竪穴住居跡　遺物出土状況図

本住居跡から出土した甕と壺は、弥生時代後期からの系列を示す頸部の屈曲が緩やかなもの（1 ～ 3）と古墳時代前期の属性を示す屈折するもの（4 ～ 7・12 ～ 15）がある。その他のものも台付甕脚台部（8）と高杯（9・10）、器台（11）、椀（16）は後者に伴うものであろう。1は砂質の胎土や整形からも弥生中期・宮ノ台式である。4・6と混在して取り上げられ、大破片であるが埋没時の混入と思われる。2の形態は弥生終末期の中台式まで下るだろうか。

後者の型式は古墳前期後葉・草刈Ⅱ期前半（加藤 2000・2005）・草刈１式期（大村 2009）に位置づけられるが、前者の型式の存在から、本住居跡の帰属時期はその中でも古い段階が考えられるだろう。

SI01 炉

1 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・焼土微量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり

2 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック極多量・焼土微量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性なし

3 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土少量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性なし

SI01 P1 ～ P5

1 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・焼土極微量・暗褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり

2 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・焼土極微量・暗褐色土ブロック中量・しまりなし・粘性ややあり

3 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック極多量・焼土少量・炭化物ブロック極微量・暗褐色土ブロック中量・しまりなし・粘性ややあり

4 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック極多量・炭化物ブロック微量・暗褐色土ブロック少量・しまりなし・粘性ややあり

5 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり

6 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり

7 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・炭化物ブロック極微量・黒褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

8 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり

9 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・焼土多量・黒褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり

10 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土極多量・炭化物ブロック微量・しまりややあり・粘性ややあり

11 層 10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土多量・炭化物ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

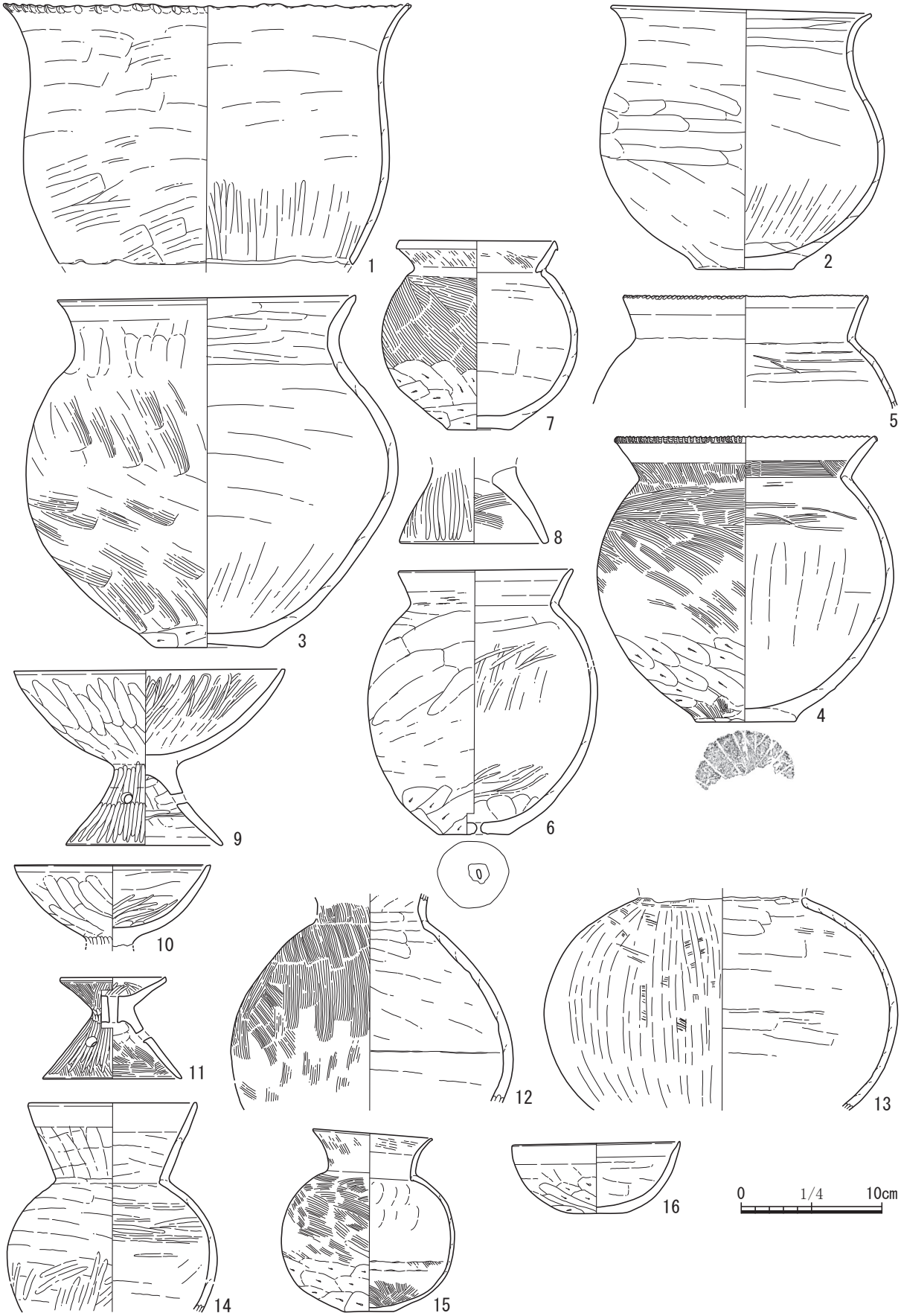


図 21　第 1 号竪穴住居跡出土遺物

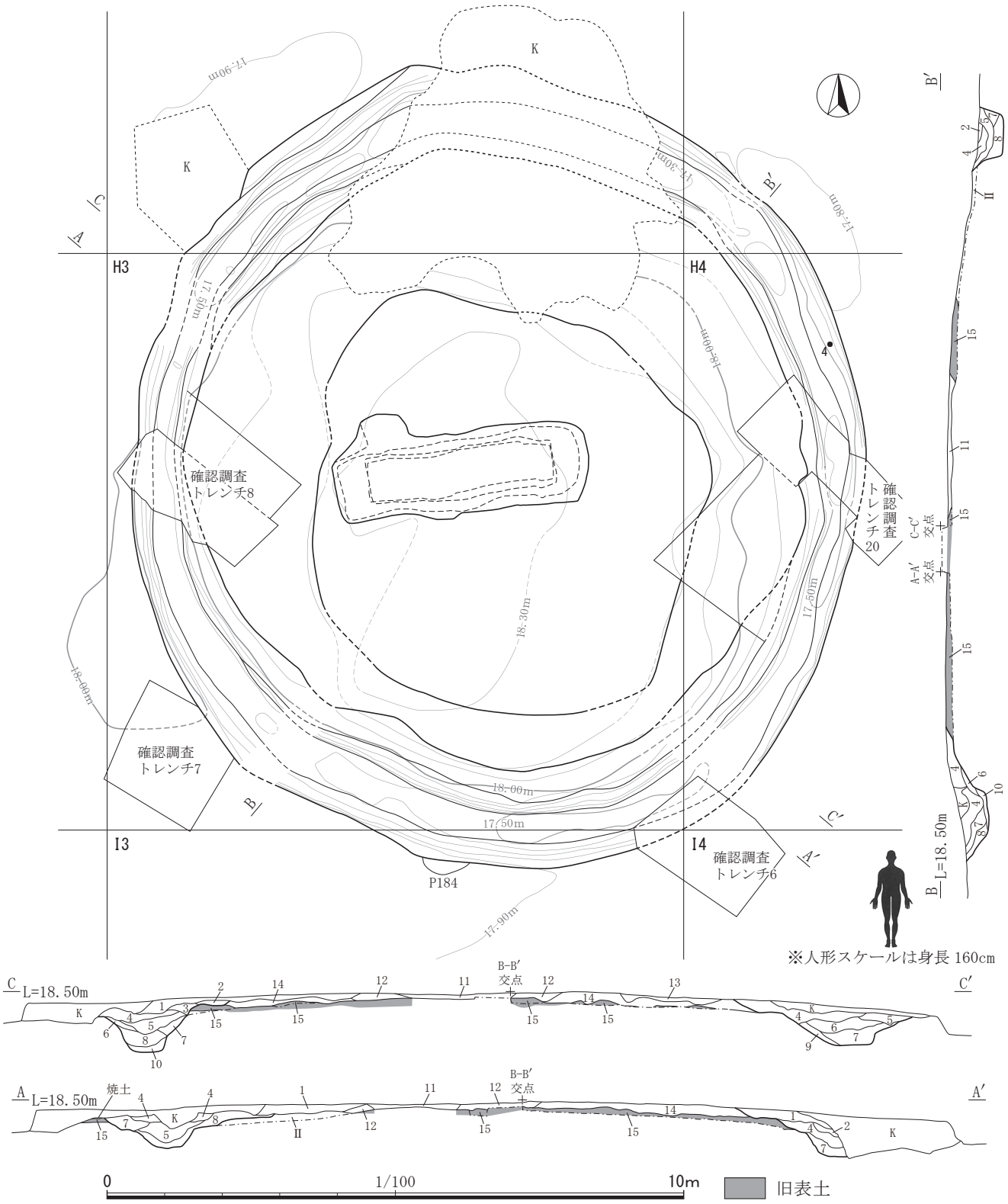

H3
H4
I3
I4
確認調査
トレンチ8
確認調査
トレンチ7
確認調査
トレンチ6
確認調査
トレンチ20
P184
17.90m
17.80m
17.50m
18.00m
18.30m
17.50m
A-A′
交点
C-C′
交点
B-B′
交点
L=18.50m
※人形スケールは身長 160cm
焼土
0
1/100
10m
旧表土

図 22　古墳（和唐地古墳）

(2) 古墳（和唐地古墳）

遺 構　位置：調査区の南西端、G ～ I・3 ～ 4 グリッド。丘陵状台地の中央部、最高所（標高 18.5 m）に位置する。調査前の現況は、山林内にやや地膨れ状に確認された。南東側の一部と北側は大きく攪乱されていた。

墳丘：規模（周溝内側下端間）は長軸（南北）11.8 m、短軸（東西）11.3 mを測る円墳。周溝が一巡する。残存墳頂部の標高 18.3 m。腐葉土と土壌化した表土を精査すると旧表土が現れ、中央には主体部が確認された。

旧表土は北側が流失しているものの周溝内側の墳丘を全面に覆い、最大で厚さ約 15cm を測る。約 3 ～ 5cm と薄い部分がまだらに確認され、墳丘構築時に整地作業が行われたためか。周溝の外側でも旧表土は明瞭に確認され、また、北西部の周溝外側上端部において旧表土上に明瞭な焼土が確認されている（セクション A）。遺物は伴っていないが、古墳構築時に草木を焼き払った痕跡、あるいは祭祀跡と思われる。

墳丘の断面観察から、旧表土の上には最大 25cm ほどの厚さでロームブロックを多く含む暗褐色土の盛土の存在が確認された。盛土の周囲には周溝の内側に幅 45cm ほどのテラスが回るものと復元される。残存墳丘の高さは周溝底から 98cm ほどである。

周溝：北部が攪乱により削平を受けるが墳丘を全周すると思われる。規模は上端幅最大 1.97 m、下端幅同 1.40 m、深さ同 0.8 mを測る。断面形は底部が平坦な逆台形。覆土は自然堆積であり底部にはロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積し、その上部には墳丘側からの流入土が堆積する。最上部はレンズ状の自然堆積である。

埋葬施設：墳丘ほぼ中央に東西方向を軸（E-8°-N）とする埋葬施設が存在する。墓壙は平面長方形。規模は長軸最大 4.43 m、短軸同 1.45 m。北西に張り出し部が存在するが、土層観察によると再掘削も想定され、状況は一様ではない。

中央部は墓壙よりも一段低くなり、木棺掘方と考えられる。規模は長軸最大 3.24 m、短軸同 1.20 m、深さ 0.65 m。褐色土、暗褐色土、ロームブロックを多く含む黒褐色土が互層をなすように堆積する。棺材が置換したような土層は看取されなかった。木棺裏込め（墓壙埋土）は固く締まった褐色土とロームブロックを多く含む暗褐色土・黒色土が互層をなして突き固められた痕跡が伺える。東部と西部の上層には白色粘土が存在する。

遺 物　出土状況：周溝の覆土から検出された遺物は、北西側の確認面付近で検出された土器片（高

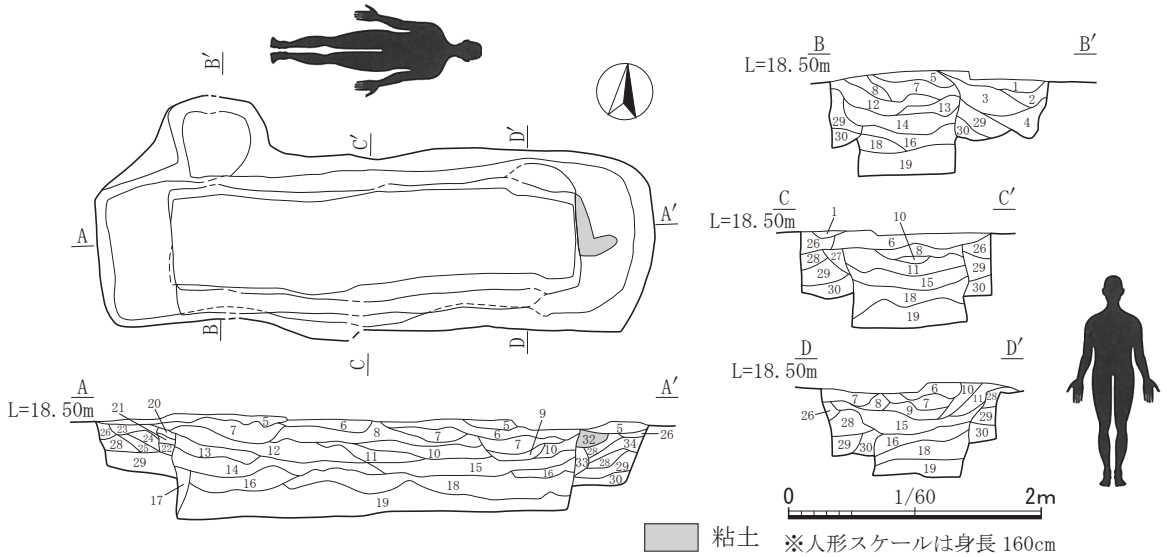


図 23　古墳（和唐地古墳）埋葬施設

図 24　古墳出土遺物

杯 4 ほか）を始め、わずかであった。埋葬施設では棺内外ともに出土遺物は皆無であった。

各説：1 は甕、3 は形状から有段口縁壺の口縁部の可能性がある。2 は赤彩壺の底部。4 は小片のため判然としないが、杯上半部が浅い高杯。

所 見　セクション A・C 南東側の盛土第 14 層の傾斜で墳丘を復元すると、盛土はさらに 50cm 弱高く、墳丘の高さは 1.5 m弱ほどになるだろうか。一段深い木棺掘方と箱形石棺墓を思わせる堅緻な裏込め（埋土）は、墓壙内に直接、棺を組み立てる方式が指摘できる。また、墓壙北西の張り出し部の覆土は木棺覆土に切られるようでもあり（上半部は木棺腐朽による覆土陥没時の内側への倒れ込みか）、埋葬時の出入り口（ステップ）などの機能を想定したい。

遺物が乏しく明確にできないが、出土土器群は概ね中期前半に帰属するものとみてよいだろう。環濠跡覆土上層で検出された高杯杯部も同じ時期で、古墳由来のものの可能性がある。また、C-3 グリッドで屈折脚高杯の脚部が出土しているが、短脚で明瞭な屈折を示すことから古墳出土の土器群より少し新しい（中期中葉）ようである。

SZ01　墳丘

1 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・しまりややあり・粘性ややあり

2 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・焼土極微量・黒褐色土ブロック極多量・しまりあり・粘性ややあり

3 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土極微量・黒褐色土ブロック極多量・しまりあり・粘性ややあり

4 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土微量・暗褐色土ブロック極多量・しまりあり・粘性ややあり

5 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり

6 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック極多量・しまりややあり・粘性ややあり

7 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

8 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック極多量・しまりあり・粘性ややあり

9 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

10 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

11 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・焼土極微量・黒褐色土ブロック中量・しまり強・粘性ややあり

12 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・焼土極微量・黒褐色土ブロック極多量・しまり強・粘性ややあり

13 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまり強・粘性ややあり

14 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック極多量・焼土微量・黒褐色土ブロック多量・しまり強・粘性ややあり

15 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック極多量・焼土少量・炭化物ブロック微量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり旧表土

SM01　A-D 主体部

1 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまり強・粘性ややあり・やや砂質に富む

2 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック中量・しまり強・粘性ややあり

3 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック少量・しまり強・粘性ややあり

4 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・暗褐色土ブロック多量・しまり強・粘性ややあり

5 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック微量・暗褐色土ブロック多量・しまり強・粘性ややあり

6 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり

7 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック極微量・暗褐色土ブロック多量・しまり強・粘性ややあり

8 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック極微量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり・褐灰色年度ブロックごく微量に含む

9 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック中量・しまり強・粘性ややあり

10 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり

11 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまり強・粘性ややあり

12 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック少量・暗褐色土ブロック極多量・しまり強・粘性ややあり・炭化物ブロック微量に含む

13 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック極微量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

14 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

15 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・炭化物ブロック微量黒褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

16 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

17 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり

18 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり

19 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり

20 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり

21 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり
22 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり
23 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり
24 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・暗褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり
25 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり
26 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり
27 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり
28 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり
29 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり
30 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり
31 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり
32 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・・しまりあり・粘性ややあり・にぶい黄褐色粘土ブロック多量含む
33 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり
34 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり

(3) 遺構外出土遺物

5 は第 2 号竪穴住居跡で出土したが、北東 2 mの位置にある第 1 号住居跡に由来するものと思われる前期後半の高杯である。

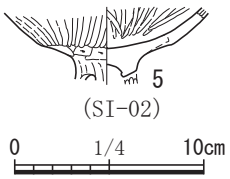


図 25　古墳時代遺構外出土遺物

第 4 節　時期不明の遺構（土坑・ピット以外）

遺構図については全体測量図（図 3・4）、状況は写真図版 7 を参照されたい。

(1) 不明遺構（円形周溝状遺構）

位置：D5・6 グリッド。**規模：**溝の外側で南北 2.87 m、東西 2.85 m。**形状・覆土等：**不整円形に囲む深さ 8 ～ 14cm の溝である。溝の断面形は U 字状を呈し、覆土は暗褐色土で充填されている。内側に深さ 22cm のピットが 1 基確認されている。出土遺物はない。

(2) 道 跡

位置：C・D2 グリッド。**重複関係：**P117・194・195 に切られる。**規模：**最大幅 2.24 m。**走行方向：**N-32°-W。環濠跡にやや並走する。**形状・覆土等：**ほとんど掘り込みはなく、幾分の轍痕を残す硬化面（一点破線の範囲）として確認された。硬化面の厚さは最大で 10cm に及ぶ。ロームブロックを多く含む厚さ 0.5 ～ 1.5cm の黒褐色土と暗褐色土が互層をなして形成されている。出土遺物はない。

第 5 節　土坑・ピット

確認した土坑・ピットについては、次のとおり覆土によって A ～ C の 3 分類したが、同時に時期を反映するものと想定している。しかし、単純に分けられないものもあり、本節ではすべての土坑・ピットを一括して扱って一覧表にして付し、注意された遺物を個別に取り上げることとした。遺構図は全体測量図（図 3 ～ 5）、状態の良いものを写真図版（10 ～ 14）に挙げたので参照されたい。

土 坑　150 基の土坑が検出された。形態別に概観すると、①平面形が楕円形であり長軸方向が 0.7 m ～ 2 mで覆土が人為堆積を呈するもの、②平面形が円形であり覆土が人為堆積を呈するもの、③平面形が円形ないし不正整円形・隅丸方形であり U 字状断面を呈すものに大別できる。一方、一覧表中の分類については出土遺物が乏しいこともあり、覆土の状態で大別している。A は褐色土から暗褐色土が堆積しており、その覆土中のロームブロックが覆土の主体土と同色化するもの。B は暗褐色土から黒褐色土が堆積し、ロームブロックがやや同色化するもの。C は暗褐色土から黒褐色土が堆積し、ロームブロックは覆土主体土と全く同色化が認められないものである。出土遺物が伴うものからおおよそ A は縄文時代から弥生時代（第 116

号・184 号ピットなど）、B は古墳時代から古代（第 13 号土坑、第 118 号ピットなど）、C は中・近世以降（第 103 号土坑〔ピットへ変更〕など）と認識した。

形態①ないし②の覆土はほぼ A に該当し、人為堆積を呈するものについては墓壙を想定した。③の中には堆積状況中に柱痕跡が認められないものの柱穴が含まれているものと推測する。

ピット　201 基が確認された。それぞれ柱痕跡の有無、柱当たり痕の有無がある。掘立柱建物跡や柵跡として認識されず使途は不明である。覆土分類については土坑と同様である。

遺 物　**第 153 号土坑**：4 は外面に竹管様の施文具によるランダムな刺突、内面には削痕あるいはナデが見られる。3 は表裏に貝殻条痕が施され、上端には穿孔が掛り、補修痕と思われる。2 点ともに縄文時代早期後半・条痕文系茅山式の繊維土器で、4 は茅山下層式に事例が認められる。

第 163 号土坑：表裏に貝殻条痕が施される口縁部。同早期後半・茅山式の繊維土器である。

第 1 号土坑：第 2 号住居跡と重複することから同住居由来のものと思われる。1 は口縁の段部に押捺をもつものと思われる。住居跡と同じ弥生時代中期後半・宮ノ台式後半期に位置づけられるか。

第 13 号土坑：2 は土師器杯でケズリの底面はわずかに上げ底気味となる。深身の器形で体部上半は厚手、外・底面のミガキは極めて疎らで、下総国府編年（松田 2001）2b ～ 3a 期・8 世紀中ごろに位置づけられる。

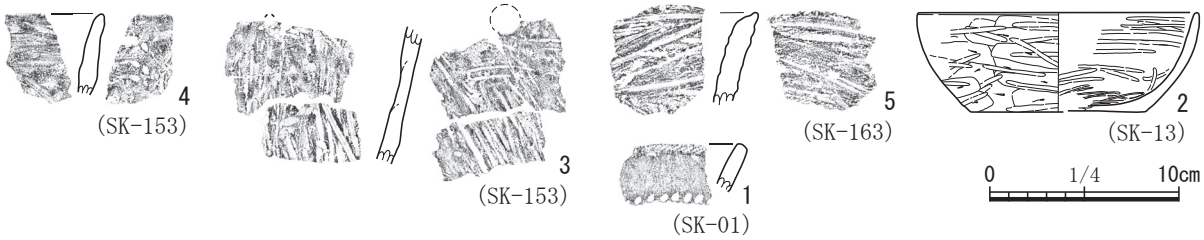


図 26　土坑出土遺物

第 3 章　まとめ ―調査の成果と課題―

今回の発掘調査は本遺跡において初めての本調査であった。遺跡地図では縄文時代早・後期と古墳時代中期の包蔵地とされていたが、市内でも 2 例目 (註) となる弥生時代中期（末葉）の環濠集落であったことが明らかになるとともに、丘陵最高所の地膨れは古墳時代中期の円墳であった。確認した遺構・遺物には縄文時代早・前・中・後期、弥生時代（前・）中期、古墳時代前・中期、奈良・平安時代があり、本遺跡の消長の一端が明らかとなった。ここでは成果の主体となる弥生時代と古墳時代についてまとめておく。

1　弥生時代

集 落　3 軒の竪穴住居跡のうち、環濠跡と重複する 1 軒（第 4 号竪穴住居跡）は環濠に切られることから、環濠の掘削に先立つ建物である。後述する絵画土器が覆土の焼土とともに出土しており、竪穴の平面形が小規模な方形で主柱穴や炉（環濠に切られている）が不明瞭なこと、出土土器は環濠集落のものと時間的に大きく隔たるものとは思われないことからも、集落の造営に当たる一時的な使用であったことも考えられる。焼土の堆積から類推される建物の焼き払いと絵画土器の破砕・投棄は、そうした過程における（祭祀的な）行為であったのかもしれない。

環濠で囲まれる部分は約 1,800 ㎡が調査の対象となっただけであり、内側には 2 軒の住居跡が確認されたに過ぎない。環濠は断面 V 字形で、幅・深さの規模は場所によって異なっている。大きく東半部、西半部東側（中央部）、同西側で形態・規模の変化が認められた。さらに微視的に見れば、これは環濠掘削の施工単位・作業分担を反映している可能性を考えたい。

平面的には囲郭範囲の南限が捕捉できた訳であるが、位置的に東限は検出範囲の屈曲からも地形の傾斜変換線に沿うもの（概ね遺跡範囲）とみられる。北東限は台地縁辺であろう。西側は台地の肩の下へ回る状況が確認できたので、台地縁辺を進み、北西端は地形の下降する辺りで台地を横断、くちばし状地形を切断する形になるのかもしれない。この想定範囲は地形図の標高 16 m等高線に当たり、その面積はおよそ 16,000 ㎡となる (図 2)。市内の戸張作遺跡の環濠範囲が 9,040 ㎡と見積もられている（大村 2005）ので、これよりも広く、佐倉市 大崎台遺跡（17,690 ㎡）に迫る広さである。ただ、関東地方の環濠範囲の規模は 2 万㎡程度が一般的である（同）というので、標準的な広さであっただろうか。

環濠の覆土下層と住居跡から検出された土器は中期後半・宮ノ台式に比定されるもので、本遺跡の北北西 3.5km、市内の同じ都川水系葭川左岸にある戸張作遺跡の環濠集落の成立と同調する。同遺跡の環濠は中期に構築され、北側環濠の覆土中に弥生後期の甕が投棄された状態で発見され、また、北東部では環濠同士の切り合いが認められた（菊池 1998・99）。これらのことから何回かの掘り直しが行われ、後期まで利用されたと考えられている。本遺跡では覆土中位から古墳時代中期前半の高杯が検出され、堆積状況から見ても上層はそれ以降に埋没したことが明らかとなった。環濠の内側では古墳時代前期の住居跡が存在することもあり、集落の消長については今後の調査の結果を待って判断したい。

千葉県内では旧市原・君津郡域に中期の環濠集落が多く見られるが、今回の調査結果でも明らかなように、環濠自体の捕捉は不十分な部分が大きい。今後の調査の推移を注視したい。

また、第 3 号竪穴住居跡で確認できた 2 本の主柱穴は覆土の柱痕跡と掘方の形状によって、横断面が長方形の板状の柱、いわゆる「五平（状）柱」（村田 2013）であることが判明した。この種の柱は 2005 年に発見された奈良県御所市極楽寺ヒビキ遺跡の大型掘立柱建物跡（5 世紀前半）の検出によって注目されたが、下総地域を始めとする関東甲信地方の弥生中・後期の竪穴住居跡においても散見されている。その意味合いについては不詳な部分があるが、今後の検討資料の一つとして挙げておきたい。

絵画土器　第 4 号竪穴住居跡で検出された粗製・小型の鉢には線刻画が記されていた。いわゆる絵画土器は図像の一部の破片で発見されることが多い中で、半完器の状態に復元でき図像の全体像が把握できた本資料の意義は大きい。線刻画についての分析は付載を参照されたいが、それによるといくつかの意匠に分解でき並列しているようであるが、抽象化していることと対比できる類例が乏しいために読み解くのは困難を極めるようである。そんな中でも内面に唯一記された「三叉文」の意匠は外面にも記されたところをみると、この意匠が本資料の鍵となると認識できる。また、図像の大半を占める「格子状文」が諸橋千鶴子氏のご教示にあるように「ドーマン」に通ずるところがあるとすれば、なお興味深い。さらに、この線刻画を記した土器が粗製土器であり、それが破砕され焼土とともに投棄・遺棄された状況を示す今回の調査成果は、絵画土器の意味を知る上で意義のある資料を提供したものと言えるだろう。

2　古墳時代

竪穴住居跡 1 軒と古墳 1 基が確認された。住居跡は前期後葉に位置づけられるもので、上記の環濠の埋没時期（中期前半）を考えると環濠自体の機能の如何は不明であるが、埋まり切る前に古墳時代集落の造営が始まっていた可能性も推察される。また、今回の事業範囲の北側の宅地造成の際の試掘調査で前期の竪穴住居跡が確認されている（木口 2023）というので、弥生中期の集落と重複するかたちで台地北側に展開するものと思われる。その後、中期前半に環濠集落の外、南西側に和唐地古墳が築造されることになるが、古墳以外の同時期の状況は今回の調査結果からは明らかではない。従前に中期の包蔵地と周知されていたことを積極的にとらえると、同時期の集落が展開していたことも想像される。

和唐地古墳は今回の調査によって初めてその存在が明らかにされたが、少なくとも今回の調査範囲及び事業範囲では他の古墳は確認されなかった。古墳は直径 12 m弱（正円復元値 11.87 m）の小型円墳である。確認できた墳丘は極めて低平であったが、丘陵頂部の立地を考えると封土の流失は著しかったことも想像される。埋葬施設は墳丘中心部に主軸をほぼ東西に向けて設置されている。木棺直葬が推定され、棺痕跡の幅は西側がわずかに広いものの明瞭ではなく、むしろ棺底が東側が高いことから埋葬頭位は東側と考えるのが穏当であろう。また、前章で想定した木棺型式は箱形の「組立式木棺」で、赤塚次郎が愛知県豊田市川原遺跡の報告書で弥生時代後期～古墳時代初頭の墳丘墓に指摘したものである（赤塚 2001）。いわゆる「持ちはこぶ棺」ではなく「据えつける棺」を裏付けるものである（和田 2014）。ほぼ未盗掘の状態で確認されたが、内部には副葬品は皆無であった。立地は丘陵最高所を単独で占地する好条件であるものの、その内実は貧弱であると言わざるを得ない。第 1 章第 2 節で触れた石神 2 号墳と比べると、その差は歴然であり、長原 亘が評した当地域の墳墓の状況を如実に表している。

今回の調査の主な成果は以上であるが、本遺跡だけでも未解明な部分を多く残している。今後の調査の地域史解明の礎となることを期待して擱筆とする。最後となりましたが、今回の調査にご協力ご支援いただきました事業主の方をはじめ、地域住民の皆さまに感謝申し上げます。

註

花見川区武石遺跡で発見された断面 V 字形の溝が環濠であったとしたら、これを加えて 3 例となる（市生涯学習センター エントランスホール展示より）。

参考文献

赤塚次郎　2001「墳丘墓と槽形木棺墓について」赤塚編『川原遺跡』第 2 分冊 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 91 集 （財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

大村　直編　2005『市原市根田代遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告書ⅩⅢ（財）市原市文化財センター調査報告書第 92 集　市原市教育委員会・（財）市原市文化財センター

大村　直　2005「市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落」大村編『市原市根田代遺跡』（前掲文献）

大村　直　2009「南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年」大村編『市原市南中台遺跡・荒久遺跡 A 地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第 10 集 上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅩ　市原市教育委員会

加藤修司　2000「土器編年案」『千葉県文化財センター研究紀要』21 （財）千葉県文化財センター

加藤修司　2005「草刈遺跡土器編年の検証」『（財）印旛郡市文化財センター研究紀要』4 （財）印旛郡市文化財センター

菊池健一ほか　1988『立木南遺跡』 千葉市教育委員会・（財）千葉市文化財調査協会

菊池健一　1998・99『千葉市戸張作遺跡』Ⅰ・Ⅱ　千葉市東寺山第三土地区画整理組合・（財）千葉市文化財調査協会

木口裕史　2023「和唐地遺跡・琵琶首台遺跡」木口編『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書』―令和 4 年度―　千葉市教育委員会

木原高弘　2012「集落出土土器等の様相―各期の土器等の特徴」白井久美子・黒沢 崇編『研究紀要』27 古墳時代中期の房総―中期的要素の波及とその評価―（財）千葉県教育振興財団

黒板勝美　1979『新訂増補 國史大系』續日本紀〈普及版〉 国史大系編修会、吉川弘文館（宝亀 2 年 10 月条、p.394）

黒沢　浩　1997「房総宮ノ台式土器考―房総における宮ノ台式土器の枠組み―」『史館』第 29 号　史館同人

小林　嵩　2022「千葉市の弥生土器・石器―猪鼻城跡―」千葉市史編集委員会編『千葉いまむかし』第 35 号　千葉市教育委員会

小林　嵩・植木雅博　2023「千葉市の弥生土器―新田山遺跡―」千葉市史編集委員会編『千葉いまむかし』第 36 号　千葉市教育委員会

鈴木道之助ほか　1986『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2) ―千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区― 千葉県文化財センター調査報告第 122 集 （財）千葉県文化財センター

田川　良　1983『井合遺跡調査報告書』 千葉市遺跡調査会

武田宗久ほか　1974「弥生時代の主な遺跡」千葉市史編纂委員会編『千葉市史』第 1 巻 原始古代中世編　千葉市

武田宗久ほか　1984『千葉市文化財調査報告書』第 10 集 谷津遺跡　千葉市文化財調査協会編、千葉市教育委員会

田中英世　2007『千葉市高台向遺跡・猪鼻城跡』 千葉市教育委員会・（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター

田中英世・菊池健一　1990『千葉市古山遺跡』（財）千葉市文化財調査協会

長原　亘　2009「千葉市の古墳時代概観～古墳の分布傾向から～」千葉市史編集委員会編『千葉いまむかし』第 22 号　千葉市教育委員会

中村恵次　1979「千葉市石神 2 号墳」『房総古墳論攷』 真陽社、故中村恵次氏著作集刊行会

沼澤　豊ほか　1977『東寺山石神遺跡』（財）千葉県文化財センター・日本道路公団東京第一建設局・建設省関東地方建設局

野中　徹ほか　2000『東条地区遺跡群発掘調査報告書』―ほ場整備事業（大区画）東条地区に伴う埋蔵文化財調査― 鴨川市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第 6 集　鴨川市教育委員会ほか

萩原恭一 1986「千葉市大北遺跡の検討―律令制下東国の一様相―」『千葉県文化財センター研究紀要』10 ―千葉県文化財センター 10 周年記念論集―（財）千葉県文化財センター

松田礼子　2001「下総国府の土器編年」松本太郎編『下総国府跡』―国府台遺跡緊急確認調査報告書―　市川市教育委員会

村田文夫　2013「五平（状）柱を主柱穴に据えた弥生期の竪穴住居跡―弥生中・後期における調査・研究の現状―」村田『関東の古代遺跡逍遥』 六一書房

山本　勇編　1984「星久喜遺跡発掘調査報告」『千葉市文化財調査報告書』第 8 集　千葉市教育委員会

和田晴吾　2014「『据えつける棺』と『持ちはこぶ棺』」和田『古墳時代の葬制と他界観』 吉川弘文館

渡辺修一　1991『千葉市荒久遺跡』(3) ―県立青葉の森公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書― 千葉県文化財センター調査報告書第 193 集 （財）千葉県文化財センター編、千葉県都市部

渡辺修一　1992『千葉市地蔵山遺跡』(1) ―住宅・都市整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書― 千葉県文化財センター調査報告書第 206 集 （財）千葉県文化財センター編、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部

渡辺修一　2004「壺棺再葬墓」『千葉県の歴史』資料編 考古 4（遺跡・遺構・遺物）県史シリーズ 12 （財）千葉県史料研究財団

表 2　出土遺物観察表

遺構外出土遺物

番号	注記	種別	器種	残存	口径	器高	底径	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
1	E6 グリッド	縄文	深鉢	口縁部	－	〈4.2〉	－	繊維・骨針・角・赤・白・透・砂	内外ヨコ削痕	7.5YR5/4 にぶい褐	
3	E3 グリッド	縄文	深鉢	頸部	－	〈7.7〉	－	骨針・角・白・砂	外：左上半截竹管条痕、頸部竹管押引き 2 段・間を斜めヘラ刻み目。内：ナデ	5YR5/6 明赤褐	
2	SZ1-B 区、SD1-B トレンチ	縄文	深鉢	口縁 1/10 ～肩部 1/5	(22.6)	〈15.8〉	－	赤（多）・白・透・砂	外：縄文 RL 横回転→肩部左上弧状条痕・口縁部ヨコ条痕→口縁・頸部隆帯・指押圧。内：ヨコヘラナデ、口縁部内面沈線	7.5YR5/6 明褐	
4	SI2-C 区	縄文	深鉢	口縁～胴上半部	－	〈8.6〉	－	骨針・赤・白・透・砂	外：縄文 LR 横回転→口縁隆帯・指押圧。内：ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	

SI02 出土遺物

1	No4	弥生	甕	ほぼ完形	－	〈22.2〉	5.8	砂質。白・透（多）・砂	外：胴下半部左上ハケ、口縁～胴上半部ヨコハケ→頸部段にヘラ刻み、胴部に櫛 4 本横走羽状文。内：胴部左上ヘラナデ、口縁～肩部ヨコハケ	7.5YR6/6 橙	外面口縁～胴上半部煤付着、下半部被熱赤化。内面焦げ付着。口縁部磨耗
2	No2	弥生	甕	口縁部	－	〈3.4〉	－	骨針・白・透・砂	外：ヨコナデ。内：ヨコナデ。口縁端部縄文 LR、頸部櫛 3 本横走羽状文	10YR6/6 明黄褐	外面煤付着
3	炉 No20	弥生	甕	口縁～胴上半部	－	〈10.2〉	－	砂質。白・透（多）・砂	外：胴中位左上ハケ。内：胴部右上ミガキ、口縁部ヨコミガキ。口縁端部指交互押捺	7.5YR6/6 橙	外面被熱赤化、煤付着
4	No35	弥生	鉢	口縁 2/5 ～底部完存	(9.3)	7.7	4.2	骨針・チャ・黄（多）・白・透・砂	外：左上ハケ→タテミガキ。内：タテミガキ。6 単位波状口縁、口縁端部ヘラ刻み、底部粘土充填・上げ底	5YR5/4 にぶい赤褐	内外面黒化
5	No7	弥生	壺	口縁～胴中位 2/3	(5.0)	〈17.0〉	－	骨針・黄（多）・白・透・砂	外：ナデ。内：ナデ	5YR4/4 赤褐	内外面黒化
6	No1	弥生	壺	口縁～肩部ほぼ完存	7.0	〈11.6〉	－	砂質。白（多）・透（多）・砂	外：頸部タテミガキ・赤彩、口縁部棒状貼付文 2 本四方向→口縁端部・外面・肩部結節縄文 R 多段、頸部段同刺突。内：口縁部ヨコミガキ、頸～肩部剥落	7.5YR6/8 橙	
7	No26、C・D 区	弥生	壺	口縁部 3/5	7.6	〈2.9〉	－	砂質。骨針・白・透（多）・砂	ナデ。口縁部 1 本六方向棒状貼付文→内外赤彩	7.5YR7/6 橙	
8	C 区	弥生	壺	口縁部	－	〈1.8〉	－	骨針（多）、透、砂	外：ヨコミガキ。内：下半部ヨコミガキ。口縁端面縄文 LR	10YR6/4 にぶい黄橙	
9	C 区、一括	弥生	壺	頸～肩部 1/3	－	〈11.0〉	－	砂質。骨針・角・赤・白（多）・透・砂	外：上段 5 本櫛描波状文 3 段→上 3 本・下 2 本櫛描横線文区画、下段同波状文→上 2 本・下 3 本横線文区画→頸部・無文帯赤彩→頸部タテミガキ・無文帯ヨコミガキ。内：ナデ、肩部剥落	7.5YR5/4 にぶい褐	
10	No2	弥生	壺	頸部ほぼ完存	－	〈14.7〉	－	砂質。骨針（多）・白（多）・透（多）・砂	外：赤彩→タテミガキ。内：ナデ→上半部赤彩→中位タテ・上部左上ミガキ。上下端打ち欠き磨耗	10YR6/4 にぶい黄橙	
11	No19・20・21、C 区	弥生	壺	胴上半部	－	〈15.8〉	－	砂質。骨針・白（多）・透・砂	外：中位結節縄文 LR 多段→無文帯・胴中位ヨコミガキ。内：剥落	10YR6/4 にぶい黄橙	赤彩不明瞭
12	No4、C 区	弥生	壺	口縁部	－	〈2.8〉	－	骨針・白・透・砂	内外赤彩→ヨコミガキ。口縁部有孔耳状突起	7.5YR5/6 明褐	
13	C 区	弥生	壺	胴部	－	〈3.0〉	－	砂質。白・透（多）・砂	外：櫛 10 ？本弧文→無文部ミガキ。内：ヘラナデ	10YR6/6 明黄褐	
14	炉 No5・6・8・10・11・14 ~ 16・19・一括、A・C 区、一括	弥生	壺	胴上半 1/3	－	〈8.7〉	－	骨針（多）・白・透・砂	外：左上ミガキ→赤彩。内：横ヘラナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	上下端部打ち欠き磨耗
15	No9、C 区	弥生	壺	胴下半～底部完存	－	〈6.8〉	5.7	砂質。骨針・赤（多、～ 7mm）・白・透（多）・砂	外：摩滅。内：剥落	10YR7/4 にぶい黄橙	
16	炉 No18・19・一括、A 区	弥生	甕	肩～胴中位 3/5	－	〈16.9〉	－	骨針・白・透・砂	外：胴下半部左上ハケ、中位ヨコハケ→肩部ヨコナデ。内：縦ヘラナデ・疎らミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐	上下端部打ち欠き磨耗。外面被熱赤化、下端白化
17	No16・19・21	弥生	壺	胴下半～底部完存	－	〈6.9〉	7.5	砂質。骨針・白・透（多）・砂	外：タテミガキ。内：剥落	10YR5/6 黄褐	底部周縁損耗
18	炉 No1	弥生	壺	底部完存	－	〈2.9〉	10.8	骨針・チャ・白・透（多）・砂	外：左上ミガキ。内：ヘラナデ。底：ケズリ	7.5YR5/6 明褐	

SI03 出土遺物

1	No10	弥生	甕	胴部 2/5 ～底部完存	－	〈15.5〉	5.4	骨針・赤・白・透・砂	外：左上ハケ→櫛 4 本横走羽状文。内：タテミガキ。底：ケズリ	10YR6/6 明黄褐	外面胴下半部煤付着。上下 2 片に分離
2	No10	弥生	甕	口縁 1/5 ～肩部	(18.0)	〈6.0〉	－	骨針（多）・白・透・砂	外：左上ハケ→櫛 4 本横走羽状文。内：ヨコハケ。口縁端部内面指押捺	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：7.5YR6/6 橙	外面煤付着
3	No10	弥生	甕	口縁部	－	〈3.2〉	－	骨針・白・透（多）・砂	外：左上ハケ→頸部縄文 RL。内：頸部ヨコミガキ。口縁端部縄文 RL	外：10YR4/3 にぶい黄褐 内：10YR5/4 にぶい黄褐	外面煤付着

番号	注記	種別	器種	残存	口径	器高	底径	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
4	No10	弥生	甕	底部 3/4	−	〈3.0〉	5.2	白・透・砂	外：タテハケ。内：ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	外面煤付着
5	No7	弥生	甕	口縁部	−	〈3.1〉	−	骨針・白・透・砂	ヨコナデ。口縁端部内面指押捺	10YR5/4 にぶい黄褐	
6	D 区	弥生	甕	胴部	−	〈3.3〉	−	骨針・赤・白・透（多）・砂	外：左上ハケ→ヘラ描き斜格子文。内：タテミガキ	10YR5/4 にぶい黄褐	外面煤付着
7	No4・5、A 区	弥生	壺	底部完存	−	〈3.1〉	6.0	チャ・黄（多）・白・透・砂	外：ナデ。内：ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	外面黒化
8	B 区	弥生	甕	底部	−	〈4.1〉	−	チャ・白・透・砂	外：左上ハケ、下端押捺。内：ナデ	7.5YR4/4 橙	外面煤付着、内面焦げ付着
9	No1・3	弥生	壺	口縁部 1/4	(21.0)	〈5.5〉	−	骨針（多）・チャ・白・透・砂	外：赤彩→ヨコミガキ、口縁帯・端面ヨコナデ→有孔耳状突起 2 本方向不明→縄文 LR。内：赤彩→ヨコミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐	
10	B 区	弥生	椀	口縁部	−	〈4.2〉	−	白・透・砂	外:ナデ→羽状縄文 RL・LR、端面縄文 LR。内:ナデ	2.5Y6/6 明黄褐	

SI04 出土遺物

1	No24	弥生	壺	口縁部 1/9	(13.0)	〈2.5〉	−	骨針・白・透・砂	外：口縁帯・端面縄文 LR、頸部ヨコミガキ。内：ヨコミガキ	7.5YR5/6 明褐	
2	No6・7・8・22	弥生	壺	胴上半部 2/3	−	〈8.6〉	−	骨針・黄（多）・白・透・砂	外：左上ナデ→胴上半部タテミガキ。内：ヘラナデ	外：5YR4/6 赤褐 内：10YR4/2 灰黄褐	
3	No18	弥生	鉢	底部 2/3	−	〈2.3〉	4.9	骨針・黄（多）・白・透・砂	外：ヘラナデ。内：ミガキ	2.5YR4/4 にぶい赤褐	内外面黒化
4	No17・18・21	弥生	鉢	口縁ほぼ完存～胴下半部	10.5～11.5	〈7.6〉	−	骨針・黄（多）・白・透・砂	外：右上ヘラナデ。内：ミガキ、上半部疎ら	2.5YR4/4 にぶい赤褐	内外面黒化

SD01 出土遺物

1	G 区 No3	弥生	甕	口縁 1/3～底部完存	(14.6)	15.3	5.3	骨針・白・透・砂	外：胴下半部ヨコナデ→上半部左下ヘラナデ。内：ヨコナデ→タテミガキ、口縁端部指押捺・爪痕伴う。底部中心盲孔	10YR7/6 明黄褐	外面胴上半部煤付着、口縁部焦げ付着
2	F 区	弥生	甕	胴部	−	〈5.3〉	−	骨針（多）・白・透・砂（多）	外：左上削痕。内：ヨコナデ→タテケズリ	7.5YR5/6 明褐	
3	G 区 No4	弥生	壺	頸～肩部 2/5	−	〈3.9〉	−	白・透・砂	外：肩部ヨコハケ、頸部タテミガキ。内：剥落	10YR7/4 にぶい黄橙	
4	F 区 No2	弥生	壺	肩部 1/8	−	〈6.5〉	−	骨針・黄（多）・白・透・砂	外：ヨコハケ→頸・肩部結節縄文 R 多段→無文帯赤彩。内：剥落	7.5YR5/4 にぶい褐	肩部結節縄文帯の下に斜縄文 LR（縦回転）の当たりあり
5	B トレンチ No1・2・3	古墳	高杯	口縁 1/6～杯下半部完存	(20.9)	〈8.6〉	−	赤（多）・白・透	外：ナデ→赤彩。内：ナデ、一部ケズリ状→赤彩	5YR6/6 橙	

SI01 出土遺物

1	No3	古墳	甕	口縁～胴中位 2/3	(29.0)	〈18.5〉	−	砂質。白・透（多）・砂	外:ヨコヘラナデ。内:口縁～胴上半部ヨコナデ、下半部縦ミガキ。口縁端部指交互押捺	7.5YR5/6 明褐	外面煤付着
2	No2	古墳	甕	完形	18.5	18.8	7.0	黄・白・透・砂	外：胴部中位ヨコヘラナデ。内：口縁部ヨコヘラナデ、胴下半部ミガキか	5YR4/6 赤褐	外面口縁～胴中位煤付着。内面全面黒化・焦げ付着、頸部の対面する二か所に損耗あり
3	No12、C 区	古墳	壺	完形	21.2	25.0	7.5	黄・赤・白・砂	外：胴部左上ハケ、底部ケズリ。内：ヘラナデ。底：ケズリ	5YR5/6 明赤褐	煮炊痕跡なし広口壺
4	No2・3-2・16	古墳	甕	口縁部 1/8～胴部ほぼ完形	(18.2)	16.3	7.0	赤・白・透・砂	外：左上ハケ→肩部ヨコハケ、胴下半部左上ケズリ。内:胴部タテナデ、口縁～肩部ヨコハケ。底:木葉痕。口縁部ヨコナデ、端部ハケ工具刻み目	2.5YR4/6 赤褐	外面全面煤付着、内面黒化。二次焼成によりモザイク状
5	No5	古墳	甕	口縁部完存～肩部	17.3	〈8.0〉	−	黄（多）・赤・白・透（多）・砂	外：ナデ。内：ヘラナデ。口縁部ヨコナデ、端部ハケ工具刻み目	5YR5/4 にぶい赤褐	内外面口縁部焦げ付着
6	No3	古墳	甕	完形	12.4	18.8	5.0	赤（多）・白・透・砂	外：右上ヘラナデ、底部左下ケズリ。内：ナデ、疎らなミガキ。底：ケズリ。底部穿孔	7.5YR5/4 にぶい褐	内面黒化。二次焼成によりモザイク状
7	No1	古墳	甕	口縁部 1/3～胴・底部完存	(10.8)	13.5	4.5	黄（多）・白・透・砂	外:左上ハケ→胴下半部右ケズリ。内:ナデ。底:ケズリ、上げ底。口縁部ヨコナデ	7.5YR4/6 褐	二次焼成、煮炊痕跡不明瞭
8	C 区	古墳	甕	脚台底部 3/4	−	〈5.5〉	10.8	黄（多）・赤・白・透（多）・砂	外：ヘラナデ。内：ハケ	10YR5/4 にぶい黄褐	二次焼成によりモザイク状
9	No4・8・16	古墳	高杯	完形	19.2	12.6	11.2	骨針・黄（多）・赤・白・透・砂	外：杯部ヘラナデ、脚部タテミガキ。内：杯部タテループ状ミガキ、脚部ナデ。円形透かし孔 3 方向	杯：10YR5/4 にぶい黄褐 脚：2.5YR5/6 明赤褐	二次焼成によりモザイク状
10	No14	古墳	高杯	杯部完存	14.0	〈5.9〉	−	黄（多）・白・透（多）・砂	外：ヘラナデ。内：ナデ→疎らなミガキ	2.5YR5/6 明赤褐	二次焼成。内面黒化
11	No13	古墳	器台	口縁部 1/3～脚部完存	(7.4)	9.2	9.9	骨針・黄（多）・白・透（多）・砂	外：ハケ→脚部タテミガキ。内：受け部ミガキ、脚部ハケ。接合部穿孔、脚部円形透かし孔 3 方向	2.5YR5/6 明赤褐	
12	No11	古墳	壺	頸～胴部中位完存	−	〈14.9〉	−	黄（多）・白・透・砂	外：タテハケ。内：ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	二次焼成により劣化
13	No8	古墳	壺	頸～胴下半部 2/5	−	〈15.2〉	−	肌理細かい。骨針・白・透・砂	外：ハケ→タテミガキ。内：ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	二次焼成

番号	注記	種別	器種	残存	口径	器高	底径	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
14	No10	古墳	壺	口縁部 5/6 ～胴部中位完存	11.8	〈12.7〉	–	黄（多）・白・透・砂	外：ヘラナデ、胴下半部ミガキか。内ヘラナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	二次焼成、内面黒化
15	No9	古墳	壺	ほぼ完形	8.4	11.5	3.6	骨針（多）・黄・白・透	外：左上ハケ→胴下半部右下ケズリ。内：底部・口縁部ハケ。口縁部ヨコナデ。底：ケズリ	10YR6/4 にぶい黄橙	
16	No7	古墳	椀	ほぼ完形	12.0	5.1	4.0	骨針（多）・黄・白・透（多）	外：ケズリ。内：ナデ。底：ケズリ、平底。口縁部内面に匙面	7.5YR6/6 橙	二次焼成、黒化

SZ01 出土遺物

1	A 区周溝	古墳	甕	口縁部	–	〈3.9〉	–	骨針・赤・白・透	ヨコナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	
2	B 区	古墳	壺	底部 1/3	–	〈1.8〉	(7.0)	白・透・砂	外：ナデ、赤彩。内：ハケ。底：ケズリ	7.5YR4/4 橙	
3	B 区	古墳	壺	口縁部	–	〈3.0〉	–	赤（多）・白・透・砂	ヨコナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	
4	B 区周溝内 No1	古墳	高杯	口縁・杯上半部	–	〈4.0〉	–	骨針・黄（多）・赤・白・砂	外：ヘラナデ。内：ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	

土坑出土遺物

5	SI2-No3	古墳	高杯	杯下半～接合部	–	〈4.2〉	–	白・透・砂	外：杯上半部タテミガキ、下半部ヨコケズリ、脚部タテミガキ。内：杯部タテミガキ。脚部円形透かし孔 3 方向	7.5YR6/6 橙	
4	No1	縄文	深鉢	口縁部	–	〈4.3〉	–	繊維・骨針・角・赤・白・透・砂	外：刺突。内：ヨコ削痕	5YR5/6 明赤褐	
3	SK153No1、SK154No1	縄文	深鉢	胴部	–	〈7.3〉	–	繊維・パ・赤・黒・白・透・砂	内外左上貝殻条痕	5YR5/6 明赤褐	上端に外面穿孔補修孔あり
5	一括	縄文	深鉢	口縁部	–	〈4.8〉	–	繊維（多）・骨針・赤・白・透・砂	内外ヨコ貝殻条痕	7.5YR4/3 褐	
1	SK1	弥生	壺	口縁部	–	〈2.6〉	–	砂質。チャ・赤・白・透・砂	ナデ。口縁端部縄文 LR、口縁帯下端刺突列文（工具不明）	10YR6/4 にぶい黄橙	
2	SK13No1	土師器	杯	口 縁 1/10 ～底部 1/3	(14.7)	5.2	(9.3)	赤（多）・白・透・砂	外：ヨコケズリ→疎らなヨコミガキ。内：ナデ→疎らなミガキ。底：一方向ケズリ、一部ミガキ	5YR5/6 明赤褐	

表 3　土坑一覧表

番号	Gr	平面形状	長軸方向	長軸	短軸	深さ	断面形状	ピット	覆土	分類	出土遺物	重複関係
SK01	D3	円形	N-39° -E	105	101	45	鍋底状	有	人為		弥生中期壺	＞ SI02
SK02	D3	楕円形	N-6° -E	150	125	58	不整形	無	人為			
SK03	D3	楕円形	N-9° -E	150	85	96	不整形	無	人為		弥生中期壺	＞ SI02
SK08	B4,5	楕円形	N-33° -E	92	64	13	皿状	無	自然	A	弥生中期壺	
SK09	B5	円形	N-50° -W	104	97	15	皿状	無	自然	A		
SK10	B5	楕円形	N-52° -E	63	50	13	逆台形	無	自然	A		
SK11	B5	楕円形	N-33° -W	70	58	15	逆台形	無	自然	A		
SK12	B,C5	楕円形	N-42° -E	118	92	18	逆台形	無	人為	A		
SK13	C5	角丸長方形	N-9° -W	224	110	43	鍋底状	無	人為	B	8C 土師器杯、弥生土器、古墳中期高杯、粘土塊	
SK15	C5	楕円形	N-4° -E	119	105	16	有段擂鉢状	無	自然	A		
SK17	C6	円形	N-41° -W	80	68	14	皿状	無	自然	A		
SK18	C6	不整形	N-40° -W	95	80	33	U 字状	無	人為	A		
SK19	C6	不整形	N-48° -W	100	89	24	U 字状	無	自然	A		
SK23	C,D6	楕円形	N-5° -E	86	70	21	鍋底状	無	自然			
SK27	D7	円形	N-87° -E	75	64	23	鍋底状	無	自然	A		
SK28	D7	円形	N-69° -E	91	80	14	皿状	無	人為	A		
SK29	D7	円形	N-37° -E	83	77	13	皿状	無	人為	A		＞ SK30
SK30	D7	楕円形	N-90° -E	91	70	23	U 字状	無	人為	A		＜ SK29
SK34	D7	方形	N-82° -E	72	62	26	鍋底状	無	人為	B		
SK35	D6,7	楕円形	N-90° -E	102	83	36	鍋底状	無	人為	C		
SK36	D6	楕円形	N-24° -E	109	92	22	鍋底状	無	人為	B		
SK37	D6	楕円形	N-3° -E	169	115	27	逆台形	無	人為	B		
SK38	D6	楕円形	N-74° -E	103	73	27	鍋底状	無	人為	C		
SK39	C,D5	楕円形	N-86° -E	72	60	29	擂鉢状	無	自然	B		
SK40	C5	楕円形	N-85° -E	80	65	28	逆台形	無	自然	B		
SK41	D6	楕円形	N-9° -W	(120)	103	60	不整形	無	自然			＞ SK42
SK42	D6	楕円形	N-28° -W	(150)	116	26	皿状	無	自然		弥生中期甕	＜ SK41
SK43	D5	楕円形	N-18° -E	108	90	19	逆台形	無	人為	B		
SK44	D5	楕円形	N-62° -W	(90)	72	18	皿状	無	人為	B・C		SK45
SK45	D5	楕円形	N-40° -E	(98)	81	17	逆台形	無	自然	A・B		SK44
SK47	D5	楕円形	N-85° -E	75	65	40	擂鉢状	無	人為			
SK48	C5	楕円形	N-59° -E	75	57	19	皿状	無	人為	B		
SK49	C,D5	楕円形	N-60° -W	104	78	20	逆台形	無	自然			
SK50	C4,5	角丸方形	N-41° -W	155	140	14	逆台形	無	人為	B		
SK51	C4	楕円形	N-34° -E	70	60	18	逆台形	無	人為	B		
SK52	C4,5	円形	N-15° -E	105	110	16	逆台形	無	人為	A		
SK53	D4	楕円形	N-28° -W	85	63	20	U 字状	無	人為	A		
SK54	D4	楕円形	N-8° -W	90	74	28	鍋底状	無	人為	A		
SK55	D4	楕円形	N-4° -E	80	60	24	鍋底状	無	人為	A		

SK56	D5	角丸方形	N-57° -E	166	120	24	鍋底状	無	自然	A		
SK57	D4	円形	N-40° -W	65	60	22	鍋底状	無	人為	A		
SK58	D4	楕円形	N-35° -E	138	(100)	25	鍋底状	無	人為	B		P35
SK60	D4,5	楕円形	N-48° -E	135	115	19	皿状	無	人為			
SK62	D,E4,5	円形	N-56° -W	110	(80)	22	皿状	無	人為	B		P81
SK63	E5	円形	N-22° -E	(130)	126	22	U字状	無	人為	B		SK64, ＞P38
SK64	E5	不整形	N-74° -E	(185)	150	17	皿状	有	自然	B	筑波変成岩	SK63,P38
SK65	E4	楕円形	N-14° -E	188	139	47	U字状	無	人為	B		
SK66	E4	楕円形	N-18° -E	157	97	14	皿状	有	自然	B		＜P73
SK67	E4,5	円形	N-37° -E	71	65	18	鍋底状	無	人為	B		
SK68	E5	円形	N-12° -W	84	78	16	鍋底状	無	人為	B		
SK69	E5	楕円形	N-7° -E	72	50	13	鍋底状	無	人為	B		
SK70	E5	楕円形	N-70° -E	151	124	25	皿状	無	自然	B		
SK71	D,E5	円形	N-5° -E	63	60	17	鍋底状	無	人為	B		
SK72	D5	円形	N-2° -E	(66)	76	28	U字状	無	人為	B		＞SK73,P42
SK73	D5	円形	N-44° -W	(60)	56	18	U字状	無	自然	B		＜SK72
SK75	E6	楕円形	N-15° -E	76	61	15	鍋底状	無	人為	B		SK76
SK77	E6	円形	N-77° -E	70	65	14	鍋底状	無	自然	A		
SK79	E6	楕円形	N-4° -W	80	63	32	鍋底状	無	人為	B		
SK80	E6	楕円形	N-20° -E	106	90	36	不整形	有	人為	B		SK82
SK81	E,F6	楕円形	N-10° -E	87	63	19	逆台形	無	人為	A		
SK82	E6	楕円形	N-90° -E	128	(76)	43	不整形	無	人為			SK80
SK83	E5	円形	N-10° -W	53	48	15	皿状	無	人為	A		
SK84	E5	円形	N-86° -E	(70)	(63)	21	不整形	無	人為			SK87, ＜P74
SK85	E,F5	楕円形	N-23° -W	(115)	(94)	26	鍋底状	無	人為	A		＞SK86,SK87,P74
SK86	E,F5	不整形	N-98° -W	76	(22)	23	鍋底状	無	人為			＜SK85, ＜P75,P74
SK87	E5	不整形	N-86° -W	57	(47)	15	皿状	無	人為	B		SK84,85, ＞P76
SK89	E,F5	楕円形	N-44° -E	97	(53)	10	皿状	無	人為	A		＜P77
SK90	E5	楕円形	N-56° -E	155	105	15	皿状	無	自然	A		
SK91	E5	円形	N-50° -E	61	60	32	U字状	無	人為	B		
SK92	E5	円形	N-48° -E	85	82	19	鍋底状	無	人為	B		P37
SK93	F4	楕円形	N-40° -E	85	69	17	鍋底状	無	人為	A・B		P87
SK94	E4,5	楕円形	N-70° -W	102	75	18	皿状	無	人為	A		P93
SK99	E4,5	円形	N-61° -E	87	80	24	不整形	無	人為	A・B		
SK100	F4	楕円形	N-50° -E	70	53	23	鍋底状	無	人為	C		
SK101	E4	楕円形	N-16° -W	125	85	10	皿状	無	人為	A		＜P90
SK106	E4	楕円形	N-27° -W	130	93	15	鍋底状	無	自然	A		＜SK105, ＞107
SK107	E4	楕円形	N-22° -W	92	63	13	鍋底状	無	自然	A		＜SK106
SK108	F4,5	角丸長方形	N-13° -W	(60)	70	24	皿状	無	人為			＜P95
SK109	E3,4	円形	N-12° -E	91	80	10	皿状	無	人為	A	縄文磨石	＞P99
SK110	E3	楕円形	N-55° -E	(56)	(53)	18	鍋底状	無	人為	A		SK111, ＜P102
SK111	E3	円形	N-20° -W	90	85	15	鍋底状	無	人為	A		SK110, ＞P102
SK112	E3	楕円形	N-14° -W	65	52	11	皿状	無	人為	A		＞SK113
SK113	E3	楕円形	N-7° -E	(75)	59	14	鍋底状	無	人為	A		＜SK112
SK114	E3	楕円形	N-31° -E	120	90	20	鍋底状	無	人為	A		＞SD01
SK115	E3	楕円形	N-40° -W	103	76	27	鍋底状か	無	人為	A		
SK117	E3	楕円形	N-11° -W	101	67	20	鍋底状	無	人為	B		
SK118	E3	楕円形	N-20° -E	135	100	21	鍋底状	無	人為	A		
SK119	D,E3	不整形	N-35° -E	220	109	32	不整形	無	人為			
SK120	D4	楕円形	N-62° -E	80	65	21	U字状	無	人為	A		
SK121	E3	楕円形	N-45° -W	135	113	20	鍋底状	無	自然	A	縄文叩石	＞SK122
SK122	E3	円形	N-45° -W	(51)	105	16	鍋底状	無	自然			＜SK121
SK124	D3	円形	N-24° -E	117	100	22	不整形	無	人為	A		＞SK125
SK125	D3,4	楕円形	N-106° -E	(105)	120	16	皿状	無	自然	A		＜SK124, ＞126,135
SK126	D4	楕円形	N-94° -E	(80)	90	19	鍋底状	無	自然			＜SK125, ＞135
SK127	D4	円形	N-87° -E	58	(55)	21	U字状	無	人為	A		＜SK128
SK128	D4	円形カ	N-84° -W	57	(44)	12	皿状	無	人為	A		＞SK127
SK131	E3	円形	N-7° -W	55	45	21	擂鉢状	無	人為	A		
SK132	E3	楕円形	N-8° -E	113	102	28	逆台形	無	人為	A		SK156
SK134	E3	楕円形	N-87° -W	140	116	32	有段擂鉢状	無	人為	B		
SK135	D4	楕円形カ	N-46° -E	(70)	95	16	皿状	無	自然			SK125, ＜126
SK136	D3	楕円形	N-45° -E	139	(95)	23	鍋底状	無	人為	A		SK141,142,143
SK137	D3	楕円形	N-3° -E	164	124	28	鍋底状	無	人為	A		
SK138	E2	円形	N-18° -W	110	107	26	鍋底状	無	自然	A		
SK139	F5	円形	N-5° -E	(60)	60	18	鍋底状	無	人為	A		P97
SK141	D,E3	楕円形	N-60° -E	192	135	30	擂鉢状	無	人為	A・B		SK136, ＜140
SK142	D3	楕円形	N-67° -E	120	100	31	鍋底状	無	人為	A		SK136, ＞143
SK143	D3	円形	N-22° -W	67	59	30	鍋底状	無	人為	A		＜SK136,142, ＜144
SK144	D3	円形	N-33° -W	129	120	25	鍋底状	無	人為	A		
SK145	D3	楕円形	N-25° -W	141	(85)	47	鍋底状	無	人為	B		＞SK146
SK146	D3	楕円形	N-22° -W	147	100	45	鍋底状	無	人為	B		＜SK145, ＜P113
SK147	C3	楕円形	N-53° -W	182	104	30	皿状	無	自然	A		
SK148	C3	方形	N-50° -E	105	94	43	U字状	無	人為	C		＞SK159
SK149	C2	楕円形	N-26° -W	80	62	22	鍋底状	無	人為	A		＞P114
SK150	B3	楕円形	N-53° -E	127	105	40	鍋底状	有	自然			
SK151	D2	楕円形	N-65° -W	116	86	29	鍋底状	無	人為	A		
SK152	D2	楕円形	N-90° -E	123	110	30	鍋底状	有	人為	A		
SK153	D2	楕円形	N-7° -W	174	150	28	皿状	無	自然		縄文土器	＞SK154

SK154	D2	楕円形	N-51° -W	140	110	32	鍋底状	無	人為			＞ SD01, ＜ SK153
SK155	D2	円形	N-16° -E	85	73	33	鍋底状	無	人為	A		＜ P119, ＞ 120
SK156	E3	楕円形	N-4° -W	(82)	80	33	鍋底状	無	人為	B		＜ SK132
SK157	C2	楕円形	N-35° -W	135	100	34	鍋底状	無	自然	A	縄文石器剥片・繊維土器、古墳中期甕	
SK158	C2	楕円形	N-65° -W	115	86	25	皿状	無	人為	A		
SK159	C3	円形	N-73° -E	80	78	28	鍋底状	無	人為	A		＜ SK148, ＜ 160
SK160	C3	楕円形	N-44° -E	75	56	34	鍋底状	無	人為	A		＞ SK159
SK161	C3	楕円形	N-32° -E	125	95	31	鍋底状	無	人為	A		SK162
SK162	C3	角丸長方形	N-30° -E	60	43	22	鍋底状	無	人為	C	古墳前期土器	SK161
SK163	B2	楕円形	N-10° -W	100	88	28	鍋底状	無	人為		縄文条痕文土器	
SK164	B,C2	楕円形	N-33° -W	163	109	25	鍋底状	無	人為		縄文繊維土器	＞ SK165
SK165	B2	楕円形カ	N-30° -W	(91)	48	25	鍋底状	無	人為		縄文繊維土器・条痕文土器	＜ SK164
SK166	D,E2	楕円形	N-54° -W	180	153	42	鍋底状	無	人為			＞ P109, ＞ 112
SK167	F6	円形	N-80° -W	65	57	21	鍋底状	無	人為			
SK168	F6	楕円形	N-2° -W	80	55	12	皿状	無	自然			＞ SD01
SK169	F6	楕円形	N-53° -W	(174)	135	31	皿状	無	人為			＜ SD01
SK171	F6	楕円形	N-31° -W	(90)	57	15	皿状	無	人為			＜ SD01
SK172	F5	不整形	N-24° -W	(110)	149	13	皿状	有	自然			＜ SD01
SK173	G6	不整形	N-30° -E	86	57	29	U 字状	無	自然		縄文土器中期か	＞ SK174
SK174	G6	不整形	N-32° -W	(45)	(30)	28	鍋底状か	無	自然			＜ SK173
SK175	G5	楕円形	N-65° -E	210	186	22	皿状	無	人為			
SK176	F5	楕円形	N-75° -E	153	118	19	皿状	無	人為			
SK177	F,G4	楕円形	N-58° -E	107	75	29	不整形	無	人為	B		
SK178	G3	楕円形	N-28° -E	148	97	18	皿状	無	自然	A		
SK179	G3	楕円形	N-64° -W	96	80	16	逆台形	無	自然	A		
SK180	F3	楕円形	N-16° -W	150	94	14	不整形	無	自然	B		＜ P154
SK181	G2	円形	N-21° -E	(54)	98	19	皿状	無	自然	A		＞ P170,187
SK182	H2	楕円形	N-53° -W	182	70	53	擂鉢状	無	人為	B		
SK183	H2	楕円形	N-17° -E	78	60	16	鍋底状	無	人為		縄文条痕文土器	
SK184	I3	楕円形	N-68° -W	80	(55)	8	皿状	無	人為	A・B		＜ SZ01
P61	E5	楕円形		63	45	15	鍋底状	無	人為	A		
P89	E4	円形		90	70	20	逆台形	無	人為	B		
P90	E4	円形		61	(50)	7	皿状	無	人為	A		＞ SK101

*SK04 ～ 07、46、59，61，74、76、95 ～ 98、104、105、116、123、129、130、170 は欠番。SK59、61 は縄文土器が出土しているが自然地形の落ち込みと判断。SK14、16、20 ～ 22、24 ～ 26、31 ～ 33、78、88、102、103、133、140 はピットへ。
** 法量単位：cm
*** 重複関係：（新しい遺構）＞（古い遺構）、記号のないものは重複不明。

表 4　ピット一覧表

番号	Gr	平面形状	長軸	短軸	深さ	断面形状	柱痕跡	柱当り	分類	出土遺物	重複関係
P01	D3	楕円形	73	57	63	有段擂鉢状	有	有	B		＞ SI02
P02	B,C5	円形	51	40	19	皿状	無	無	A		
P03	C5	円形	50	40	26	U 字状	有	有	B		
P04	C5	円形	59	54	20	擂鉢状	有	無	B		＞ P05
P05	C5	円形	60	50	20	U 字状	有	無	B		＜ P04
P06	C5	楕円形	65	55	39	U 字状	有	無	C		
P07	B5	楕円形	69	55	40	U 字状	有	有	B	縄文条痕文土器	
P08	C6	不整形	95	82	34	U 字状	有	有	C		
P09	C6	円形	65	58	32	鍋底状	有	有	B		
P11	D7	円形	57	45	48	U 字状	有	有	B		
P12	D7	円形	(33)	30	21	U 字状	無	有	B		＞ P13
P13	D7	円形	40	(30)	20	U 字状	有	無	B		＜ P12
P14	D7	円形	45	43	18	鍋底状	有	無	B		
P15	D7	円形	38	35	46	U 字状	有	無	B		
P16	D7	円形	48	39	71	U 字状	有	有	B		
P17	D7	円形	65	40	21	U 字状	有	無	B		
P18	D7	円形	70	63	22	U 字状	有	無	B		
P19	D7	楕円形	48	40	41	U 字状	有	有	B		
P20	D6	楕円形	40	35	33	U 字状	有	有	B		
P21	C5	円形	58	54	59	U 字状	有	有	B		
P22	D4	楕円形	67	46	26	有段擂鉢状	有	無	B		
P23	D4	楕円形	52	43	21	鍋底状	有	無	B		
P24	D4	円形	58	55	23	鍋底状	有	無	B		
P25	D4	円形	52	(47)	24	鍋底状	有	無	B		P26
P26	D4	円形	57	53	24	有段 U 字状	有	無	B		P25
P27	D5	楕円形	78	55	15	鍋底状	有	無	B		
P28	D5	円形	56	56	29	有段 U 字状	有	有	B		
P29	D5	楕円形	45	40	24	U 字状	有	有	B		
P30	D5	円形	85	80	25	鍋底状	有	無	B		
P31	D5	楕円形	75	60	19	逆台形	有	無	A		
P32	D5	楕円形	65	42	21	逆台形	有	無	B		
P33	D5	楕円形	65	53	26	擂鉢状	有	無	B	縄文土器	
P34	D4	楕円形	77	52	21	鍋底状	有	有	B		
P35	D4,5	楕円形	98	(53)	38	擂鉢状	有	無	B		SK58
P36	E4	楕円形	90	70	23	皿状	有	無	B		
P37	E5	円形	66	55	21	鍋底状	有	無	B		SK92
P38	E5	円形	60	53	32	不正形	無	有	B		＜ SK63,64
P39	D5	円形	80	72	49	U 字状	無	有	B		
P40	E5	円形	69	52	57	擂鉢状	有	有	B		

P41	D5	円形	46	36	46	U 字状	有	有	B		
P42	D,E5	円形	(60)	60	21	鍋底状	有	無	B		SK72
P43	E6	楕円形	63	40	19	有段擂鉢状	有	無	B		
P44	E6	円形	36	34	57	U 字状	有	有	B		
P45	E5	楕円形	(37)	35	19	皿状	無	有	B		＜ P46
P46	E5	楕円形	58	48	28	U 字状	無	無	B		＞ P45
P47	E6	円形	70	60	12	不整形	有	無	B		
P48	E6	円形	59	53	39	擂鉢状	有	無	B		
P49	E6	円形	36	32	16	鍋底状	有	無	C		
P50	E6	円形	47	37	11	逆台形	有	無	C		
P51	E6	円形	47	40	18	擂鉢状	有	有	C		
P52	E6	円形	55	(48)	13	皿状	無	有	C		＜ P53
P53	E6	円形	50	45	21	有段 U 字状	有	有	C		＞ P52
P54	E6	楕円形	74	47	15	鍋底状	無	有	B		
P55	E5,6	楕円形	92	69	14	鍋底状	有	無	B		＞ P59
P56	E5	円形	40	37	24	U 字状	有	有	B		P70
P57	E7	円形	80	82	37	擂鉢状	有	無	C		
P58	E7	円形	74	64	68	有段 U 字状	有	有	C	古墳前期壺	
P59	E5	楕円形	(86)	87	67	擂鉢状	有	有	C		＜ P55
P60	E7	楕円形	103	80	44	有段擂鉢状	有	有	C		
P62	E5	円形	60	52	17	U 字状	無	無	C		
P63	E5	円形	57	50	14	鍋底状	無	有	B		＜ P64
P64	E5	楕円形	(43)	53	17	U 字状	有	有	B		＞ P63
P65	E5,6	楕円形	(62)	58	29	U 字状	有	有	B		＞ P66
P66	E5,6	円形	185	76	30	擂鉢状	有	有	B	古墳前期土器	＜ P65
P67	E5	円形	50	(40)	18	鍋底状	無	無	B		P85
P68	E5	円形	60	63	18	鍋底状	有	無	A		＞ P69
P69	E5	円形	75	(55)	16	鍋底状	有	無	A	縄文土器	＜ P68
P70	E5	楕円形	(30)	21	34	ロート状	有	無	A		P56
P72	E5	楕円形	80	50	22	皿状	有	無	B		
P73	E4	円形	32	27	30	U 字状	無	無	A		＞ SK66
P74	E,F5	楕円形	(56)	(48)	28	鍋底状	有	無	B		＞ SK84
P75	F5	楕円形	88	(75)	23	鍋底状	有	有	A		＞ SK86
P76	E5	円形	50	(33)	14	皿状	無	無	B		＜ SK87
P77	E,F5	楕円形	75	(58)	20	不整形	有	無	B		＞ SK89
P78	E5	円形	65	(65)	13	鍋底状	有	無	B		＞ P79
P79	E5	楕円形	128	(79)	18	不整形	有	無	B		＜ P78
P80	E5	円形	69	56	17	不整形	有	無	B		
P81	E4	円形	85	(70)	22	不整形	有	無	B		SK62
P82	F5,6	円形	39	39	16	U 字状	有	無	B		
P83	F5	円形	64	57	14	皿状	有	無	B		
P84	E5	円形	52	(43)	18	鍋底状	無	無	B		＜ P85
P85	E5	楕円形	80	60	19	鍋底状	無	無	B		P67, ＞ 84
P86	F5	円形	64	53	38	U 字状	無	有	C		
P87	F4,5	円形	47	32	20	U 字状	有	無	B		SK93
P88	E4	円形	60	53	51	擂鉢状	無	有	B		
P91	E4	楕円形	58	45	51	ロート状	無	有	C		
P92	E4	円形	92	85	25	皿状	有	無	B		
P93	E5	円形	54	52	20	鍋底状	有	無	B		SK94
P94	E4	円形	47	40	14	逆台形	無	無	B		
P95	F4,5	楕円形	110	80	46	不整形	無	無	B		＞ SK108
P96	F5	円形	73	63	39	U 字状	無	有	C		
P97	F5	楕円形	(60)	41	55	U 字状	有	有	C		SK139
P98	E4	円形	51	55	57	U 字状	有	有	C		
P99	E3,4	円形	40	(30)	9	皿状	無	有	A		＜ SK109
P100	E3	円形	86	71	13	皿状	有	無	A		
P101	E3	円形	50	43	9	皿状	有	有	A		
P102	E3	楕円形	(94)	65	16	逆台形	無	無	A		＞ SK110, ＜ 111
P104	E3	円形	44	42	16	擂鉢状	有	無	B		
P105	E3	円形	(44)	45	16	不整形カ	無	有	B		
P107	D3	円形	59	(50)	17	皿状	無	無	B		＜ SK119
P108	E3	楕円形	71	60	24	U 字状	有	有	B		
P109	D,E2	円形	(60)	95	35	鍋底状	無	無	B		＜ SK166
P110	D2,3	円形	53	50	34	逆台形	無	有	B		
P112	D2	円形	(46)	64	42	不整形	有	有	B		＜ SK166
P113	D3	円形	73	58	22	不整形	有	無	B		＞ SK146
P114	C2,3	円形	45	(36)	12	逆台形	無	無	B		＜ SK149
P115	C2	円形	29	29	17	U 字状	無	有	B		
P116	D2	楕円形	65	55	29	鍋底状	有	無	B		
P117	D2	円形	75	75	37	U 字状	有	有	B		
P118	D2	円形	54	52	28	U 字状	無	有	A	縄文条痕文土器	
P119	D2	円形	61	55	29	鍋底状	有	有	B		＞ SK155
P120	D2	楕円形	75	(60)	27	鍋底状	有	無	B		＜ SK155
P121	E3	円形	56	50	29	U 字状	有	有	B		
P122	B2	円形	51	50	29	U 字状	有	有	B		
P123	B,C2	楕円形	85	65	42	鍋底状	有	有	B	縄文条痕文土器・礫石器	
P125	F6	楕円形	57	35	11	皿状	有	無	B		
P126	F6	円形	41	39	13	U 字状	有		A		
P127	F6	円形	50	41	21	U 字状	無	有	B		
P128	F5	楕円形	36	29	16	擂鉢状	有	無	B		
P129	G5	円形	38	34	19	U 字状	無	無	B		
P130	G5	楕円形	66	46	32	U 字状	有	無	B		

P131	G5	円形	44	43	14	U 字状	有	無	A		
P132	G5	円形	45	48	21	U 字状	有	無	A		
P133	G5	円形	35	34	21	U 字状	有	無	B		
P134	G5	円形	47	44	17	U 字状	有	無	B		
P135	G5	楕円形	53	(42)	22	U 字状	無	無	B		＜ P136
P136	G5	円形	52	(44)	15	鍋底状	有	無	B		＞ P135
P137	F5	楕円形	58	45	12	逆台形	有	無	B		
P138	G4	円形	(36)	38	17	鍋底状	無	無	B		＜ P139
P139	G4	円形	35	37	17	鍋底状	有	無	B		＞ P138
P140	G3	円形	50	48	17	U 字状	有	無	B		
P141	G4	円形	40	33	13	皿状	有	有	B		
P142	G4	円形	(65)	63	11	逆台形	有	無	B		
P143	F4	楕円形	56	48	16	不整形	有	無	B		
P144	F,G3	楕円形	80	66	52	擂鉢状	有	有	B		
P145	F3	楕円形	78	621	20	不整形	有	無	B		P191
P146	G3	楕円形	47	39	19	U 字状	有	無	B		
P147	G3	円形	40	35	14	鍋底状	有	無	B		
P148	F3	円形	49	47	20	鍋底状	有	無	B		
P149	F2	円形	50	50	23	U 字状	有	有	B		
P150	F3	楕円形	74	53	71	ロート状	有		C		
P151	G3	不整形	65	(34)	46	U 字状	有	有	B		＜ P152
P152	G3	不整形	(45)	37	22	鍋底状	無	有	B		＞ P151
P153	F3	楕円形	70	61	19	皿状	有	無	B		
P154	F3	円形	58	51	22	鍋底状	有	無	B		＞ SK180
P155	F2	円形	47	40	20	擂鉢状	有	無	B		
P156	F2	楕円形	60	50	15	逆台形	有	無	B		
P157	F2	楕円形	52	44	34	ロート状	有	無	B		
P158	F2	楕円形	(30)	60	37	U 字状	有	無	B		＜ P159, ＞ 193
P159	F2	円形	(47)	53	36	不整形	無	無	B		＞ P158, ＞ 160
P160	F2	円形	(30)	45	34	鍋底状	無	有	B		＜ P159
P161	F2	円形	(45)	50	31	鍋底状	有	有	B		＞ P162,163
P162	F2	円形	41	(30)	30	鍋底状	無	有	B		＜ P161
P163	F2	円形	40	(37)	16	U 字状	有	無	B		P161
P164	F2	円形	(45)	54	26	U 字状	有	無	B		＜ P182
P165	F2	楕円形	90	65	21	鍋底状	有	有	B		
P166	F2	楕円形	52	42	25	U 字状	有	有	B		
P167	F2	円形	54	53	28	有段 U 字状	有	無	B		
P168	G2	楕円形	55	41	17	鍋底状	有	無	B		
P169	G2	楕円形	50	43	12	鍋底状	無	無	B		
P170	G2	楕円形	63	47	20	擂鉢状	有	無	B		＞ SK181
P171	G2	楕円形	84	55	20	鍋底状	有	有	B		
P172	G2	楕円形	70	50	19	鍋底状	有	無	B		P173
P173	G2	円形	(68)	70	14	鍋底状	有	無	B		P172
P174	G2	円形	49	45	15	擂鉢状	有	無	B		
P175	H2	円形	(42)	50	17	逆台形	有	有	B		＜ P176
P176	G,H2	円形	52	48	18	逆台形	無	無	B		＞ P175
P177	H2	円形	51	(45)	14	擂鉢状	無	無	B		＞ P178
P178	H2	円形	44	(32)	16	鍋底状	有	無	B		＜ P177, ＜ 179
P179	H2	円形	50	(46)	17	鍋底状	有	有	B		＞ P178
P180	H2	円形	42	40	22	擂鉢状	有	無	B		
P181	F2	円形	43	45	25	U 字状	有	有	B		P182
P182	F2	円形	(62)	50	25	鍋底状	有	無	B		＞ P164,181
P183	H2	円形	65	57	14	皿状	有	無	B		
P184	H,I3	円形	(55)	55	30	U 字状	有	有	A	縄文磨石・焼石	＞ SZ01
P185	H,I3	円形	52	50	13	皿状	有	無	B		
P186	I3	楕円形	40	32	21	U 字状	有	有	B		
P187	G2	楕円形	85	65	49	有段 U 字状	有	有	B		SK181
P189	I3	不整形	(20)	45	12	U 字状	有	無	B		
P190	F3	円形	51	44	14	鍋底状	無	無	B		
P191	F3	円形	39	(35)	15	鍋底状	有	有	B		P145
P192	I3	円形	53	47	54	ロート状	有	有	B		
P193	F2	円形	(36)	40	23	鍋底状	有	有	B		＜ P158
P194	D2	楕円形	94	70	40	鍋底状	有	有	B		＞ SF01
P195	D2	楕円形	70	40	40	不整形	無	有	B		＞ SF01
SK14	B,C5	方形	110	85	67	ロート状			C	古墳中期壺	
SK16	C6	楕円形	81	60	34	擂鉢状			C		
SK20	D6	円形	74	60	46	擂鉢状		有	A		
SK21	C,D6	不整形	85	83	60	擂鉢状			C		
SK22	D6	不整円形	70	51	71	U 字状			C		
SK24	D6	楕円形	103	95	53	U 字状		有	C		
SK25	C7	円形	97	89	57	擂鉢状		有			
SK26	D7	角丸方形	85	65	44	U 字状			A・B		
SK31	D7	角丸方形	102	85	71	不整形		有	C		
SK32	D7	不整形	88	70	58	有段 U 字状		有	C		
SK33	D7	不整形	73	58	53	有段 U 字状		有	C		
SK78	E6	楕円形	78	60	29	U 字状			A		
SK88	F5	不整形	109	58	74	不整形			C		
SK103	E4	不整形	108	82	110	U 字状		有	C	中近世土器鍋	
SK133	E3	楕円形	117	75	53	ロート状			C		
SK140	D,E3	円形	(50)	(42)	23	有段擂鉢状			B		＞ SK141

*P10、71、103，106、111、124、188、196、SK102 は欠番。P103 は縄文土器、P124 は縄文磨石が出土しているが攪乱と判断。P61、89，90 は土坑へ。
** 法量単位：cm
*** 重複関係：（新しい遺構）＞（古い遺構）、記号のないものは重複不明。

付載　第 4 号竪穴住居跡出土絵画土器について

日本考古学協会員・元千葉市教育委員会　菊池健一

出土した絵画土器

前章でも触れられている様に、本資料は環濠掘削前に構築された第 4 号竪穴住居跡の覆土下層の焼土上に 2 か所に分かれて検出された。時期は弥生時代中期後半の宮ノ台式、つまり、市原市の根田代Ⅰ期（参 1）に当たると考えられる。

絵画土器理解にあたって

佐原 真氏は畿内での絵画土器は銅鐸絵画との関係から発生し、上限は畿内第Ⅲ様式に始まり、下限は銅鐸祭祀の終焉する畿内第Ⅴ様式までとされる（参 2）。それは、絵画土器が抽象化されて、第Ⅴ様式以降に記号となるからである。これを鳥形に例えて解説すると、韓国では「いにしえより非常に神聖な存在として扱われてきた。つまり、鳥は天空を飛び回りながら、天と人間を結び付けてくれる媒介であり、天の化身として豊穣をもたらしてくれるもの」という（参 3、註 1）。つまり、その時代を背景にある共通理解を、まずは鳥という絵によって表現することに始まり、ついで絵に現される意味をシンボル化した三叉文記号となったと理解できる。

単独で表される絵画と並列して表される絵画

土器に絵画を描く方法は単独で表される場合といくつかの絵画が並列して描かれる場合とがある。後者を並列的構図という。和唐地遺跡例はいくつかの絵画が集まって描かれる並列的構図である。唐古・鍵遺跡を調査した藤田三郎氏によると、同遺跡を中心とした畿内では並列的構図が多いとされる（参 4、図 27　参 16 より転載）。

図 27　唐古・鍵遺跡 22 次 SK-101
絵画土器 001
（田原本町教育委員会）

畿内以東での並列構図は、東海圏では三重県の鈴鹿市上箕田遺跡の壺形土器の肩部に「鹿・狩人・鳥？」（参 2）。津市六大Ａ遺跡の台付壺の肩部に「龍と蛇」（参 5）、松阪市（旧一志郡嬉野町）小谷赤坂遺跡の壺に「鹿・舟」（参 6）が描かれている。静岡県では浜松市角江遺跡の口縁部に「連なる鹿」が描かれた甕と「龍と矢印？」が描かれた壺がある（参 7）。北陸の弥生時代中期後半の小松市八日市地方遺跡で「シカの群れと狩人が描かれた」例や、新潟県では加茂市石川遺跡出土と伝えられる古墳時代前期の坩に「猪？・狩人」が描かれている（参 8）。関東では弥生中期後半の「鹿・人？・鳥」が描かれた稲荷台地遺跡群引地脇遺跡第 1 地点出土の壺（参 9）、後期末の山下上遺跡に「鹿と鹿に矢を射かける人？」が描かれた甕（参 10）、中期後半の壺に「鳥と円」が描かれた逗子市持田遺跡の例が知られる（参 11）が、土器に絵を描くことは希少であり、さらに並列例は希少である。

土器製作と記号線刻の関係・描法

和唐地遺跡例の記号は粗製の小型鉢の胴部の内・外面に描写されており、絵画・線刻を、土器を作り上げてから描いたものではなく、焼成前に描いている。土器の器面はハケ調整を施し、さらに絵を描くために

器面をナデ調整する。施文工具は線刻を観察すると沈線の中に条線と端末には「U」字状の当たりが見られるため、細い竹管状の工具を用いたものと推定される。沈線の描き方を見ると左からの右への工具の移動が認められ、後に述べる意匠の流れ（並列的構図）にも左から右への流れが認められる。つまり、本土器の製作者は右利きと考えられる。

絵画を何のために描くのかについて、藤田（参 4）は「まず、描く目的は第三者に絵画を見せるためではなく、土器に絵画を描く行為が重要であって、土器に絵画の持っている意味を封じ込める行為。つまり、土器製作者が、その後に執り行われる祭祀の内容を想定して土器を作り、絵画を描いたもので、マツリの場に供えられた後は、日常の土器として利用される」。祭祀の終了した後、「日常の土器として使われる時に初めて他者の目に触れるわけで、描かれた絵画・記号に共通認識があるとすれば、その意味は他の人にも通じるはずである。」と言う、本資料にも同じ意味があったと理解できる。

記号の意匠

弥生時代から古墳時代の絵画の素材には、人と動物（鳥・鹿・スッポン・魚）、器財（建物、船、武器）、空想上の動物である龍がある（参 12）。本資料には以下の 6 つの絵画が並列して描かれていると理解できる。以下に各意匠について解説する（註 2、図 29）。

記号 1：右向きの魚が描かれる。右側が魚の頭で、左側に尾鰭の表現が見られる。類例には唐古・鍵遺跡第 48 次調査 SX-1102 絵画土器 089（魚）〔参 16p.46〕等がある。

記号 2：胴部外面上半に大きく 2 連の逆「U」字形を線刻し、この逆「U」字形直下に鳥の象徴とされる下向きの三叉文を描き、2 つの記号が縦列に組み合わされている。類例としては逆「U」字形の描かれた唐古・鍵 14 次 SK-106 記号土器 038（曲線：H-C_1）〔同 p.67〕と三叉文が描かれた同 33 次 SD-109 記号土器 030（直線：H-B”$_2$）〔同 p.65〕があり、両記号が組み合わされたものと推定される。

記号 3：やや斜行する逆「U」字形と斜行する線刻が組み合わされ、直弧文とみることもできようか悩むところである。類例としては唐古・鍵 63 次 SK-106 記号土器 078（直線・曲線の組合せ：H-E’$_1$）〔同 p.77〕が挙げられる。

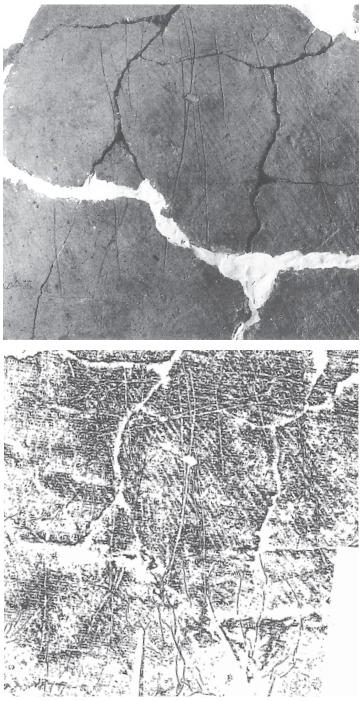


図 28　千葉市本郷向遺跡例
（縮尺約 2 分の 1）

記号 4：左側に 5 条、右側に 6 条、外殻上下を区画し、左側に頬を表すような線刻が見られるが、目らしい表現は認められない、黥面表現とみてよいだろうか（註 3）。弥生時代の黥面表現の古い例は、前期の香川県大川郡志度町鴨部川田遺跡に認められる（参 13）。

記号 5：縦線 10 条、横線 2 条の組み合わせで春成秀爾分類の建物を表現しているようだ（参 13 p.19、註 4）。市内では、花見川区犢橋町本郷向遺跡で古墳時代前期の住居跡から出土した壺に描かれた線刻画がある（参 17、図 28 参 15 菊池 2010 より転載）。類例としては唐古・鍵 73 次 SD-103 絵画土器 005（建物）〔同 p.22〕が挙げられる。

記号 6：土器の内壁にある三叉文は、記号 2 と同様に鳥を記号化したものと理解できる（参 12）。記号土器の中でも類例は多い。

絵画土器の意義

冒頭で触れたように、土器に絵画・記号を描く背景には弥生時代の銅鐸に絵を描く風習が根底にあり、土器に反映されたと理解されている（参 14）。絵画・記号土器は畿内、唐古・鍵遺跡 I 期、つまり、弥生時

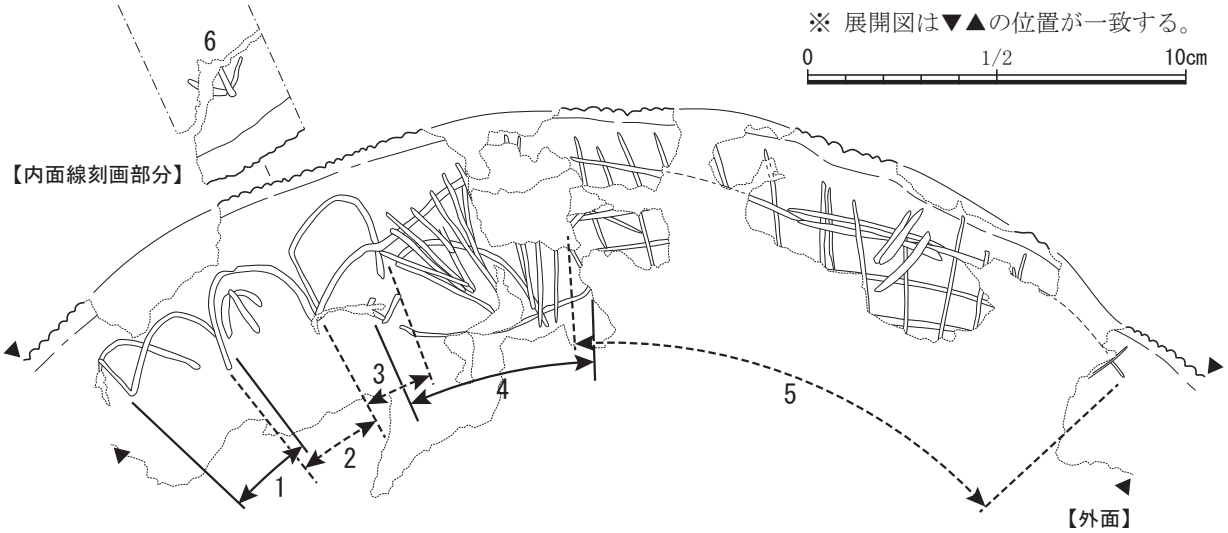


図 29　第４号竪穴住居跡出土鉢４の線刻画の各意匠

代前期に始まり、畿内圏では弥生時代の終わりとともに途絶えたとされている。絵画・記号土器の拡がりは九州から関東に及ぶ範囲で確認されており、関東圏では橋本裕行・諸橋千鶴子両氏が研究されている（参 17 ～ 20）。

関西圏を起源とする絵画土器が関東圏に波及した弥生時代中期後半のこの時期は、農耕社会が構築される段階である。今回の調査によって絵画土器が環濠構築直前の段階に千葉市の本遺跡で発見されたことは、以上述べてきた絵画土器の持つ意味の重要性もさることながら、地域にあっての意味を考える上で重要であり、本調査によって得られた貴重な成果の一つと言える。本稿では調査成果の一つを解説したが、より深い考察は次の機会に行う予定である。（2023 年 12 月 1 日脱稿、18 日修正）

調査協力者

田原本町教育委員会、藤沢市教育委員会郷土歴史課、石川日出志、植木 武、宇都洋平、
小林 嵩、齋藤弘道、設楽博己、清水琢磨、菅崎幸一、髙花宏行、中島郁夫、藤田三郎、
穂積裕昌、諸橋千鶴子（50 音順、敬称略）

註

（註 1）「三国志」魏書東夷伝の弁辰条「嫁娶禮俗男女有別　以大鳥羽送死其意欲使死者飛揚」「婚姻や礼儀、風俗に男女の区別がある。大鳥の羽を使って死者を送る。死者を高く飛び上がらせようと望んでそうするのである。」とあり、死者の魂が天に昇るというのは北方系の発想で、記紀にも日本武尊が白鳥になって昇天するという記事がある。

（註 2）ここで解説する各意匠は参考文献 16 の『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ』と突合し、この枠で捉えきれない場合には参考文献 12・13・14 等と比較検討して解説した。この根底にある認識は「記号のあるところ、体系があるという理解があり、記号文の分布圏にあっては記号を通じて一つの共通認識があった。」（参 4）に共感する。
なお、参考文献 16 は Web サイト「全国遺跡報告総覧」で公開されているので参照願いたい（2023 年 12 月 1 日閲覧）。
ttps://sitereports.nabunken.go.jp/88769

（註 3）黥面表現とみる解釈は、2023 年 10 月 29 日に開催された国立歴史民俗博物館友の会 2023 年度第 1 回考古学講座「顔の古代史」の折、講師を務めた設楽博己氏に伺ったところ、土器を反転させて見た場合、上下の弧線が顔の輪郭線、放射条の表現が黥面表現と理解できる。また、黥面表現の起源は縄文時代中期の黥面表現につながるとのご教授をいただいた。

（註 4）基本的には春成秀爾氏の高床倉庫から直線形記号へ（参 13）の系列上に沿って理解できるとも考えられるが、本地域における変容の姿として「柵」等を表していると理解した。また、本年 11 月 20 日に諸橋千鶴子氏より格子状の意味について伺ったところ、「格子はドーマン（蘆屋道満の印型）に辿り着き、これは平安時代の陰陽師のことですが、遙か弥生時代にもその原型が辿れるのではないかと考える。伊勢や志摩地方の海女は海難から身を守るために、これらの印型を手拭等に縫い付けて海に潜ったという民俗例が残っており、格子は身を守る、災いを遠ざけるという意味かと思います。」とのご教授をいただきました。その背景を通して物を見るという考え方を尊重したく、ここに掲載する。

参考文献

（参 1）　財団法人市原市文化財センター　2005『財団法人市原市文化財センター調査報告書 92：市原市根田代遺跡』財団法人市原市文化財センター

（参 2）　佐原　真　1980「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』第 66 巻第 1 号

（参 3）　朴正守　2004「文化の場」『大成洞古墳博物館展示案内図録』p.51

（参 4）　藤田三郎　1982「弥生時代の記号」『同志社大学考古学シリーズⅠ　考古学と古代史』p.133

（参 5）　穂積裕昌 1995「“絵画土器”見つかる！！」『三重県埋文センター通信 みえ』No.16

（参 6）　原田恵理子 1998「この絵何の絵？」『三重県埋文センター通信 みえ』No.25

（参 7）　佐野五十三他　1996『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 69：角江遺跡Ⅱ　遺物編1（土器・土製品）【別冊図版】』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 第 112 図

（参 8）　伊藤秀和　2022「伝石川遺跡出土の古墳時代線刻画覚書」『加茂郷土誌第 40 号』

（参 9）　安藤広道編 2011『大地に刻まれた藤沢の歴史Ⅲ～弥生時代～』藤沢市

（参 10）山神下遺跡発掘調査団　1989『山神下遺跡』相武考古学研究所

（参 11）赤星直忠　1975『逗子市文化財調査報告書第 6 集 持田遺跡調査報告書（本文編）』

（参 12）金関恕・春成秀爾　2005『道具の考古学―佐原真の仕事 2』岩波書店
金関恕・春成秀爾　2005『美術の考古学―佐原真の仕事 3』岩波書店

（参 13）春成秀爾　1991「絵画から記号へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 35 集

（参 14）佐原　真　1997『歴博フォーラム 銅鐸の絵を読み解く』小学館

（参 15）菊池健一　2010「千葉市出土の絵画文土器」『房総の考古学 史館終刊記念』
菊池健一　2020「甕に描かれた絵画」『佐倉市史研究』第 33 号

（参 16）藤田三郎　2015『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ　土器編 1（絵画・記号・文様）』田原本町教育委員会

（参 17）橋本裕行　1988「東日本弥生土器絵画・記号総論」『橿原考古学研究所論集』第八

（参 18）諸橋千鶴子　2009『赤坂遺跡』三浦市教育委員会

（参 19）諸橋千鶴子　2015「第 14 次調査 B1 地点出土記号文土器について」『赤坂遺跡』赤坂遺跡調査団

（参 20）諸橋千鶴子　2023「土器に見る記号文について再考」『横須賀考古学会 研究紀要』第 10 号

（参 21）田原本町教育委員会　2009『弥生の絵画～唐古・鍵遺跡と清水風遺跡の土器絵画～』田原本の遺跡 4

1. 調査風景（第１号竪穴住居跡）

写真図版 2

1. 調査区全景　　（上が北）

1. SI01　遺物出土状況　（南東から）

2. SI01　A セクション　（西から）

3. SI01　遺物出土状況　（北東から）

4. SI01　完掘状況　（南東から）

5. SI01　P1 セクション　（北東から）

写真図版 4

1. SI02　完掘状況　（南東から）

2. SI02　セクション　（北から）

3. SI02　遺物出土状況　（東から）

4. SI02　P2　完掘状況　（南東から）

5. SI02　炉　遺物出土状況　（南から）

1. SI03　完掘状況　（南東から）

2. SI03　セクション　（南東から）

3. SI03　遺物出土状況　（東から）

4. SI03　P1　完掘状況　（南東から）

5. SI03　P2　完掘状況　（南東から）

写真図版 6

1. SI04　完掘状況　（南東から）

2. SI04　遺物出土状況　（北東から）

3. SI04　P1　完掘状況　（西から）

4. SI04　絵画土器（南群）出土状況（北東から）

5. SI04　絵画土器（北群）出土状況（北東から）

1. SD01　完掘状況　（C 区。左手は第４号竪穴住居跡）　（北西から）

2. SD01　高杯５出土状況　（南から）

3. SD01　F セクション　（南東から）

4. SF01　検出状況　（南東から）

5. SX01　完掘状況　（北西から）

写真図版 8

1. SZ01　完掘状況　　（上が北）

2. SZ01　完掘状況　　（南から）

1. SZ01　周溝 B セクション　北東　　（西から）

2. SZ01　周溝 B セクション　南西　（南東から）

3. SZ01　周溝 B セクション　南西　（北西から）

4. SZ01　周溝 C セクション　北西　（北東から）

5. SZ01　埋葬施設　木棺掘方完掘状況（西から）

6. SZ01　主体部　B セクション南半（南東から）

7. SZ01　埋葬施設墓壙完掘状況　　（西から）

写真図版 10

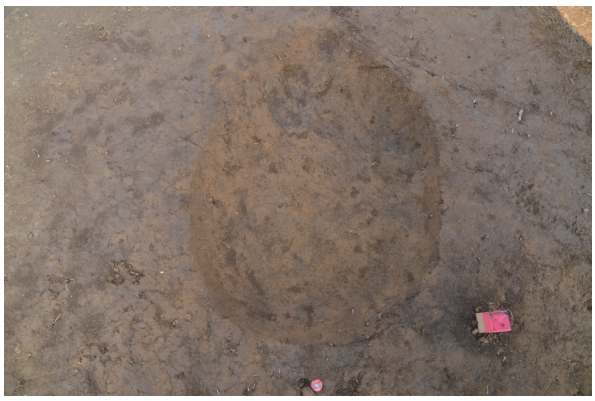
1. SK01　セクション　（南東から）

2. SK01　完掘状況　（南西から）

3. SK03　セクション　（東から）

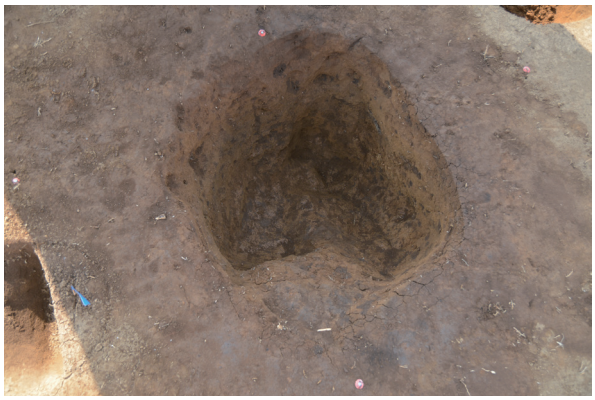
4. SK03　完掘状況　（南から）

5. SK08　セクション　（北西から）



6. SK08　完掘状況　（南西から）

7. SK14　セクション　（南西から）

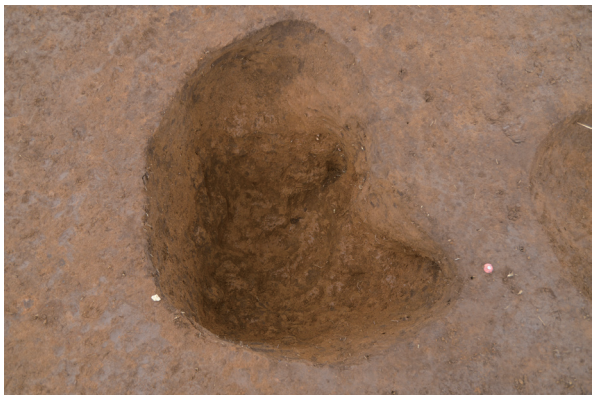


8. SK14　完掘状況　（東から）

1.SK41　セクション　（西から）

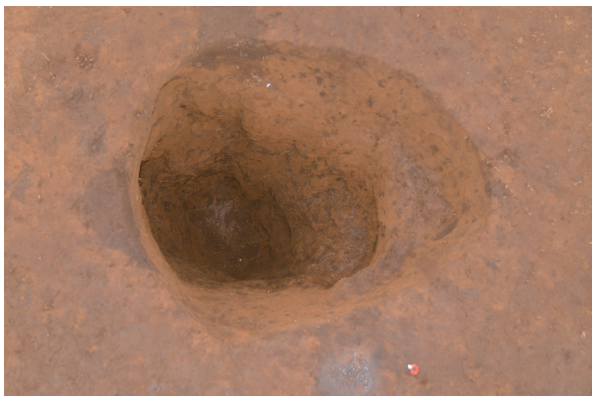
2.SK41.42　完掘状況　（南から）

3.SK88　セクション　（南から）



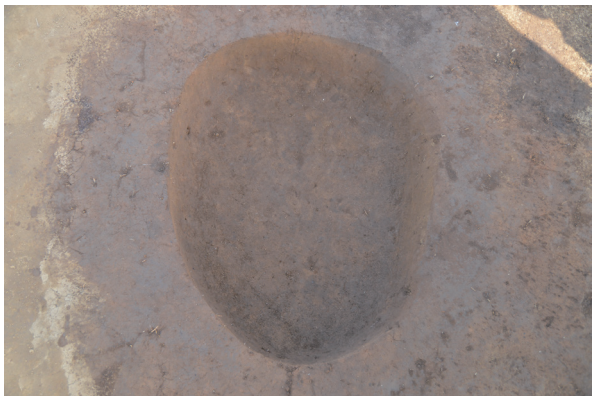
4.SK88　完掘状況　（東から）

5.SK103　セクション　（南から）



6.SK103　完掘状況　（東から）

7.SK151　セクション　（北西から）



8.SK151　完掘状況　（南西から）

写真図版 12

1. SK153　セクション　（南東から）

2. SK153　完掘状況　（北から）

3. SK162　セクション　（西から）

4. SK162　完掘状況　（南から）

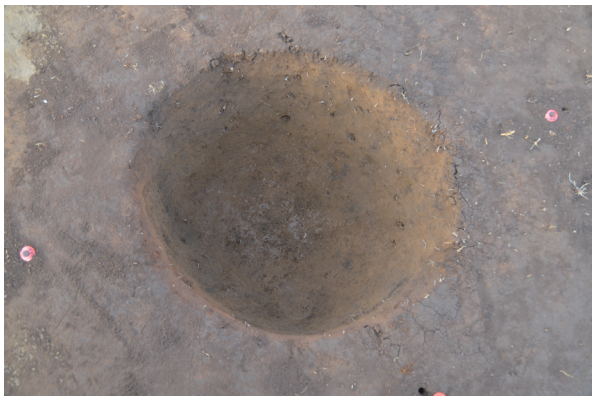
5. SK163　セクション　（南西から）

6. SK163　完掘状況　（南から）

7. SK164　セクション　（南から）

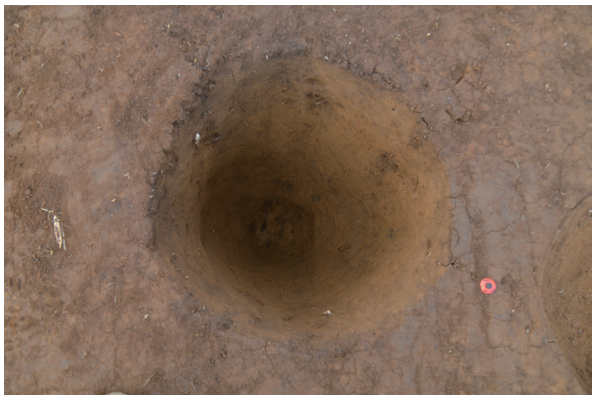
8. SK164　完掘状況　（南から）

1.P7　セクション　（南西から）



2.P7　完掘状況　（南から）

3.P21　セクション　（南西から）



4.P21　完掘状況　（南から）

5.P33　セクション　（南から）

6.P33　完掘状況　（南から）

7.P65.66　セクション　（北東から）

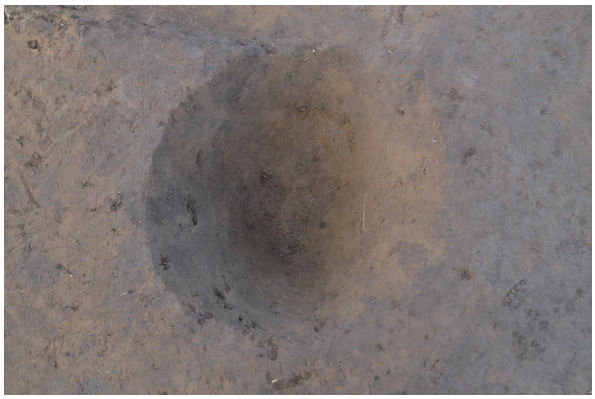
8.P66　完掘状況　（北から）

写真図版 14

1.P118　セクション　（北東から）

2.P118　完掘状況　（南から）

3.P184　セクション　（南東から）



4.P184　完掘状況　（南から）

5.SK13　遺物出土状況　（南から）

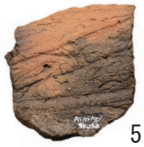
6.SK13　セクション　（東から）

7. 基本層序　（西から）

縄文時代土坑

4
(SK-153)

3
(SK-153)


5
(SK-163)

縄文時代遺構外

6
(C4)

7
(B3)

8
(SK157)

1
(E6)

3
(E3)

2
(SD-01・SZ-01)

4
(SI-02)

第２号竪穴住居跡（1）

1

2

16

写真図版 16

第 2 号竪穴住居跡（2）

第 3 号竪穴住居跡

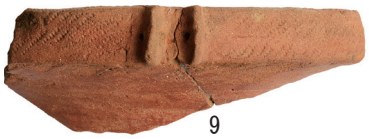
1

2

5

3

4


9

7

10

6

8

第 4 号竪穴住居跡

2

4

3

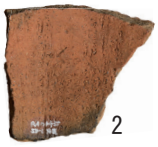
1

弥生時代土坑

1
(SK-01)

4 の外面展開写真 (S=1/2)

環濠跡


2

1

3

4

5

報告書抄録

ふりがな	ちばし わとうじいせき
書　　名	千葉市和唐地遺跡
副 書 名	宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	長谷川秀久
編集機関	株式会社ノガミ 関東支店 埋蔵文化財調査部
所 在 地	〒286-0045　千葉県成田市並木町221　TEL：0476-24-3218
発行年月日	令和6年（2024）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度	調査期間	調査面積	調査原因
わとうじいせき 和唐地遺跡	ちゅうおうくほしぐきちょう 中央区星久喜町938ほか	12101	中央区　47	北緯 35°　36′　05″ 東経 140°　08′　46″	20221208 ～ 20230524	3,400 ㎡	宅地造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和唐地遺跡	集落	縄文時代	土坑・ピット	土器・石器	木葉型尖頭器
	集落	弥生時代	竪穴住居跡3軒・環濠跡1条	土器・石器	環濠集落・絵画土器
	集落	古墳時代	竪穴住居跡1軒・古墳1基	土器	円墳（中期）
	包蔵地	奈良・平安時代		土器・灰釉陶器	
	包蔵地	中・近世		土器	

要　　約

1　縄文時代
草創期の木葉型尖頭器や土坑に伴い早期・条痕文系（茅山式）を主体として前期・浮島式、中期・加曽利E式、後期・加曽利B式土器がわずかに出土。

2　弥生時代
市域２例目となる環濠集落（中期・宮ノ台式）を確認。竪穴住居跡からは絵画土器が出土。また、荒海式とみられる土器を検出した。

3　古墳時代
古墳時代前期の竪穴建物跡１軒を検出。台地最高所で中期の円墳を確認した。

4　奈良・平安時代～中・近世
土器・灰釉陶器がわずかに出土。

千葉市和唐地遺跡
－宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書－
2024年（令和6）3月31日発行

編　　集　株式会社ノガミ
〒286-0045
千葉県成田市並木町221
電話 0476-24-3218

発　　行　千葉市教育委員会
〒260-0025
千葉市中央区問屋町1-35
電話 043-245-5962

印　　刷　株式会社ライフ
〒286-0044
千葉県成田市不動ヶ岡1128-15
電話 0476-24-1564